

在留外国人の宗教事情に関する資料集

—東アジア・南アメリカ編—

(文化庁「平成25年度宗教法人等の運営に係る調査」委託業務)

平成26年3月

文化庁文化部長官事務課

はじめに

本書は、「平成 25 年度宗教法人等の運営に係る調査」による成果である。昨年度に引き続いて今年度は、在留外国人の宗教事情について、有識者へのヒアリング及び文献から調査を行った。対象国・地域は、東アジアの 3 か国・地域（中国、台湾、韓国）、南アメリカの 2 か国（ブラジル、ペルー）の合計 5 か国・地域である。

1. 調査の目的

宗教法人制度は、宗教法人法に基づいて運用されているが、現代社会の急激な変化に伴い、従来までは想定していなかった事案が生じることもある。そのため宗教法人の様々な諸課題に対応すべく、円滑な宗務行政に資することを目的として、平成 24 年度より「宗教法人等の運営に係る調査」を開始することとした。この調査は、年次ごとに個別課題を設定して調査するものである。

本調査の目的等については、「宗教法人等の運営に係る調査要綱」（平成 24 年 5 月 10 日文化庁次長決定）に規定されており、次のとおりである。

1. 目的

我が国では、近年において大きな社会情勢の変化が見られ、内外の宗教団体の状況も多様化している。そのため所轄庁では、対応に苦慮する事案も多く、認証事務の遂行に大きな支障が生じている。円滑な認証事務を行うため、各種情報を収集して、基礎資料の作成を目的とする。

2. 調査事項

- ・宗教法人等に関する活動等
- ・宗教法人等に関する内部規則等
- ・宗教法人等に関する財務状況等
- ・宗教法人等に関する組織等
- ・その他認証事務を遂行する上で参考とすべき事項

3. 実施方法

本調査を実施するために学識経験者等に調査協力者として協力を依頼する。適宜に調査協力者会議を開催し、調査の対象と方法、調査事項の検討と結果の処理、並びに所要の事項等について協力を求める。

4. その他

この要領に定めるもののほか、本事業の実施に関し必要な事項は別に定める。

2. 課題の設定

「宗教法人等の運営に係る調査」は、各年度で個別課題について調査するものである。平成 24 年度及び平成 25 年度は、在留外国人の宗教事情を調査したが、本課題を設定した理由は、次のとおりである。

周知のように、近年の我が国においては在留外国人の増加が著しい。法務省の在留外国人統計によれば、平成 24 年 12 月 31 日現在での在留外国人の総数は 2,033,656 人であり、過去の数値と比較すると、20 年前の平成 4 年が 1,281,644 人、10 年前の平成 14 年は 1,851,758 人となっていることから、それは明らかである。

外国人が増加すると、彼らへの布教のために母国から日本に宗教団体が進出してくる場合が多く見られる。日本に拠点を置いた宗教団体の中には、礼拝の施設その他の財産を所有し、これを維持運用し、その他その目的達成のため、日本で宗教法人の認証を受ける場合がある。

所轄庁には、外国に拠点を置く宗教団体から宗教法人設立の相談が寄せられるようになってきているが、日本では余り知られていない宗教や宗教団体の場合もある。円滑な認証事務のため、担当者には、宗教団体が進出してきた当該国・地域の宗教事情に関する一般知識が求められる。しかしながら所轄庁の担当者にとって、宗教事情を調べるための最初の手掛かりを得ることは難しい。そこで主な国・地域を対象に、その宗教事情及び日本における宗教事情について調査を行った。個別の団体では、各々の事情は異なろうが、国・地域ごとの章立てで編集しているため、大まかな概要が把握できるように構成している。諸外国から日本に進出してきた宗教団体の背景を知るために、本書の活用を願いたい。

また本書では、宗教法人法における宗教団体の要件となっている「宗教の教義」「儀式行事」「(信者の)教化育成」(宗教法人法第 2 条)の 3 点を中心に、調査を実施した。同条には、「この法律において「宗教団体」とは、宗教の教義をひろめ、儀式行事を行い、及び信者を教化育成することを主たる目的とする左に掲げる団体をいう。」とあり、宗教法人の認証に際しては、宗教団体がこれらの要件を満たしていることが前提となるからである。

更に当該国の宗教事情の詳細について知りたいときは、本書巻末にある参考文献を閲覧されたい。資料を検索するときには、各都道府県等の公共図書館のホームページが公開しているオンライン利用者用蔵書目録(OPAC)を利用すると簡便である。

3. 調査対象国・地域の設定

本年度は、東アジアの3か国・地域、南アメリカの2か国の合計5か国・地域を対象としたが、調査の対象国を選定した理由を述べる。

平成24年度は、東南アジアと南アジアの8か国を調査した。平成25年度に東アジアと南アメリカを調査することで、日本に在留する外国人が出身とする上位の国・地域のほとんどを網羅したことになる。なお米国や英国などの北米や欧州の諸国は、知り得ることが可能な公知の情報が多いため、今回の調査からは除外した。

直近の在留外国人の総数は、前述のように2,033,656人（平成24年12月31日現在）であるが、上位18位までの国・地域のうち、今回までの調査対象を示すと次のようになる。調査実績について平成24年度の対象は「(24)」, 平成25年度の対象は「(25)」とした。

①	中国	652,555	(25)	⑩	ネパール	24,069	(24)
②	韓国・朝鮮	530,046	(25)	⑪	台湾	22,773	(25)
③	フィリピン	202,974	(24)	⑫	インド	21,653	(24)
④	ブラジル	190,581	(25)	⑬	英国	14,652	
⑤	ベトナム	52,364	(24)	⑭	パキスタン	10,597	(24)
⑥	ペルー	49,248	(25)	⑮	カナダ	9,006	
⑦	米国	48,357		⑯	オーストラリア	8,888	
⑧	タイ	40,130	(24)	⑰	バングラデシュ	8,622	(24)
⑨	インドネシア	25,530	(24)	⑱	フランス	8,455	

出典) 法務省「在留外国人統計表」(平成24年12月31日現在)

なお、今回の対象となるブラジルとペルーにおけるキリスト教について説明する。両国にはカトリック教徒が多く、当該国から日本に在留する者もその傾向を反映する。彼らは、日本のカトリック教会の外国語礼拝に参加することが多く、新たにカトリック系の宗教法人を設立する可能性は極めて低い。その理由として、カトリック教会は、ローマ教皇を頂点とした強固な組織構造となっていることが挙げられる。そのため本調査では、ブラジルとペルーのキリスト教については、今後宗教法人の認証を受ける可能性があるプロテスタント系の事情を重視して、必要に応じてカトリックも記述した。

なお、文化庁では、平成8年度から平成23年度まで、計4次にわたり「海外の宗教事情に関する調査」を行い、諸外国における宗教法制と税制に関する調査を実施した。平成12年度から平成15年度までの第2次調査では、本書で取り上げる韓国とブラジルを対象とした。当該の報告書は文化庁のホームページで公開しているため、本書と併せて参照されたい。ウェブサイトは巻末の参考文献に記載してある。

4. 協力者会議と調査手順

本調査の方法については、前掲の「宗教法人等の運営に係る調査要綱」に大枠を定めてある。詳細に述べると、本調査は次の手順で実施した。

まず文化庁から、6名の有識者に対して協力者の委嘱を行い、「宗教法人等の運営に係る調査」協力者会議が組織され、同会議にて調査の方針を策定した。その後、調査方針に基づき、委託業者の選定を行い、文化庁から三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社に調査業務を委託した。同社により5か国・地域の宗教事情に関する資料調査を行い、さらには当該国・地域から来日した外国人の宗教事情について、有識者からヒアリング調査を行った。以上の過程を経て、本書を作成したものである。なお本調査に係る事務は、文化庁文化部宗務課調査係が担当した。

協力者会議は、次の6名で編成し、本年度は2回の会議を開催した。

平成25年度「宗教法人等の運営に係る調査」協力者会議

	飯田 剛史	(大谷大学文学部教授)
(座長)	石井 研士	(國學院大學神道文化学部長、宗教法人審議会委員、 公益財団法人日本宗教連盟理事)
	石川 治子	(宗教法人カトリック中央協議会社会福音化推進部部長)
	高橋 正浩	(埼玉県総務部学事課総務・宗教法人担当主査)
	戸松 義晴	(浄土宗総合研究所主任研究員)
	三木 英	(大阪国際大学ビジネス学部教授)

5. 調査協力体制

第1部 概論編

本書の冒頭には、次の方々に原稿の執筆を依頼し、当該地域の事情について容易に理解できるように、概論を掲載した。なお、中央アメリカと南アメリカは宗教面で一体的な特徴を有することを考慮し、本稿では中南米を執筆対象とした。

東アジア	川上 新二	(岐阜市立女子短期大学国際文化学科准教授)
中南米	山田 政信	(天理大学国際学部地域文化学科教授)

第2部 各国・地域編

各章「現地における宗教事情」

各章における本国の宗教事情については、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社が文献資料から調査を実施し、執筆を担当した。

各章「日本における宗教事情」

各章における日本に移住してきた人々の宗教事情については、次の方々に対してヒアリング調査を実施した。

中国

仏教	陳 継東	(青山学院大学国際政治経済学部教授)
キリスト教	藤野 陽平	(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 研究機関研究員)
イスラーム	澤井 充生	(首都大学東京都市教養学部助教)
道教	山下 一夫	(慶應義塾大学理工学部准教授)

台湾

仏教	五十嵐 真子	(神戸学院大学人文学部人文学科教授)
キリスト教	藤野 陽平	(前掲)
道教	山下 一夫	(前掲)

韓国

仏教	宮下 良子	(大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員)
キリスト教	中西 尋子	(関西学院大学講師)
民族宗教等	佐々 充昭	(立命館大学文学部東洋研究学域教授)

ブラジル

キリスト教	山田 政信	(前掲)
-------	-------	------

ペルー

キリスト教	細谷 広美	(成蹊大学文学部国際文化学科教授)
-------	-------	-------------------

提供頂いた情報を基に、三菱UFJリサーチ&コンサルティングが文章の体裁を整え、インタビュー担当者の校閲を経た。

第3部 資料編

統計資料については、三菱UFJリサーチ&コンサルティングが収集し、図表として編集した。

委託先

本調査事業における委託先の体制は次のとおりである。

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 政策研究事業本部

大塚 敬 (公共経営・地域政策部
観光・防災・地域政策グループ長, 主任研究員)

橋本 和子 (研究開発第2部 (大阪) 研究員)

戸田 佑也 (研究開発第2部 (大阪) 研究員)

北 洋祐 (経済・社会政策部 (東京) 研究員)

赤木 升 (研究開発第2部 (大阪) 研究員)

6. おわりに

以上、本調査は多くの方々からの御協力を頂いた。関係各位には、厚く御礼を申し上げます。都道府県宗教法人事務担当者におかれては、円滑な宗務行政の推進に、本書が参考となれば幸いです。

(文中敬称略)

平成 26 年 3 月

文化庁文化部長宗務課長
萬谷 宏之

目次

はじめに	<i>i</i>
本書の構成	<i>ix</i>
各国・地域編の見方	<i>x</i>
第1部 概論編	
第1章 東アジア (担当:川上新一)	1
1. 地域事情	1
2. 宗教別の概要	2
第2章 中南米 (担当:山田政信)	11
1. 地域事情	11
2. 宗教別の概要 (ブラジルとペルーの事例を中心に)	13
第2部 各国・地域編 (担当:三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング)	
第1章 中国	19
1. 現地における宗教事情	19
1-1. 宗教の概要	19
1-2. 宗教生活 (仏教) の概要	26
1-3. 宗教生活 (キリスト教) の概要	29
1-4. 宗教生活 (イスラーム) の概要	32
1-5. 宗教生活 (道教) の概要	37
2. 日本における宗教事情	39
2-1. 在留外国人の概要	39
2-2. 宗教生活 (仏教) の概要	41 (協力:陳 継東)
2-3. 宗教生活 (キリスト教) の概要	43 (協力:藤野陽平)
2-4. 宗教生活 (イスラーム) の概要	45 (協力:澤井充生)
2-5. 宗教生活 (道教) の概要	47 (協力:山下一夫)
第2章 台湾	49
1. 現地における宗教事情	49
1-1. 宗教の概要	49
1-2. 宗教生活 (仏教) の概要	54
1-3. 宗教生活 (キリスト教) の概要	58
1-4. 宗教生活 (道教) の概要	62
2. 日本における宗教事情	65
2-1. 在留外国人の概要	65
2-2. 宗教生活 (仏教) の概要	67 (協力:五十嵐真子)
2-3. 宗教生活 (キリスト教) の概要	70 (協力:藤野陽平)
2-4. 宗教生活 (道教) の概要	72 (協力:山下一夫)

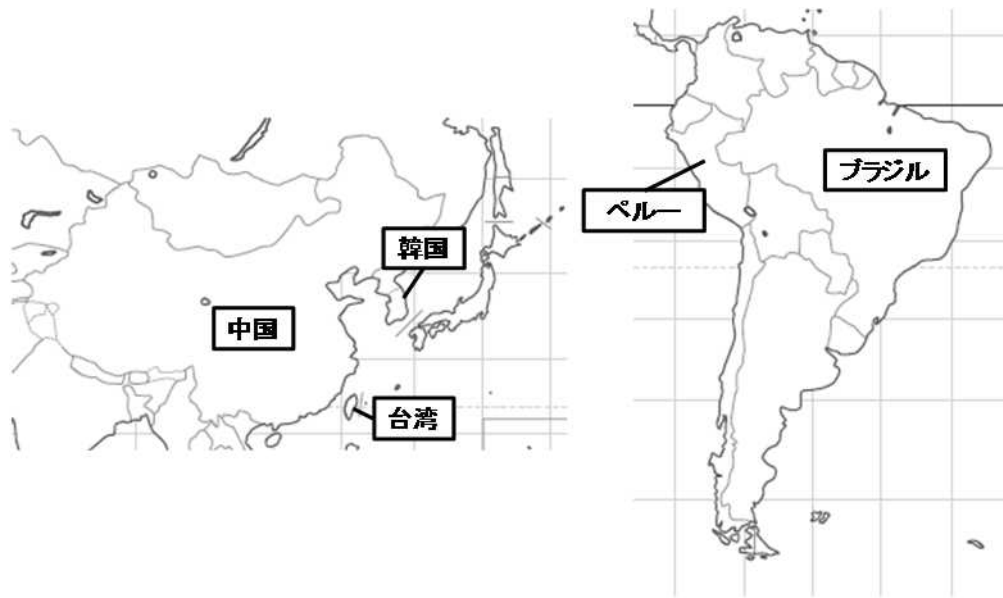
第3章 韓国	74
1. 現地における宗教事情	74
1-1. 宗教の概要	74
1-2. 宗教生活（仏教）の概要	78
1-3. 宗教生活（キリスト教）の概要	81
1-4. 宗教生活（民族宗教等）の概要	84
2. 日本における宗教事情	86
2-1. 在留外国人の概要	86
2-2. 宗教生活（仏教）の概要	88
2-3. 宗教生活（キリスト教）の概要	90
2-4. 宗教生活（民族宗教等）の概要	93
	(協力：宮下良子)
	(協力：中西尋子)
	(協力：佐々充昭)
第4章 ブラジル	95
1. 現地における宗教事情	95
1-1. 宗教の概要	95
1-2. 宗教生活（キリスト教）の概要	97
2. 日本における宗教事情	100
2-1. 在留外国人の概要	100
2-2. 宗教生活（キリスト教）の概要	102
	(協力：山田政信)
第5章 ペルー	104
1. 現地における宗教事情	104
1-1. 宗教の概要	104
1-2. 宗教生活（キリスト教）の概要	106
2. 日本における宗教事情	109
2-1. 在留外国人の概要	109
2-2. 宗教生活（キリスト教）の概要	111
	(協力：細谷広美)
第3部 資料編 (担当：三菱UFJリサーチ&コンサルティング)	
資料1 統計資料	115
1. 各国・地域の宗教人口統計概要	116
2. 総数及びアジア並びに南アメリカ全体の在留外国人・入国者数の 動向	118
3. 国・地域別の在留外国人・入国者数の動向	120
4. 地域別・在留資格別在留外国人数	125
資料2 重要用語解説	128
参考文献	130

本書の構成

本書は、第1部概論編、第2部各国・地域編、第3部資料編により構成されている。

第1部では、東アジア、中南米の宗教事情について概説した。第2部では、東アジアの中国、韓国、台湾と南アメリカのブラジル、ペルーを対象に本国・地域における宗教事情と日本における宗教事情について整理した。第3部では、統計資料や重要用語解説など本書を読む上で参考となる資料について掲載した。

図表 1 対象国・地域位置図



出典) <http://www.freemap.jp/>

図表 2 各国・地域における宗教人口の概況

	キリスト教		仏教
	カトリック	プロテスタント	
中国	—	—	—
台湾 (2012)	0.8%	1.7%	0.7%
韓国 (2005)	10.9%	18.3%	22.8%
ブラジル (2007)	64.6%	22.0%	
ペルー (2007)	81.3%	12.5%	

注) 各国・地域における宗教人口の詳細については第3部資料1に記載している。ただし中国については、公的機関による統計が確認できない。

出典) United Nations Statistics Divisions, *UNSD Demographic Statistics*. 『台湾内政統計年報』。台北駐日経済文化代表処 (<http://www.roc-taiwan.org/>)。Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística *2010 Population Census*.

各国・地域編の見方

第2部各国・地域編では、国・地域別に、下記の構成のとおり情報を整理した。必要に応じ、該当箇所を参照されたい。

構成	記載内容
<p>1 現地における宗教事情</p> <p>1-1. 宗教の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 宗教人口 (2) 宗教団体に関する制度 (3) 主要な宗教の概要 <p>1-2. 宗教生活の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 日常生活 (2) 祭事 <ul style="list-style-type: none"> ① 定期的な宗教行事 ② 冠婚葬祭 	<p>現地における主要な宗教や宗務行政について記述している。当該国・地域の宗教に係る概況を把握したい際に参照されたい。</p> <p>現地における人々の宗教生活について日常生活と祭事の二つの観点から記述している。在留外国人が本国・出身地域ではどのような宗教生活を送っていたのかを把握したい際に参照されたい。</p>
<p>2 日本における宗教事情</p> <p>2-1. 在留外国人の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 日本への渡航の傾向 (2) ネットワークとコミュニティ <p>2-2. 宗教生活の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 日常生活 (2) 祭事 <ul style="list-style-type: none"> ① 定期的な宗教行事 ② 冠婚葬祭 	<p>日本への渡航者数や渡航者の状況について記述している。当該国・地域からの在留外国人の概況を把握したい際に参照されたい。</p> <p>日本における宗教生活の状況や宗教活動において日本では実施が困難な点などについて記述している。当該国・地域からの在留外国人の日本での宗教生活を把握したい際に参照されたい。</p>

また各国・地域の宗教行事などは、インターネット上の動画サイト YouTube (<http://www.youtube.com/>) に多数の動画ファイルが掲載されている。適宜に、参考とされたい。

検索ワード例

- 「中国 佛学院」「台湾 佛教 寺院」「中国 天主教」「中国 基督教」
 「プロテスタント 洗礼」「イスラーム 礼拝」「イスラーム ハッジ」「清真寺」
 「台湾 媽祖」「道教 廟」

第 1 部 概論編

第1章 東アジア

川上 新二

1. 地域事情

現在の中華人民共和国（以下、中国）における宗教政策の基本法規は「宗教事務条例」であるが、その解説書である『宗教事務条例釈義』（北京：宗教文化出版社，2005年）では、主要な宗教として仏教、道教、イスラーム、カトリック、プロテスタントの五つがあげられている。儒教はあげられていない。外務省基礎データにおいて中国の総人口は約13億人と推計されているが、『宗教事務条例釈義』によれば、現在これらの宗教を信仰する者は合計で1億人を超えるという。同書による各宗教の信者数などは、次のとおりである。

仏教は漢語系仏教（漢訳仏典による大乘仏教）、チベット語系仏教（チベット仏教）、パリー語系仏教（上座仏教）に分けられるが、仏教信者数の統計をとることは難しく、これら三つの系統を合わせて仏教寺院は1万3,000か所、僧と尼僧は約20万人であるという。

道教は正一教と全真教の二大宗派に分かれるが、道教信者数の統計をとることも難しく、道教寺院は1,500か所、道士と女性道士は2万5,000人であるという。

イスラームについては現在約2,000万人のムスリムがおり、中国で清真寺と呼ばれるイスラーム寺院は3万2,000か所余り、イマームなどと呼ばれる宗教指導者は4万人余りいるという。

キリスト教については、カトリック（天主教）とプロテスタント（^{キリスト}基督教）が区別して分類されている。（台湾や韓国でも同様。）カトリックでは、中国はバチカンと断交しており、通常ローマ教皇によって認められる司教を1958年から1995年までに126人自選しているという。また、最近10年余りの間に900人以上の若い神父を育成し、現在の信者は約400万から500万人、聖堂は4,600か所余り、教職者は約4,000人であるという。一方、プロテスタントについては、信者は1,500万人を超え、教会は1万6,000か所余り、教会以外の活動場所は2万5,000か所余り、教職者は1万8,000人余りであるという。

台湾に関しては、外務省基礎データにおいて台湾の総人口は約2,332万人と推計されているが、台湾内政部統計年報の2012年「各宗教教務概況」によれば、宗教を信仰する者の合計は160万6,710人で、そのうち仏教信者16万5,749人（仏教寺院2,348か所）、道教信者82万1,271人（道教寺院9,422か所）、イスラーム7,968人（イスラーム寺院5か所）、カトリック信者18万6,622人（聖堂724か所、教職者1,760人）、プロテスタント信者39万6,229人（教会2,513か所、教職者4,410人）であり、それに加えて儒教信者818人（施設14か所）ともある。

大韓民国（以下、韓国）については、外務省基礎データにおいて韓国の総人口は約5,000万人と推計されているが、韓国統計庁による2005年の人口総調査（総人口4,704万1,434人）によれば、宗教を信仰する者の合計は2,497万766人で、そのうち仏教信者1,072万

6,463人、儒教信者10万4,575人、カトリック信者514万6,147人、プロテスタント信者861万6,438人であるという。韓国では道教、イスラームが項目としてあげられていない。道教に関しては、韓国でも文化の様々な面に道教の要素は見られるが、指導者や施設を伴う組織としては存在しておらず、道教信者と自認する者がいないためと考えられる。

なお、台湾や韓国では上記のように仏教、儒教、道教（台湾）の信者数が発表されているが、これらの国、地域の人々の実生活においては、儒教の考え方が世界観や人間観、生活規範の基礎とされながら、吉凶禍福のために仏教や道教にもかかわるといふ行動がとられているとみられ、それぞれの宗教の信者を自認する者以外にも、儒教、仏教、道教にかわりながら生活している者は多いと考えられる。中国で先述のように仏教や道教の信者数の統計をとることは難しいとされているのも、このためであると考えられる。

2. 宗教別の概要

2-1. 儒教

儒教は、先述のように現在の中国では宗教に含められておらず、儒教信者の数が報告されている台湾や韓国でも、他宗教に比べれば儒教信者を自認する者の数は多くない。しかし、宗教に含められずとも、また信者を自認する者の数は少ないとしても、儒教は中国、台湾、韓国において、世界観や人間観の基礎となっているものである。

儒教は孔子（前552-479）に始まる教説の体系といえるが、儒教の考え方によれば、天は人間に道徳性を賦与しており、人間はその道徳性を自覚して、それを実践していく責務もっている。孔子は天が人間に与えた道徳性として「仁」（人間らしさ、人間愛）を重視し、「仁」を養う最初の場が家庭であるとして、親子関係の倫理として「孝」を重視した。一方、孟子（前372-289）は「義」（社会的正しさ）を強調し、また、親子関係の倫理を拡充することで「孝」は「忠」になるという主張も表れたりした。

「孝」の実践が「礼」であり、具体的には葬送儀礼（葬礼）と祖先祭祀（祭礼）が重視された。葬送儀礼では5種類の喪に服する期間と喪に服すべき者の範囲が設定された（五服）。期間としては、子の父に対する3年間の服喪が最長のものでされ、また、喪に服すべき者の範囲としては、4世代前の祖（高祖）を同じくする者たちが、その範囲内の者が死亡した場合、自分と死亡した者とのつながりの遠近によってそれぞれ定められた期間、喪に服することとされた。喪の終了後は、1年に4回祖先祭祀を行った。天子と諸侯は、始祖と4世代前までの祖先を祀るものとされた。（なお、臣が君に対する服喪も3年間とされた。）

天から与えられた道徳性を実践しなければならないのは天子も同様であり、国を治める天子には、天から与えられた道徳性を具現化して理想世界を実現する責務があるとされた。「礼」は親子関係に基づく祭祀だけでなく、天や地への祭祀を実践することでもあり、天子は冬至に都の北郊で天を、夏至に南郊で地を、春分に東郊で太陽を、秋分に西郊で月を

祀るものとされた。現在の北京に残る天壇、地壇、日壇、月壇は明清代の祭祀場である。前漢時代には、天は人間社会のあり方に反応するという天人相関思想が形成され、天子の統治のあり方によって、天は瑞祥や災異でもって顕彰や譴責をあらわすとされた。

儒教では孔子や、堯、舜など古代の伝説上の名君が聖人として尊崇され、それら聖人が治めた、理想的であった時代の統治や生活を範とし、それに立ち返ることが求められたが、宋代になると、それら聖人に近づくこと、自分も聖人となることが主張されるようになった。このような考えを受けた朱子（1130-1200）も、読書などによって思索を深めて聖人に至ることを目指した。また、宋代では儒教を身につけた者が科挙を通じて官僚になるようになったが、官僚を輩出した一族は、親族が結束して優秀な人材を官界に送り込み、高級官僚の家柄を維持しようとした。その親族結束のためのモデルとして注目されたのが、同じ父系始祖から枝分かれした人々の集団である宗族という組織であり、宗族が形成されるなかで、宗族による冠婚葬祭の規範書として人々に受け入れられたのが、朱子の著『家礼』である。

朱子の学問は朱子学とよばれたが、一方、明代の王陽明（1472-1528）は、聖人になるためには自己に本来備わっている道徳的本質を自覚すればよいのであり、読書などによって知識を得るのではなく、日常の生活実践のなかで道徳的本生に目覚めることが重要であると主張した。このような王陽明の学問は陽明学とよばれる。

韓国では、朝鮮王朝期に朱子学が導入されて以来、儒教（朱子学）を生活規範として「東方礼儀の国」を自認してきた。韓国でも、始祖を同じくする父系親族によって一族が形成され、高級官僚を輩出する有力な一族たちは両班（ヤンバン）とよばれる上流階層をなした。朱子の『家礼』に基づいて祖先祭祀に努めるなど、儒教の教えをどれほど実践しているかが、それぞれの一族の評価となった。韓国には現在でも儒道会という儒者の全国組織がある。

なお中国では、儒教は文化大革命期に規制されたが、現在では再評価が進んでいる。中国政府は近年、孔子学院と称する機関を海外に設置している。孔子学院は中国語の教育機関であり、儒教の教育機関ではないが、中国政府が孔子という名称を採用していることも、儒教再評価の一例といえるであろう。また、孔子学院が海外に最初に設置されたのが2004年の韓国ソウルであったということは、韓国が儒教とのつながりを自認していることを示す一例といえるであろう。

2-2. 道教

道教を一言でいうならば、不老長生を目指す宗教ということになる。戦国時代に現れた、世界や宇宙の始原、根源である永遠不滅の「道」との合一によって自由を得るという道家の思想や、先秦時代に流行した不老不死を願う神仙思想に、道教の源流が求められている。

道家の思想をあらわす代表的な著作とされる『老子』では、世界の根源である「道」か

ら気が生じて万物が形成されることや、人間は「無為」「自然」な生き方をして「道」と合一することで自由と安心が得られる旨が説かれている。莊子（前 369-286）の著とされる『莊子』では、「道」と合一して絶対的な自由の境地を得るとともに、不老不死の神仙になることも述べられている。

後漢末に四川省の地域で起こった五斗米道（教団側による名称は天師道）は、最初期の道教教団組織とみられており、信者は『老子』を習い、治病儀礼が行われたとされる。

晋の葛洪（283-343 頃）が著した『抱朴子』では、神仙になるための思想と技術が述べられており、具体的には、五穀を断って、植物や水銀を含む鉱物から作る金丹とよばれる薬物を服用すること、体操や呼吸法、さらには男女の性的な交わりによって気を体内に蓄積すること、呪文や図形を利用して神々と交流することなどが述べられている。

東晋（317-419）から劉宋（420-479）にかけて、道教における重要な經典群が創作された。上清經典類と称される經典群と、靈宝經典類と称される經典群である。上清經典類では、經文を誦誦して体内の丹田（気が蓄積される箇所）にいる神々の姿を存思する（視覚化してありありと冥想することなどが重視された。一方、靈宝經典類の「靈」とは、天の神秘的な力を意味し、「宝」とは地においてそれを受け入れる容器であり、具体的には符（神々や天の眞の名や意味を記したもの、宇宙の根源である気によって表した文字や文様などを記したもの）とされた。この符を祀って、自己や祖先の罪を懺悔したり神々に祈願したりし、また自己の体内の神々とも交流したり、さらには祀り手のない靈魂たちも救済して不死の身体にして昇天させることなどが行われたという。

宋代には、それまで最高神とされてきた太上老君、元始天尊、靈宝天尊にかわって、玉皇上帝が実質的な最高神の位置を占めるようになり、また、体内の気を純化練成して「道」と合一させる「内丹」とよばれる心身修行法、及び内丹や符の力で鬼神を使役して邪を滅し、風雨雷電を操る「雷法」とよばれる実践が重視されるようになる。このような状況のもと、道士の正統な資格を発給してきた龍虎山（江西省貴溪市。天師道の系譜を自称）、茅山（江蘇省句容市。上清派の系譜を自称）、閻皂山（江西省樟樹市。靈宝派の系譜を自称）という三つの伝統的な道教組織に属さず、独自に修行や符の実践を行う者も多く現れた。金代に全真教を開創した王重陽（1112-1170）も伝統的な道教組織に属した道士ではなく、個人的な修行者であった。一方、後漢末以来の天師道の系譜を自称してきた龍虎山は正一教を名乗るようになり、全真教と勢力を二分した。明代になると道教は全真教と正一教に大別され、北京の白雲觀は全真教の三大道教寺院の一つとされた。

現在、中国道教協会が組織され、中国共産党と政府の指導のもとで、中国道教全体を統括している。北京の白雲觀には中国道教学院が設置され、将来各地の道教寺院の住持となるべき道士たちの教育が行われている。

台湾には、道教は 17 世紀に中国からの移民とともに伝来したということであるが、龍虎山の火居道や正一派の火居道、さらには天師道が大きな宗派を形成しているということである。

あり、中国大陸の正一教に由来する勢力が活発のようである。なお、台湾の道教寺院では道教の神々のほかに、観音菩薩などの仏菩薩や儒教の孔子なども祀られていることが少なくなく、参詣する人々にとっては道教、仏教、儒教を区別するのではなく、靈験あらたかな神仏に祈願するということのようなようである。

2-3. 仏教

ここでは、先述した現在の中国で行われているという 3 系統の仏教のうち、中国から東アジアの他地域にも伝播した漢訳仏典による大乘仏教について記す。

中国に仏教が伝来したのは紀元前 1 世紀頃と考えられている。インドから仏典を持ち帰った玄奘（602-664）は『大般若経』や『成唯識論』を漢訳し、中国に唯識教学をもたらした。唯識教学では、この世界は単に心の現れに過ぎないと説く。心の根源にはアーラヤ識があり、そこにはあらゆる行為や経験の、いわば余韻、余力のようにして残ったものが蓄積される。我々はこの蓄積を通じて世界を認識しているのであるが、アーラヤ識は煩悩を伴っており、したがってこの世界は誤って認識される。アーラヤ識の煩悩をなくして、浄らかな「識」に転換することによって悟りが得られるとされる。

しかし、このような唯識教学は中国仏教の大きな勢力として継承されたとはいえず、中国仏教として発展したものは天台教学と華嚴教学であり、また実践に独自性を示したのは禅宗と浄土教であった。天台教学は智顛（538-597）に始まるとされ、智顛は、大乘仏教の究極的な教えは、段階を追って次第に悟りに到達するというのではなく、頓悟、頓覺（一挙に悟ること）を説くものであるとして、一心三觀（心を対象にして、空觀・仮觀・中觀を同時に行うこと）の瞑想法を確立した。他方、『華嚴経』は、すべては心がつくり出したものとする唯心説を強調するが、智儼（602-668）と法蔵（643-712）は華嚴教学を大成し、『華嚴経』は悟りを開いた仏の境地をそのまま表現したもの（頓教）であり、すべてを充足した教え（円教）であるとした。

禅宗では、馬祖道一（709-788）の「即心是仏」（自分の心こそが仏である）、「平常心是道」（日常の心が道であり、悟りである）という言葉に代表されるように、日常のなかに自己の本性（仏、悟り）を見いだすことを教えとして、インドの仏教では禁じられていた出家者による生産労働、肉体労働が仏道修行として積極的に肯定され、日常生活がすなわち坐禅であるともされた。また善導（613-681）は、阿弥陀仏の本願力によって極楽浄土に凡夫が往生できるとし、西の方角に極楽浄土が存在するという実在的浄土觀を示すとともに、称名念仏を浄土往生のための最も正しい実践としたことから、浄土教の大成者とされている。

このように仏教は中国伝来後、教学や実践の面で中国独自の展開をみたが、宋代以降は、各教学や実践の独自性を強調するよりも、教学、禅、念仏の融合を目指すものとなった。また仏教は、中国で重んじられていた「孝」の精神に基づいて祖先崇拜を自らのなかに取

り込んでもいった。中国で撰述された偽経である『盂蘭盆経』にならって、7月15日に僧侶に食物などを布施して現在の父母と七世の父母、六種の親族を三塗の苦しみから逃れさせるという行事や、『救拔焰口餓鬼陀羅尼経』などにならって施餓鬼会が始まったのは唐代のこととされる。また唐代には偽経である『父母恩重経』も民間に流行し、仏教は祖先への祭祀や父母への追善などの仏教儀礼を孝養の道として強調するようになった。

現在の中国では、中国仏教協会が中国共産党と政府の指導のもとで、中国全土の仏教活動を統括している。したがって、日本のような各宗派としての仏教というよりも、中国仏教協会による一つの団体として存在しているといえよう。一方、近年、中国のとりわけ都市部の仏教寺院では、死者供養が頻繁に行われるようになっており、死者供養を寺院に依頼する人々は、それを通じて祖先の安寧と自分たちの幸運を願うということである。

台湾には、国共内戦以降に、中国共産党の宗教政策から逃れて多くの僧侶が台湾にやってきたことにより、中国本土の仏教がもたらされた。現在の台湾の仏教では、福祉や医療などの活動に力を注ぐ教団が多く、法鼓山（台北県金山）、佛光山（高雄県大樹）、慈濟基金会（花蓮県）、中台山（南投県）、靈鷲山（台北県貢寮郷）などが活発に活動している仏教教団であるという。なお、仏菩薩のほかに道教の神々などを併せて祀っている仏教寺院も多く、道教での場合と同じように、仏教寺院を参詣する人々は仏菩薩でも道教の神々でも、靈験あらたかな神仏を拝むということのようである。

韓国の仏教も、長い歴史を通じて中国から伝えられ、受容されていったものであるが、現在の最大の宗派は、禪宗の系統を受け継ぐ曹溪宗である。曹溪宗に次ぐ規模の宗派は太古宗であるが、それは、日本統治からの独立後に出家主義をとった曹溪宗と対立し、そこから分離独立した妻帯僧たちによって設立されたものである。韓国の仏教諸宗派は現在、福祉活動や環境保護活動に取り組むとともに、死者供養も活発に行って人々の要望に応えている。

2-4. キリスト教

アヘン戦争後、1842年に南京条約（及び黄埔条約、望厦条約）が締結されると、中国で外国人宣教師が伝道活動を行えるようになった。しかし不平等条約の庇護のもとで行われる宣教活動は時として中国人から反発を招き、大規模な教会襲撃事件も頻発するようになる。反キリスト教の動きは1900年の義和団事件で頂点となるが、8か国連合によって義和団が鎮圧されると、清の一層の弱体化もあってキリスト教伝道は進展したが、一方では中国人によるキリスト教の土着化も進められていった。

1922年、上海で開催された全国基督教大会で、中国人による自養、自治、自伝の教会建設、すなわち三自原則が掲げられ、中国人の神学者や牧師によって「中国の神学」が模索されるようになる。1927年には、キリスト教プロテスタント各教派の垣根を越えて、中国人による超教派の組織である中華基督教会がつけられた。中華人民共和国の成立を経て、

1950年、中国人プロテスタント指導者40人が連名で、「三自原則を堅持し、帝国主義との関係を絶ち、愛国愛教を目指す」という宣言を発表し、1954年には中国基督教三自愛国運動委員会が成立した。一方、カトリック側では、中国はバチカンと断交し、中国のカトリック信者によって1957年に中国天主教愛国会が結成された。プロテスタント、カトリックのこのような動向のなか、外国人宣教師は次々と国外退去を命ぜられた。

文化大革命の収束後、1980年には中国基督教協会が成立し、同協会と中国基督教三自愛国運動委員会が、中国共産党と政府の指導のもとでプロテスタント教会の諸活動を統括することとなり、二つの組織による指導形態は現在も続いている。中国のプロテスタントは、様々な教派が活動しているのではなく、二つの組織によって指導される単独の団体という性格のものといえよう。一方、カトリック教会も、中国天主教主教団と中国天主教愛国会の二つの組織によって統括されている。なお、以上のようなプロテスタントの2組織、カトリックの2組織によって指導される、いわゆる公認教会のほかにも、非公認のプロテスタントやカトリックの教会（例えばプロテスタント福音派や、ローマ教皇とつながるカトリック信者など）があり、そのような教会や信者は膨大な数にのぼるといわれているが、正確な数はわかっていない。

台湾では、1859年にフィリピンからカトリック、1865年に英国長老派教会、1950年代には聖公会などが伝来し、20世紀後半になると、中国共産党の宗教政策から逃れて多くのカトリック信者が台湾に移住した。現在では長老派教会が最も多い信者を獲得しているということである。

韓国では、1784年に李承薫（イ・スンフン、1756-1801）が北京で洗礼を受けて帰国し、宣教を始めたことがカトリックの伝来とされ、外国人宣教師ではなく韓国人自身による伝来という点に韓国カトリック教徒の自負があるという。ソウルにある明洞聖堂は韓国最初のカトリック教会であり、1970年代から80年代にかけては民主化運動のシンボリックな場所とされた。一方、プロテスタントの場合、様々な教派が存在し、都市部では信者数1万人を超える巨大教会から、商業ビルの部屋を借りた小規模な教会まで、多様な教会が林立している。巨大教会としては、信者数76万人、教職者600人以上とされるソウルの純福音教会が有名であるが、同教会発展の原動力であった趙鏞基（チョ・ヨンギ、1936-）牧師が引退した後、同牧師とその家族の影響から脱皮しようとする信者グループがあらわれ、教会内部で摩擦が生じているという。同教会に限らず、教会の運営をめぐる教会内部で摩擦が生じて教会が分裂することは、韓国のプロテスタント教会でしばしば起こることであり、教会の林立、乱立の一因でもある。

韓国での信者数の動向を見ると、カトリックでは186万5,397人（1985年、総人口の4.6%）、298万8,102人（1995年、6.7%）、514万6,147人（2005年、10.9%）である一方、プロテスタントでは648万9,282人（1985年、16.1%）、881万8,964人（1995年、19.79%）、861万6,438人（2005年、18.3%）であり、カトリック信者の増加が注目

されている。（なお、仏教信者数の動向は、805万9,624人（1985年、19.9%）、1,038万7,861人（1995年、23.3%）、1,072万6,463人（2005年、22.8%）である。）

2-5. イスラーム

中国ではイスラームは主に10の少数民族と密接に結びついている。それら少数民族を言語系統別にみると、テュルク語系のウイグル族、ウズベク族、カザフ族、クルグズ族、サラール族、タタール族、イラン語系のタジク族、モンゴル語系の東郷族と保安族、それに漢語を使用する回族である。2000年の中国第5回国勢調査によれば、人口としては回族（981万6,800人）が最も多く、ウイグル族（839万8,400人）、カザフ族（125万500人）、東郷族（51万3,800人）などがこれに続く。テュルク語系の諸族とタジク族は新疆ウイグル自治区に集住しており、東郷族、保安族、サラール族は主に甘粛省、青海省、新疆など中国西北部地区に居住している。回族は中国各地に分散しているが、寧夏省をはじめとした中国西北部や、河南省、雲南省にその人口が多い。中国のイスラームは、タジク族の一部を除き、スンナ派であるとされる。

歴史的には、唐や宋の時代を通じて、西アジアや中央アジアから多くのムスリムが陸路で長安へ、海路で広州や泉州などの海港都市に到来し、中国にイスラームが伝来した。ムスリムの流入は15世紀後半まで続き、中国の各地でムスリムのコミュニティが形成されるようになり、16～17世紀にはイスラームを核として現在の回族や東郷族などの母体が形成された。

一方、タリム盆地を中心とする現在の新疆ウイグル自治区に相当する地域には元来、インド・イラン語系の人々が居住していたが、9世紀以降、遊牧民ウイグル族が流入して、言語のテュルク語系化が進んだ。10世紀以降、西漸してきたイスラームがこの地域に広まり、16世紀頃にはイスラーム化が完了する。こうしたなかで言語と宗教の共通性から漠然とした一体感が生まれ、この地域で最大のウイグル族の母体が形成された。18世紀の半ば、現在の新疆ウイグル自治区に相当する地域が清に支配され、テュルク語系諸族は中国のなかに組み入れられていった。

2-6. その他

既述のように道教では、体内の気を純化したり、気を蓄積したりすることが養生法の一つとされたが、中国において、そのような養生法は、今日では、気功という名称で広く受け入れられてもいる。気功は1950年代、医療分野として国家に認められ、1980年代からは大衆向けの運動療法として人気を集めた。1980～1990年代にかけて多数の気功集団が形成され、そのなかからは、李洪志という者が組織したという法輪功のような集団も現れた。しかし1999年に法輪功が非合法化された後、医療・健康法としての気功にも規制が強化された。なお台湾では、現在でも法輪功が活動しているという。

先に紹介した台湾内政部統計年報の2012年「各宗教教務概況」には、「一貫道、信者数2万1,103人」ともあり、これは道教、プロテスタント、カトリック、仏教に次ぐ信者数である。一貫道は1954年に中国から台湾に伝えられたもので、明代中期以降に盛んになった無生老母という女神を奉じる宗教で、清代に発祥したとされる。無生老母への信仰とは、墮落の瀬戸際にいる人類は、本来は親なる神の子であるという人間の本性を自覚して回復すれば、親である神（無生老母）のもとに帰還できるというものである。道教、仏教、儒教、キリスト教、イスラームの5教を貫く教えということで一貫道と称するという。中国で規制され、台湾伝来時には台湾でも公認されなかったが、1987年に公認された。

韓国統計庁による2005年人口総調査では、既述の仏教、カトリック、プロテスタント、儒教以外にも信者数として、円仏教12万9,907人、甌山教3万4,550人、天道教4万5,835人、大宗教3,766人、その他16万3,085人とある。円仏教は、朴重彬（パク・チュンビン、号・少太山（ソテサン）、1891-1943）が1916年に開教した仏教系の教団である。朴重彬は悟りを得た後、古今東西の聖人たちの教えを研究した結果、仏教こそが根本的真理を明らかにする教えであると考え、自分の教えを仏教に依拠するものとしたという。円仏教は、宇宙の根本原理を円で形象化した「一円相」を信仰対象とし、「一円相」は法身仏ともされる。仏教の現代化と生活化を主張して、修養生活を深めるとともに物質生活の向上も目指すこと、四恩（天地、父母、動植物も含めた同胞、社会の理法や規範、といった生活に欠かせない四つ）を重視すること、自活の能力や教育、社会への貢献を重視すること、などが実践の目標とされている。円仏教では、大学や総合病院、社会福祉施設なども運営している。

甌山教とは、姜一淳（カン・イルスン、号・甌山（チュンサン）、1871-1909）の教えを受け継ぐとする諸教団の総称である。1901年に悟りを得た姜一淳は、これまでの時代は相克の原理が人間を支配し、天地人の三界に冤恨が充満する抱冤の時代であったが、上帝である自分が地上に降臨して「天地公事」と称する呪法によって三界の冤恨を解いたので、今や解冤の時代が到来したと説いた。姜一淳の教えを受け継ぐとする教団は、様々なものが現れては分裂、消滅していったが、現在最も活発に活動しているのは、甌山道と大巡真理会である。前者は学生や若者への布教活動、出版やマスコミなどの広報活動に力を入れている。後者は大学、総合病院、福祉施設などを運営している。（1995年の韓国統計庁発表には「甌山教」という項目はなく、かわりに「大巡真理会信者数6万7,632人」とある。）

天道教は、東学3代目教主、孫秉熙（ソン・ビョンヒ、号・義菴（ウイオム）、1861-1922）が1906年に教団名を改称したものである。東学は崔濟愚（チェ・ジェウ、号・水雲（スウン）、1824-1864）が神秘体験のなかで、天帝から救世主たる使命を告げられたと自覚したことに始まり、すべての人間には「天（主）」が内在しているとする「侍天主」という平等思想や、東学によって新しい世が開かれるという「後天開闢」思想などを説いた。孫秉熙は東学の平等思想を「人乃天（人乃ち天）」と表現し、現在の天道教は、「内侍天主（自

己に内在する天主に仕える)」「通靈正氣(天主との合一)」「除禍増福(厄を退け福を伸ばす)」「布徳(布教)」「輔国広濟(国を助け人々を救う)」を説いている。

大倭教は、羅喆(ナ・チョル、号・弘巖(ホンアム)、1863-1916)が創設した教団で、朝鮮民族の祖とされる檀君を信奉する諸教団のなかで最も代表的なものである。檀君は、天帝・桓因の庶子である桓雄が地上に降臨して、人間の女性に化した熊との間に儲けた人物とされ、紀元前2333年に即位して、朝鮮という国名の国を建てたと伝えられている。檀君を奉じる教団は数多いが、それら諸教団では檀君は実在の人物とされる。大倭教のほか現在活発に活動している教団には、檀君の啓示を受けたとする孫正恩(ソン・ジョンウン)が1994年に創設した仙仏教や、1985年に李承憲(イ・スンホン、1950-)によって設立された丹学仙院などがある。丹学仙院は1980年代から檀君宣揚運動を行い、2002年に丹ワールドと改称し、2004年には「国学院」と称する研究機関を開設して、檀君に基づく民族精神の普及に努めている。

第2章 中南米

山田 政信

1. 地域事情

中南米は、大航海時代にスペイン・ポルトガルをはじめとするヨーロッパの国々によって先住民社会が植民地化されたという共通の歴史を持つ文化圏である。メキシコ以南のアメリカ大陸とカリブ海の島々からなる地域でラテンアメリカとも呼ばれ、33の国家と、米国、イギリス、オランダ、フランスの属領がある。公用語は多くがスペイン語だが、英語、フランス語、オランダ語の地域もあり、ブラジルではポルトガル語が話されている。そして、先住民社会では、現在も植民地期以前から話されてきた独自の言語を継承している。地域によって人種間の混血の度合いに違いがあるが、先住民社会を土壌としつつ、主としてヨーロッパからの植民者や奴隷として連れてこられたアフリカの人々、後にはアジアからの移住者が作り上げた世界が中南米である。

様々な人々の移動によって生み出された中南米は、多様な人種や文化を内包することになった。ブラジルの著名な文化人類学者ダルシー・ヒベイロはこの地域に住む人々を、①「証言する人々」、②「新たな人々」、③「移植された人々」、という三つのタイプに大別し、各国の人種的・文化的ありようを以下のようにイメージ化している。植民地期以前からの先住民文化を現代社会に伝える人々は「証言する人々」と表現され、ペルー、ボリビア、エクアドル、グアテマラ、メキシコに多い。チリやパラグアイではヨーロッパ人と先住民が混血を生み、ブラジルとコロンビアではそこにアフリカの要素が加わって「新たな人々」を生み出している。アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル南部では、ヨーロッパ人の末裔たちが「移植された人々」として自文化を継承している。もっとも、①にカテゴライズされる国々には先住民とヨーロッパの文化が混ざり合ったメスティーソ文化が存在するし、②の混血の度合いは様々で、③で示された国や地域には①と②のタイプの人々も住んでいるというように、これら三つは飽くまでも地域の傾向性を示す指標にすぎない。

こうした異種混交的な特徴を持つ地域ではあるが、植民地期以降、今日に至るまで、イベリア半島の宗教文化の絶大な影響が均質的に保ち続けられている。「剣と十字架」で知られる植民地事業は、国家的庇護の下でのカトリック布教でもあった。イベリア半島から押し寄せた征服者らは、先住民をカトリックに強制改宗し、アステカ、マヤ、インカなどでは神殿を破壊し、土着の神々をキリスト教の神や聖人に置き換え、カトリック教会を建造した。先住民の宗教的世界が贖罪のキリストや聖母マリアなどで覆われていったのである。

スペイン・ポルトガル統治下の諸地域は19世紀初頭に独立し、それ以後もカトリシズム（カトリック教会とその信仰）は国教的地位を享受した。ブラジルでは帝政から共和政に移行した後に発布された1891年憲法で政教が分離した。スペイン語圏でも、現在では多く

の国で政教が分離しているが、アルゼンチンとコスタリカではカトリシズムを「公的宗教 (official religion)」と規定しているほか、憲法制定議会 (1978~79 年) で政教分離をうたったペルーでは「国家の歴史的・文化的・道徳的発展における重要な要素」と位置付けて比較優位を与えている。また、ボリビアで政教が分離したのは2009年憲法においてである。なお、いずれの国でも信教の自由は保障されている。

中南米では、国家の守護聖人としてカトリック聖人が奉られ、国民アイデンティティの基礎に置かれている。例えば、ブラジルでは「聖母アパレシーダ」、メキシコでは「聖母グアダルルーペ」などである。国家レベルのみならず、町や村にも守護聖人が定められ、祝祭日には住民たちが盛大に祝う。祭りは数日間から1週間余りにわたって続くことがあり、聖人像は花で飾られた神輿で町中を練り歩く。こうした聖人崇拜は、民衆レベルのカトリック信仰の重要な特徴になっている。先に記した「証言する人々」の多い地域では、先住民の神々がカトリック聖人と融合するというシンクレティズム (文化の習合) が見られる。

シンクレティズムの様相は、黒人奴隷制がもたらしたアフリカ系の宗教においても確認できる。中南米には植民地期を通じて黒人奴隷が「輸入」された。その数は、ブラジルと英・仏・蘭の植民地に各 350 万人、スペイン領で 300 万人だったと見られる。その結果、ハイチやジャマイカのように黒人人口比率の高い国や、ブラジル、コロンビア、キューバのように黒人と、白人あるいは先住民との混血が比較的高い割合で存在する国が生まれた。このような国々で見られるアフリカ系の宗教は「アフロ・アメリカン宗教」と総称されるが、ブラジルのように「アフロ・ブラジリアン宗教」や「心霊主義 (エスピリティズモ)」という呼称を持つところもある。

黒人奴隷は強制的に洗礼を受けさせられてカトリック教徒となったわけだが、独自の信者組織を結成することもあった。そこでは、当然のようにカトリックの守護聖人が祀られたとはいえ、信者らはそこにアフリカの神々の働きを見いだしていた。例えばキューバで見られる信仰にサンテリアがある。サンテリアはスペイン語のサント (聖人) の派生語で、その信仰実践ではカトリック聖人がアフリカの神々と同一視される。アフロ・アメリカン宗教は神々や諸霊が人間に憑依するのを特徴とする。

近年、中南米のこのような宗教地図が塗り替えられつつある。カトリックの牙城とされてきたこの地域からカトリック人口が減少し、代わりにプロテスタント信者と無宗教の割合が増えてきているのである。その最も顕著な例はグアテマラで、2012年の調査では、カトリック 48%、プロテスタント 38%、無宗教 12%になっている。同国ではプロテスタント信者の大統領も誕生している。

中南米にプロテスタント信仰を伝えたのは、初期の例外的な事例として17世紀ブラジル北東部でのオランダによる植民地建設があるが、現在まで継続しているのは19世紀ヨーロッパからのプロテスタント移民で、メソジスト派、ルター派などである (主流派)。19世紀末から20世紀にかけては米国からの伝道集団が組織的に伝道し (福音派)、さらに20

世紀になると米国からペンテコステ派が伝えられた。近年、中南米産のペンテコステ派の教会が数多く生まれており、今日におけるプロテスタントの伸展はそれらの教会によるところが大きい。

ブラジルやペルーをはじめ日本人が戦前及び戦後に移住した国では、日本の宗教も現地の人々に受け入れられ近隣国に広がっている。

2. 宗教別の概要(ブラジルとペルーの事例を中心に)

ここでは、カトリシズム、プロテスタンティズム、ペルーにおける先住民の信仰、ブラジルで見られるアフリカ系の宗教、そして中南米に伝えられた日本の宗教について論じる。

2-1. カトリシズム

中南米は世界最大のカトリック信者を誇る地域で、その割合は世界のカトリック人口の約40%を占める(2010年)。なかでもブラジルが最多で、次にメキシコと続く。それゆえバチカンにとってブラジルの動向は極めて重要で、2013年に南米初の教皇に就任したフランシスコがその年に行った初の外遊でブラジルを選んだのも当然といえよう。しかし、そのブラジルでカトリック人口の割合は約90%(1980年)から約65%(2010年)に減少した。この傾向はペルーでも同様で、約90%(1993年)から約80%(2007年)になっている。その要因は、いずれもプロテスタント信者の増加にあると見られる。とはいえ、注意すべきことがある。例えばブラジルでカトリック信者といっても毎週日曜日のミサに出席するような熱心な信者は信者全体の1/3程度で、その他は名目的な信者であることが多いということである。それは、日本でふだん宗教的な活動を行っていない人でさえ仏教徒だと名乗るという状況に似ている。

1950年代から60年代にかけて、中南米のカトリック教会では都市スラムや農村における貧困や抑圧をもたらす社会構造の変革を志向する聖職者が現れた。彼らの運動と思想は「解放の神学」と呼ばれ、その名称はペルーのグスタボ・グティエレス神父の著書名に由来する。死後の世界での救済を求める伝統的なカトリック神学というよりも、現世的な救済(生活環境の改善)を重んじるという特徴がある。カトリック教会の現代化を目指した第二バチカン公会議(1962~65年)の後、メデジン会議(1968年)、プエブラ会議(1979年)で公認された。運動は中南米のみならず、アジアやアフリカなど第三世界に広がった。

1960年代後半から70年代にかけて中南米諸国では軍事政権が相次いで成立した。民衆はそれによって抑圧されたが、解放の神学を支持する人々は民主化と人権擁護を求めて民衆の「声なき声」になろうとした。運動はブラジルやチリで盛んになり、ニカラグアでは社会主義的なサンディニスタ政権に解放の神学の聖職者数名が入閣して改革を支えた(1979~90年)。また、ブラジルでは軍と対峙することになった解放の神学の神父が国外追放されることもあった。

1980年代半ばから中南米諸国では軍事政権から民政への移管が見られた。冷戦終結後、中米における親米軍事政権とソ連に支援された反政府左翼ゲリラによる紛争は終息に向かった。マルクス主義は解放の神学の枠組みの支柱だったがゆえに、左派勢力が後退したことは同神学にとって大きな打撃になった。さらに、抑圧的な軍隊が政治の舞台から撤退したことで、カトリック教会の進歩主義者らは政敵を失うことになった。これ以降、カトリック教会では保守派が主流になっていった。

2006年に教皇に就任したベネディクト16世がバチカンで解放の神学を厳しく糾弾したということもあり、現在では対外的にも対内的にも解放の神学は余り支持されず、力が弱まっている。

このように保守化したカトリック教会で1990年代以降伸びてきたのがカリスマ刷新運動である。プロテスタントの伸展という「脅威」に抗うかのように、特にブラジルでは盛んになった。これは米国で1960年代末に学生を中心に生まれた運動で、カトリック・ペンテコステ派（Catholic Pentecostalism）とも呼ばれる。いわゆるペンテコステ派は、「父なる神・子としてのイエス・聖霊」という三位一体のうち、聖霊が信者に直接働きかける「聖霊のバプテスマ」の体験を求める。プロテスタントのペンテコステ派と通底しており、バンドに合わせて歌い、両手を掲げて神を讃える信者の姿は、厳粛なカトリック教会のミサのイメージと異なる。解放の神学が聖職者主導の政治的・社会的運動だったのに対し、カリスマ刷新運動は民衆が主体的に参加して宗教的安寧を得ようとする情緒的な運動だといえる。

さて、聖人崇拜にはカトリシズムの伝統的な民衆宗教としての特徴が現れている。ブラジルではアパレシーダの聖母が国家の守護聖人とされ、10月12日にサンパウロ州アパレシーダ・ド・ノルテの大聖堂で祝祭が行われる。この日には遠隔地から巡礼者を乗せた何百台ものバスが集結するほか、徒歩でアパレシーダを目指す人も多い。このような巡礼地は国内にたくさんあり、ナザレの聖母（パラ州ベレン、10月8～23日）、シセロ神父（セアラ州ジュアゼイロ・ド・ノルテ、11月1～2日）、ボンフィンの良きイエス（バイア州サルバドール、1月7～16日）などが近隣地域の巡礼地になるほか、無原罪の聖母（12月8日）には、ブラジルのみならず他の国々でもその名を冠した教会に人々が訪れる。守護聖人は地方によって異なり、例えばペルーのリマ市ではリマの聖ロサ（8月23日）と奇跡の主（10月の数日）が特に中間層の厚い信仰を集め、輦台に載せた聖人像を紫色の修道服を着た多くの信徒が担いで歩く。

スペインで生まれたカトリックの信仰組織オプス・デイも中南米では比較的活発である。「神の御業」を意味するこの組織は1928年に生まれ、第二次大戦後世界的に拡大した。カトリックを基にする宗教心は広く民衆の中に取り込まれている。たとえばサッカーの試合で、選手達が手早く十字架を切っている姿を見かけることができる。

2-2. プロテスタンティズム

中南米においてプロテスタンティズム（プロテスタント教会とその信仰）は、カトリック信者を改宗によって取り込んで勢力を拡大している。それほど熱心でなかったカトリック信者がプロテスタントの信仰に目覚めたり、カリスマ刷新運動のメンバーがカトリック教会を離れて独自のプロテスタント教会を建てるという事態が生まれている。安易な表現は避けなければならないが、カトリシズムがバチカンを中心とする中央集権的な一つの巨大組織とするならば、プロテスタンティズムは拡散的で分化・変容し続ける運動体のように見える。というのも、今日のプロテスタントの伸展には特定の巨大教団の成長発展が目につくが、それとはまったく異なる非常に小規模で個人的な祈りのグループが自然発生的に誕生しているからである。商店街の空き店舗、映画館や倉庫が突然教会に早変わりするということがブラジルでもペルーでも観察される。

ブラジルの場合、ペンテコステ派の信者は1980年にプロテスタント諸教会全体の約50%、2000年に約70%を占めるに至っており、プロテスタント教会の伸展の要因が彼らの活動にあることがわかる。

国民に占めるプロテスタント人口の比率は、ブラジルでは1980年以降20年間で6.6%から15.4%に増え、2010年に約20%を占めるに至っている。ペルーでも1993年から約15年間で6.8%から12.5%に増えており、その急成長の度合いが見て取れる。プロテスタント信者の場合、自覚的に入信した信仰者であることが多く、これらの数値はほぼ実数に近いと考えられる。

ここで、ブラジルのペンテコステ派教会について述べておこう。ペンテコステ派では、聖霊がイエスの復活と昇天に続くユダヤ教の祝祭日（ペンテコステ）に降臨したとされる体験である「聖霊のバプテスマ」を求めることは既に述べたとおりである。それにより、異言や神癒力が聖霊に導かれた賜物として与えられ、イエスの名において悪霊を追い祓い、病人は癒やされ奇跡が起こると信じられている。ペンテコステ派における最大の教団はアッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団系で、現地ではアセンブレイア・デ・デウスと称される。20世紀初頭、アメリカからブラジル北部に伝えられた。幾つかの系統に派生し、ブラジル全国に広がっている。

ペンテコステ派の中でもブラジルの神の王国ユニバーサル教会は、1980年代以降、爆発的な進展を見せた。1977年にリオデジャネイロ市で生まれ、1989年にはテレビ会社を買収し、宣教に力を入れるなどして信者数を着実に伸ばした。そして、政界にも進出している。ペルーを含む中南米諸国はもちろんのこと、アメリカ、日本、アフリカ、ヨーロッパの国々に広がっている。教団のテレビ会社は日本のCS放送チャンネルを購入し、日本国内に在住する出稼ぎのブラジル人向けに放送を行っている。内容は宣教番組もあるが、ほとんどが一般の視聴者を対象としている。同教団の特徴は悪魔祓いによる救済と繁栄の神学にある。集会では、様々な諸霊を悪の根源とみなし、悪魔に位置付けてイエスの名において追い払

い、献金すれば神が人間に約束した豊かさがもたらされると強調する繁栄の神学を説いている。

総じてプロテスタント教会は低所得者層を引き付けている。彼らの入信背景には次のようなパターンや理由があり、これらは日本におけるデカセギの入信にも通じている。①入信者はかつて家庭に経済的かつ精神的問題を抱えており、飲酒やギャンブル、たばこや麻薬といった悪癖がその原因になっていた。入信すると勤勉になり節約するようになるため、家庭に経済的かつ精神的安定がもたらされる。②説教ではマチズム（男性優位主義）が根強い男性に貞節を教えるため家庭が安定する。このことは女性信者に安心と信頼を与える。③牧師が信者の相談相手となるほか、教会が物質的に支援することもあり、互助組織として信頼される。④教会が食事や憩いの場を提供するサロンとして機能している。

2-3. 先住民と民衆のカトリック信仰(ペルーの事例)

ペルーの国土面積は日本の約3.5倍である。自然環境は、海岸部（コスタ）、山間部（シエラ）、熱帯雨林（セルバ）の三つに大別される。国勢調査で人種や民族は問われておらず、人口比の順に、先住民と白人の混血であるメスティーソ、先住民、白人、東洋・黒人系と続き、先住民とメスティーソが全体の8割程度を占めると見られる。首都リマを中心とする海岸部ではメスティーソ、山間部と熱帯雨林は先住民人口が多く、それらの空間は文化的・社会的に非常に異なっている。日系人はリマ首都圏を中心としたリマ県に約84%が集中している（1989年）。

リマ市では山間部からの移住者の増加によって1940年代から急速に人口が増加した。市内には山間部の住民が使用されていない土地を不法占拠し、政府と交渉して土地の権利を獲得したバリアーダ若しくはプエブロ・ホベンと呼ばれる幾つかの地区がある。それらの住民は1980年にはリマ市人口の約40%を占めるようになっている。先住民の宗教は、都市部の貧困地域でも限定された形で実践されている。神々との媒介者の役割を果たす呪術師が、山の神や大地の神に対して病気治療といった身体的な疾患を救済する儀礼のみならず、恋愛や結婚の成就、商売繁盛などの儀礼も行う。また、誰かに呪いをかけられたとか不幸な出来事が起こったときに対処する儀礼も行う。リマ市内でもこのような儀礼は新聞やテレビに広告が出るほど日常的に需要がある。

植民地期にスペインが先住民に伝えた信仰対象にサンティアゴがある。サンティアゴとは、スペインのレコンキスタでイスラーム教徒との戦いの守護聖人となっており、新大陸征服においても守護聖人とみなされた。その信仰は山間部の先住民にも取り入れられ、クスコ市では山の神がサンティアゴの姿をとる場合もある。

先住民のみならず都市部における民衆のカトリック信仰で聖人崇拝は重要な宗教実践である。守護聖人の祭りは伝統的な政治的宗教的権威集団で守られてきた。日本の伝統的な祭りにおける頭屋制度にも似たカルゴシステム（役職制度）があり、役職に当たった者が

経済的に祭りを支える。市場原理の普及やプロテスタントの拡大によって、経済的負担から逃れようとする風潮が生まれてきているものの、山間部においては都市住民となった先住民の人々が現金収入を得て、故郷の祭りを支援することもある。

ペルーでは自動車のバックミラーやフロントにお守りとして貼られている聖人の画像をよく見かける。聖人崇拝は先住民や民衆にとって生活の一部なのである。

2-4. アフロ・ブラジリアン宗教と心霊主義(ブラジルの事例)

ブラジルの国土は日本の約 23 倍に当たり、南米大陸の半分を占める。自然環境は熱帯から亜熱帯、温帯の地域を擁し、南部の高地では降霜も見られる。2010 年の国勢調査によると、人種構成は、白人 47%、黒人 10%、パルド（白人と黒人の混血）42%、黄色人 1%、先住民 0.1%である。大雑把な言い方だが、北東部（ペルナンブコ州、バイーア州など）には褐色肌の人が多く、北部（アマゾナス州、パラ州など）と中西部（マツグロソ州、南マツグロソ州など）は先住民系の割合が他の地域よりも高い。南東部（リオデジャネイロ州、サンパウロ州など）は政治経済の中心で地方からの移住者も多く様々な人種が集まっており、ヨーロッパ移民が集中した南部（パラナ州、サンタカタリーナ州など）には白人系が多い。日系人はサンパウロ州やパラナ州に多い。

ブラジルに奴隷として連れてこられた黒人の宗教は、カトリシズムやブラジルの先住民の宗教、さらにヨーロッパから移植された心霊主義であるカルデシズム（フランスから伝えられブラジルで広く受容されている心霊主義）などの要素を取り込んでアフロ・ブラジリアン宗教になった。アフロ・ブラジリアン宗教の信奉者の割合は白人 47%、黒人 21%、パルド 31%、黄色人 0.6%、先住民 0.4%であり（2010 年）、人種に関係なく受容されていることがわかる。アルゼンチンやウルグアイの白人社会に一定程度広がり、日本でも在日ブラジル人が集会を開いている。

アフロ・ブラジリアン宗教はブラジル全域に見られ、地域によって呼び名は異なるが、カンドンブレとウンバンダが代表的な呼称として用いられる。カンドンブレはアフリカ色が強く、ウンバンダはカルデシズムの影響を受けている。

アフロ・ブラジリアン宗教は、オリシャと呼ばれる様々な神々（諸霊）を崇め、霊に憑依された信者が儀礼を行うという憑依宗教である。神々は、ブラジルのカトリック的な宗教文化においてイエスや諸聖人と習合しており、カトリック暦に従ってオリシャの祭りが行われるというシンクレティズムが見られる。それゆえ、カトリック信者だと自認するものが多い。ペルーの先住民に山の神としてみなされることのあるカトリック聖人サンティアゴは、アフロ・ブラジリアン宗教では神格の一つであるオグンに位置付けられ、戦いと稲妻の神として理解されている。

儀礼を行うリーダーはパイ・デ・サント（守護聖人の父の意味。女性の場合はマンイ・デ・サント。）と呼ばれ、病気治療、商売繁盛、夫や妻の不貞を解決したいなどの特別な

依頼に対して儀礼を行い、不義理を働く者には呪いの儀礼を行うという者もいる。また、トランプ占いのように人生の吉凶を占うために手軽に利用されるという側面もあり、ペルーの呪術師に通じている。

アフロ・ブラジリアン宗教とそれを実践する人々はブラジル社会で差別されることが多かった。今日でさえネガティブな評価がなくなったわけではないが、低所得者層のみならず中間層にも広がっており、国民の宗教文化にしっかり組み込まれている。カトリック信者であると表明しながらもアフロ・ブラジリアン宗教の集会に参加している者もいることから、実質的な受容者は国民の2.3%という統計データを上回っていると見られる。

2-5. 日本の宗教

中南米には日本人も戦前から農業移住者として家族で渡航した。家督相続が期待されたため長男家族が移住することはまれで、条件として定められた労働力を確保するために形式上の「構成家族」をつくって移住する場合もあった。日本人は仏教による先祖祭祀を「宗教」だと理解することが多い。そのため、成功して凱旋帰国することを夢見ていた多くの移住者は、「宗教（＝墓）は日本に置いてきた」と考えた。第二次大戦が終わり、敗戦した日本に帰国することが困難だと理解した移住者らは、それぞれの土地で永住を決意するようになる。一方、戦後移住者らは当初から永住を決意していることが多かった。その中には布教目的で移住する者もあった。そのような人々の間で、日本の宗教が実践されるようになっていった。

現在、ブラジルとペルーには、浄土真宗本願寺派（西本願寺）、真宗大谷派（東本願寺）、曹洞宗、浄土宗、などの仏教寺院があり、主として日系人の葬儀や法要などの仏事に応えている。日本から派遣された僧侶のほか現地生まれの二世僧侶も育っている。さらに、世界救世教、生長の家、パーフェクトリバティー教団、創価学会、天理教、崇教真光といった新宗教が日系人をはじめとして中南米の非日系人に受容されている。戦後、多くの教団が現地の言語を使って布教を開始した。このうち、世界救世教とパーフェクトリバティー教団はそれぞれブラジル・サンパウロ州に広大な敷地の聖地があり、世界布教の拠点になっている。生長の家も文書布教を活発に行って非日系人の間で知名度が高く、ブラジルをはじめ中南米において日本の宗教がもたらす影響力は過小評価できない。

日本の宗教が非日系人に受容される背景には、①カトリック教会に対する不満足感、②日本の経済力や、日系人が与える信頼感といったポジティブなイメージ、③非西洋的な思想や実践へのあこがれ、などがある。受容者には中産層を中心とする比較的高学歴者が多い。

第 2 部 各国・地域編

第1章 中国

1. 現地における宗教事情

1-1. 宗教の概要

(1) 宗教人口

中国では、政府による公式の宗教人口統計が存在せず、各宗教の正確な信者数は不明とされる。

中国政府の発表によれば、現在の宗教信者は1億人以上、宗教聖職者は約30万人おり、宗教活動拠点8万5,000か所、宗教団体は3,000余りと見られる。宗教団体が聖職者を育成する宗教大学や学校は74校運営されている。また、中国には、中国仏教協会（1953年設立の仏教の公認団体）、中国道教協会（1957年設立の道教の公認団体）、中国イスラーム教協会（1957年設立のイスラームの公認団体）、中国天主教愛国会及び中国天主教主教団（いずれもカトリックの公認団体。前者は1957年設立の指導監督するための宗教指導者と信者による大衆団体。後者は1980年設立の宗教指導者を中心とした団体。）、中国基督教三自愛国運動委員会及び中国基督教協会（いずれもプロテスタントの公認団体。前者は1954年、後者は文化大革命後の1980年に成立。）など全国的な宗教団体がある。

(2) 宗教団体に関する制度

中華人民共和国憲法第36条では、「中華人民共和国の公民は宗教を信仰する自由がある」と規定し、「国は正常な宗教活動を保護する」としている。ただし、保護の対象となるのは「正常な」宗教活動に限られ、「正常」の条件は国家が定める。宗教を管轄する主な政府部門は、国務院直属の国家宗教事務局である。また、現在中国には、宗教に関する総合的な法規として、宗教事務条例（2004年公布）がある。

中国共産党政権は、憲法では宗教信仰の自由を認めながらも、様々な規制・管理を行っている。中国では、道教、仏教、カトリック、プロテスタント、イスラームが政府の公認宗教とされている。また、公認宗教においても、公認と非公認の団体が存在している。中国共産党の施策は国家の法規以上に重要な位置付けとも言われているが、中国共産党は1982年の「我が国の社会主義の時期の宗教問題に関する基本観点及び基本政策」において、五つの宗教・八つの団体（現在は7団体が存在。）を愛国的組織として規定している。例えば、中国のキリスト教会には、政府が活動を公認している教会（以下、公認教会）と、公認していない様々な教会（以下、非公認教会）がある。公認教会は政府の管理を受けるが活動は承認されている。一方、非公認教会の活動は政府に認められていない。そのため、その活動は非合法であり、政府からの取締りの対象となっている。本書における中国の仏教、キリスト教、イスラーム及び道教は、いずれも公認された宗教に関する情報を収集したものである。

(3) 主要な宗教の概要

① 仏教(中国)の概要

中国本土において、仏教を信仰する人の数は多いが、その具体的な数は不明である。本資料では、特に記載のない限り、主に漢民族の間で普及している仏教についてまとめている。

1) 教義

日本と同じ大乘仏教であり、教義として単一かつ至高の聖典が存在しているわけではなく、般若心経ぼんにやしんぎょうや阿弥陀経あみだぎょうなど、日本と同様のものを経典として用いている。日本では宗派ごとに異なる経典が用いられているが、中国では宗派ごとに大きな違いはない。

教義は基本的には中国全土で大体が同じ内容だが、日本に比べると儀式が多く、宗派ごとに日課用のテキストが存在する。日課用のテキストは、日誦にちじゆと呼ばれ、日々の儀礼の手順などについて記載されたものである。

最もよく読まれる経典は地藏経じざうぎょうであり、信者は死者の供養のために祈りをささげる。寺院の殿堂内には地藏経が収められている。

2) 儀式や行事

中国仏教の信者は、定期的に寺院を参拝し、大きな寺院では、受戒の者に戒律を説く説戒(布薩)を行う。

年中行事として、清明節、仏誕節、盂蘭盆会ぶらんぼんかい、臘八節らっぱつせつなどを祝う。その他、日本では重視されていないが、観音菩薩くわんおんぼさつの誕生日、地藏じざうの誕生日、釈迦しやくわの誕生日といった日にも寺院に参拝する。

日本と同様、亡くなった家族の命日に寺へ行き、供養する。その場合は、地藏経、地藏菩薩経などを唱える。

3) 教化育成

中国の仏教教育は、仏学院と呼ばれる機関がその役割を担っている。仏教徒のうち、僧侶そうりよとなることを志す者は、地元の寺で研修等の経験を積んだ後、仏学院に入り、修行を積む。

4) 礼拝施設

中国仏教の礼拝施設である寺院では、南北を軸として南向きに主要な殿堂が建てられ、東西に食堂や僧房などの附属施設が置かれる。南北中央に並ぶ主要な殿堂とは、門のある山門、弥勒菩薩みろくぼさつの座像が安置される天王殿、及び日本の本堂に相当し主要な儀式を執り行う大殿などである。大殿はその寺院の最も中心の建物で、面積も最も広いことが多い。信者が礼拝を行う空間であり、中央には釈迦を中心とした仏像が配置

されている。この他に、禪堂と呼ばれる坐禪^{ざぜん}を行う場所がある。

② キリスト教(中国)の概要

中国には、カトリック系、プロテスタント系とともに、少なくない数のキリスト教の教会が存在している。中国のキリスト教は中国共産党政権からの規制・管理の影響を強く受けており、全ての教会はカトリック系の「中国天主教愛国会」若しくはプロテスタント系の「中国基督教三自愛国運動委員会」に所属し、その指導の下で活動している。これら中国国内の教会は、国外で活動することを認められていないため、日本への進出の可能性は低い。

一方で、中国の国外で生活する華僑・華人は、中国共産党政権の規制・管理の対象とはならないため、世界の各地で教会を作り、活発に活動している。これら海外で活動する中国系の教会は、相互につながりながら、世界的なネットワークを形成している。最も大規模な中華系教会ネットワークとして、「世界華人福音事工連絡センター」が挙げられ、これに属する教会は日本国内にも複数存在している。

1) 教義

中国国内で活動するキリスト教（公認教会）の特徴としては、「三自」と「愛国」の原則を掲げている点が挙げられる。「三自」とは、「自治—自ら治め」「自伝—自ら伝え」「自養—自ら資金を確保する」の三原則を指しており、欧米等の教会からの力を借りず、独立して運営・活動するというものである。「愛国」は、愛国主義、すなわち中国共産党政権との協調を意味している。しかし、それ以外の教義としては、欧米のカトリックやプロテスタント系諸教派のものと大きな違いはない。

一方で、中国国外で活動する中国系教会に関しては、この「三自」や「愛国」を掲げておらず、教義の面では欧米のカトリック、プロテスタント系諸教派と大差ない。

2) 儀式や行事

儀式や行事は、教派によって若干異なるものの、安息日である日曜日に信者が教会に集まって礼拝する点や、クリスマスやイースター（復活祭）を重視する点などは、ほとんどの教派で共通している。

3) 教化育成

信者の教化育成は、教会において行われる。安息日には「日曜学校」「教会学校」と呼ばれる教育活動が子供を対象として行われており、子供たちはそこで聖歌を歌い、聖書の朗読をするなどして信仰心を養う。

4) 礼拝施設

教派ごとに各地に教会を建て、そこを礼拝施設としている。

図表 3 中国基督教三自愛国運動委員会系の教会



提供) 藤野陽平

◆バチカンの教皇・教皇庁から独立して活動する中国カトリック系教会

カトリック教会は、教皇を頂点として世界に12億人以上の信者を有する、キリスト教最大の教派である。カトリック教会は強固な組織体制を有しており、世界中に存在する個々のカトリック教会は、基本的にバチカンのローマ教皇及び教皇庁の管理の下で活動していると言える。逆に言えば、バチカンを中心とした組織の一員として活動する教会が「カトリック」だということになる。

しかし中国共産党政権は、このようなカトリックのあり方が中国への内政干渉につながることを懸念し、中国国内の教会に対して、教皇及び教皇庁から独立して活動するよう定めている。現在、中国のカトリック教会の管理は「中国天主教愛国会」と「中国天主教主教団」の二つの共同管理を原則としており、この二つのことを「一会一団」という。つまり管理組織は「一会一団」であり、バチカンからは独立して活動しており、通常の意味での「カトリック教会」とはあり方が大きく異なっている。

教会が他国との関わりを絶って独自に活動するというあり方は、カトリックだけではなく、中国の他のキリスト教派にも当てはまる。本文でも触れたプロテスタント系の「中国基督教三自愛国運動委員会」もまた、中国共産党の意向を反映して「三自（自治、自伝、自養）」の原則を掲げ、他国の教会からは独立して活動している。

③ イスラーム(中国)の概要

中国本土においては、少なくとも2,000万人がイスラームを信仰している。ムスリム系は10の民族に分類されるが、特にテュルク系の言語を話すウイグル族、及び漢語を母語とする回族の間でイスラームが広く信仰されている。

1) 教義

イスラームの経典は「クルアーン」と呼ばれる。クルアーンは預言者であるムハンマドが神から預かった啓示を記録・編集したものであり、ムスリムの守るべき規範を示している。

2) 儀式や行事

毎週金曜日に、礼拝施設にて集団礼拝が行われる。また、断食明け祭や犠牲祭などの祭事の際にも礼拝施設に集まり、集団礼拝や「アホン」や「イマーム」と呼ばれる宗教指導者による説教が行われる。

3) 教化育成

教化育成として、回族の間では、中国のイスラーム礼拝施設において伝統的に行われてきた、「経堂教育」と呼ばれる、イスラーム諸学に関する教育が施されている。そこではアホンが教師役を担っている。

4) 礼拝施設

一般的に「モスク」と呼ばれるイスラームの礼拝施設は、回族の間では「清真寺」と呼ばれ、ウイグル族の間では「メスチト」と呼ばれる。現地を調査した澤井充生によれば、2005年時点で中国には3万4,000以上のマスジドが存在し、清真寺やメスチトも、ムスリムが日々の礼拝や伝統的なイスラーム教育、通過儀礼、年中行事などを執り行う場所となっている。

マスジドには、中国の儒教・道教・仏教の影響を受けた建築様式と、中央アジアや中東諸国に見られるような建築様式とがあり、その外観は様々である。前者は、梁や柱、瓦屋根や外壁など概観は、道教や仏教の寺院と類似している。後者は、中央アジアや中東諸国で一般的なドーム型屋根を持つ施設の隅に、ミナレットと呼ばれる、礼拝の時刻を告げるための塔が配置された施設となっている。

マスジドの内部には、礼拝殿や、イスラーム教育を行う経堂、アホンが常駐する講堂などがある。

④ 道教(中国)の概要

中国における道教の宗派は、「全真教」と「正一派」に大別される。この二つの宗派は地域によって大まかなすみ分けがなされており、北部では全真教が、南部では正一派が盛んである。

両者の違いは主に聖職者である道士のあり方に関するもので、全真教が出家主義であるのに対し、正一派は在家主義であるという特徴がある。全真教の道士は原則として妻帯せず、「道観」という施設に居住する。一方、正一派に属する道士は、市井にあって妻子を持ち、家庭生活を営みながら、儀式等の聖職者としての役割を果たす。

なお、台湾ではこれらの他に「民間教派」や「術数」の団体が存在するが、中国でこれらは公認されていない。

1) 教義

道教では、あらゆるものに神が宿るとされており、無数の神々の存在が説かれている。また、それらの神々には序列があり、「元始天尊」「靈宝天尊(太上道君)」「道德天尊(太上老君)」、3柱の神が最高神として位置付けられている。

「道士」は、仙人になることを目標に修行に励む傍ら、人々の求めに応じて様々な宗教的儀式を行う。これは全真教でも正一派でも同様であるが、正一派では専ら「廟」において儀式が執り行われるのに対し、全真教では「道観」も儀式の場として利用されるという点が異なる。ただし、一般の信者は道観と廟を明確に区別していない場合が多い。

道教には無数の経典があり、道士は修行の一つとしてこれらを学ぶが、人々がこうした経典に触れることは少ない。人々は、道教の持つ哲理よりも、日常における願

事の成就や困り事の解決を願って道教の神々を祀っている。

2) 儀式や行事

人々は悩みや願い事があるたびに廟や道観を訪れ、参拝して願掛けをする。また、その悩みなどが重大な場合には、道士等の聖職者を呼び、儀式を行う。その内容は、道士等が、神将、神兵（神の使いの将軍、兵卒）を呼び出し、災いを取り払うという性格のものが多い。

その他、廟に祀っている神々の誕生日には、「廟会」と呼ばれる盛大な儀式を行う。

廟における儀式は、純粋に道教的なものというよりは、様々な民間信仰が混ざり合ったものとなっている。

3) 教化育成

道教の信仰は人々の生活の一部となっており、幼い頃から自然と身に付けていくものであるため、一般信者への教化育成は行われないのが通常である。

4) 礼拝施設

全真教では、道士の居住する道観と呼ばれる施設が、礼拝の場としても機能している。道観は仏教で言うところの寺院に当たり、道士はそこで自らの修行を行いつつ、信者のために宗教儀式を執り行い、また日常生活も送る。また、道教の礼拝施設としては、道士によって運営される道観のほかに廟があり、廟は人々の寄附で建てられ、運営も人々の手によって行われている。廟は小さいものでは、ほこら程度のものから、複数の建物から成る大規模なものまで様々であるが、道士が常駐しないことが一般的で、儀式の際にはその都度、道士を招くことになる。

正一派では在家主義のため道観は存在せず、廟が人々の信仰の中心となっている。中国の道教は、仏教や儒教とも分かれ難く結びついている。廟には道教の神々だけではなく、儒教の聖人や仏教の仏と一緒に祀られていることも多く、人々はこれらの神仏を特に区別することなく信仰の対象としている。

1-2. 宗教生活(仏教)の概要

(1) 日常生活

中国仏教は、南部、とりわけ福建省で浸透している。

1) 衣食住

仏教僧には、僧服（袈裟）の着用，独身であること，素食と呼ばれる精進料理を食べることが求められる。

精進料理では原則として，肉，魚，にんにくなどの刺激性のあるものを食べることが禁止されている。その他に，飲酒と喫煙も禁止されている。信者の食生活は，精進料理が推奨されるが，その実践は個人に任せられており，一般の信者には精進料理を常食することは求められていない。ただし，仏教に帰依してから戒を受けていくに従って，こうした規則は厳しくなる。

出家者は袈裟を着用するが，信者にその着用は求められていない。

仏教徒の家庭には仏壇が設置されているが，日本の仏壇とは少し異なり，故人や先祖を祀るものではなく，仏像や経典を置く空間である。

2) 礼拝

中国の仏教徒は定期的に寺院に参拝しており，日を選んで行く人が多い。菩薩の誕生日等には必ず参拝するほか，熱心な信者は時間が許す限り参拝する。

3) 教化育成

一般の中国人の仏教徒は，親の影響ではなく，自分自身で探して自分に合う寺院を見つける。出家者の多くも，親ではなく自分の意思で出家している。尊敬する僧侶がいる，あこがれている寺であるなどの観点から，自分の所属する寺院を決める。

具体的な教義を学ぶ場としては，仏学院が仏教教育を行っている。また，授戒を受ける際には，在家信者も出家者も各地の仏学院が主催する行事に参加して受けることになる。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

主要な行事は、下表のとおりである。これらは、一般の仏教徒の間で広く行われている宗教行事である。清明節は、必ずしも仏教に由来する行事ではないが、広く行われている行事である。

4月8日の仏誕節以外にも、中国の仏教寺院では、様々な仏・菩薩の誕生日を祝うことに特徴がある。例えば、弥勒菩薩聖誕（1月1日）、観音菩薩聖誕（2月19日）、普賢菩薩聖誕（2月21日）、文殊菩薩聖誕（4月4日）、韋陀菩薩聖誕（6月19日）、大勢至菩薩聖誕（7月13日）、地藏王菩薩聖誕（7月30日）、燃灯仏聖誕（8月22日）、薬師仏聖誕（9月30日）、達磨祖師聖誕（10月5日）、阿弥陀仏聖誕（11月17日）などであり、これらの日には仏に祈り、経文を唱える。

図表 4 仏教の主な宗教行事

時期	名称・概要
4月4日	清明節（せいめいせつ） 「掃墓節」とも呼ばれ、家族で祖先の墓参りを行う。また家族で郊外に散策に行く習慣もあり、これを「踏青」ということから、別名「踏青節」とも呼ばれる。 これは漢民族に広く普及した習慣であり、チベット仏教の信者は、こうした行事は行わない。
4月8日	仏誕節（ぶったんせつ） 灌仏会（かんぶつえ）であり、釈迦の誕生を祝う日。仏誕節には、寺院で法要が営まれる。
8月15日頃	盂蘭盆会（うらぼんえ） 寺院では、旧暦7月15日に道場を開設して盂蘭盆の法要を行い、信者はそれぞれ縁故のある寺院に行き、先祖の供養を行う。
12月8日	臘八節（ろうはちせつ） 釈迦が修行を行い、飢えを味わった際に乳粥 <small>ちちかゆ</small> を施され、悟りを開いたことに由来する祭りである。寺院では法要が営まれ、粥が振る舞われる。 粥を食する風習は、中国南部でよく見られる。

注) 宗教行事は旧暦に基づき行われるため、毎年数日程度ずれる可能性がある。

② 冠婚葬祭

中国の冠婚葬祭は、必ずしも仏教の儀礼に基づき行われるわけではなく、民俗信仰に基づく習慣も見られる。

1) 誕生

中国では、子供が生まれる前に寺院へ行き、子供を授ける仏とされる観音菩薩に参拝する。

出生後の1か月間、カーテンを閉じて赤子を自宅の外に出さない風習がある。1か月が経過した後に僧侶を自宅に呼ぶか、あるいは寺院に参拝して祝う。

こうした風習は、必ずしも仏教に由来するものではない。

2) 節目

中国仏教には、一般の信者に共通の通過儀礼はない。ただし、集団で仏・法・僧に帰依するという「三帰依」式が行われる場合もある。

出家を志す信者は、寺院に入り修行をする。早い場合には7歳で入る場合もある。この場合、正式な僧侶ではないため、沙弥と呼ばれ、僧侶になる前の修行を行う。その後、成人になる18歳以降に出家する。出家は、師の認可があれば可能になる。

出家をしても、すぐに正式な僧侶となれるわけではなく、戒律を証明する戒牒かいだうと呼ばれる、僧としての身分証明に相当する戒を授かる必要がある。その儀式として、寺院で壇に登り、誓いを立て、質問を受ける等を経て、一人前の僧侶になる。

3) 結婚

中国では一般に、宗教色のない結婚式を挙げる人が多い。仏前で挙げる人は少ないが、その場合には、僧侶が般若心経を唱える。

4) 葬儀

葬式は、信者が僧侶に依頼して仏教による葬儀を執り行う場合もあれば、仏教徒でも宗教色のない葬儀を行う人もいる。

中国では現在、土葬を行うと罰金が科されるが、支払能力を有する場合、罰金を支払ってでも土葬を行う人もある。南部に土葬は見られるが、今日では火葬が主流である。

中国では、葬儀そのものがかなり多様化しており、土地不足のため海に散骨する人や、木の下に埋める人もおり、必ずしも墓が必要とされているわけではない。

なお死後、寺院に死者の位牌ゐはいが置かれることは多い。命日やその他の節目に亡霊超度という法要も寺院で行われる。

1-3. 宗教生活(キリスト教)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

教派によって様々であるが、プロテスタント系の教派では飲酒や喫煙を禁じているところも存在する。しかし実態としては、信者が皆それを遵守しているわけではなく、信仰の度合いによってその遵守の程度も様々である。なお、プロテスタントの牧師は妻帯が認められるが、カトリックの司祭の妻帯は認められていない。

2) 礼拝

安息日(多くの教派では日曜日)には信者が教会に集い、聖職者が執り行う礼拝の儀式に参加する。この儀式をカトリックでは特に「ミサ」と呼ぶ。

礼拝の儀式の内容は教派によって異なる部分もあるが、多くの場合、聖書の朗読、聖歌の合唱、聖職者による説教等の後、キリストの血と肉を意味するぶどう酒とパンが聖職者から信者に与えられるという構成になっている。

3) 教化育成

信者の教化育成は主に教会において行われている。安息日には「日曜学校」「教会学校」と呼ばれる教育活動が子供を対象として行われており、子供たちはそこで聖歌を歌い、聖書の朗読をするなどして信仰心を養う。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

キリスト教には様々な年中行事があり、重視するものは教派によって様々であるが、ほぼ全ての教派にとって重要な祭事は、以下に示す「復活祭(イースター)」と「クリスマス」「聖霊降臨日(ペンテコステ)」である。これらの祭事では、当日だけでなく、その数週間前から連日のように特別な礼拝の儀式が行われ、多くの信者が教会に集う。

図表 5 キリスト教の主な宗教行事

時期	名称・概要
年によって異なる	復活祭（イースター） 十字架にかけられて死んだイエス・キリストが3日目に復活したことを記念・記憶するための行事であり、多くのキリスト教派にとって最も重要な祭日。春分以降における最初の満月を迎えた次の日曜日に開催されるため、年により開催日が異なる。この日の礼拝では、復活の象徴である「イースター・エッグ」が信者に配られる。
年によって異なる	聖霊降臨日（ペンテコステ） イエスの復活・昇天後、集まって祈っていた信徒たちの上に、神からの聖霊が降ったという出来事を記念する行事。復活祭の50日後に開催される。
12月25日	クリスマス イエス・キリストの降誕（誕生）を祝う行事。多くの信者は前日と当日に教会で礼拝を行い、当日の夜は家族で過ごす。

② 冠婚葬祭

他国でも基本的に同様であるが、中国のキリスト教でも冠婚葬祭には聖職者と教会が深く関わっている。

1) 誕生

キリスト教に入信する際の儀式として「洗礼」があるが、両親が信者の場合は、生まれて間もない子に対して洗礼式を受けさせる場合がある（幼児洗礼）。幼児洗礼では、両親と代父母（神に対する契約の証人となる役割の者）が儀式に立ち会い、聖職者が子供の頭に水を注ぐ。また、このときに、洗礼名が付けられることが多い。

なお、教派によっては幼児洗礼を認めていないところもある。

2) 節目

幼児洗礼を受けた子供がある程度成長し、信仰の内容について理解できるようになると、「初聖体」「堅信」という儀式を行う。「初聖体」はキリストの血と肉の象徴であるパンとぶどう酒を受けることであり、「堅信」は生活の中で信仰を生きるという自覚を強めるための儀式である。なお、幼児洗礼を受けていない人が入信する場合、「洗礼」と「堅信」を一度に行うことが一般的である。

3) 結婚

クリスチャンにとって結婚は重要な意味を持ち，結婚式は聖職者の立ち会いの下，教会で執り行われる。

4) 葬儀

クリス教信者はクリス教式の葬儀を行うのが一般的である。式には聖職者が立ち会い，聖書の朗読や説教，聖歌の合唱などが行われる。

図表 6 青島キリスト教会（山東省青島市）



提供) 橋本和子

1-4. 宗教生活(イスラーム)の概要

(1) 日常生活

家庭や礼拝施設での礼拝等を通じて、日々、日常生活の中で宗教活動が行われている。

ムスリムに義務付けられた規範として、六信五行がある。六信は、唯一神アッラー、天使、使徒、啓典、来世の存在、定命を信じることである。五行は、信仰告白、1日5回の礼拝、喜捨(ザカート)、断食、聖地巡礼である。

1) 衣食住

イスラームでは、飲食物をハラール(食べてもよい食品)とハラーム(食べてはいけない食品)に分けている。豚肉、血液、適切な手続で処理されていない動物の肉、酒などはハラームに属するため、飲食が禁じられている。また、ヒジュラ暦の第9月には、日の出から日没までの間、ラマダーンと呼ばれる断食を行う。

総じて、ウイグル族の方が回族よりも、断食の実践や飲酒と喫煙に関する禁忌が緩やかな傾向にあり、断食を行わない人や酒やたばこをたしなむ人も多く見られる。ただし個人差があり、同じ民族でも、飲酒と喫煙をする人、しない人は様々である。

中国の伝統的なムスリムは、男性は帽子を着用し、女性はスカーフ又は帽子、あるいはスカーフの上に帽子を被る。洋服が浸透した現代において、全てのムスリムがそのような装いをするとは限らないが、行事の際には着用することが多い。なお、回族の男性は白い帽子を、ウイグル族は、男女ともにドッパと呼ばれる様々な刺繍の施された帽子を被る。

2) 礼拝

ムスリムは、早朝、昼、午後、日没時、夜間と、1日5回の礼拝を行う。5回の礼拝の時間になると、アザーンと呼ばれる礼拝の呼び掛けがマスジドから告げられ、ムスリムは礼拝を行う。また、毎週金曜日の昼には、マスジドで集団礼拝(金曜礼拝)が行われる。集団礼拝では、礼拝のほか、宗教指導者による説教が行われる。

家庭では、カーペットを敷いて清潔に保たれた礼拝用のスペースで礼拝を行うことが多い。

3) 教化育成

一般の中国ムスリムは、コミュニティや家庭の中における礼拝等、日々の生活習慣や宗教行事等を通して、ムスリムとしての知識を身につけるが、具体的な教義を学ぶ場としては「経堂教育」が挙げられる。「経堂教育」は、中国のマスジドで伝統的に行われてきた、アラビア語やイスラーム法などイスラーム諸学に関する教育を指す。新疆ウイグル自治区では現在は見られなくなっているが、回族では現在でも行われている。経堂教育における教師は、アホンやイマームと呼ばれる人々が務める。一般には経堂教育は男子を対象とするが、女学と呼ばれる女性のための教育機関も存在する。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

主要な行事として、犠牲祭と断食明けの祭りが有名である。

イスラームではヒジュラ暦（イスラーム暦）と呼ばれる暦を採用している。ヒジュラ暦は月の満ち欠けを基準とする太陰暦であり、1年は12か月354日（又は355日）である。そのため、宗教行事の実施される時期が、西暦のカレンダー上では毎年少しずつ早くなる。

主たる宗教行事は、断食明け祭りと犠牲祭であるが、教派によっては、預言者ムハンマドの聖誕祭、ファーティマ祭などを祝う。

なお、回族の中には、漢族の「春節」「端午節」「中秋節」などを祝う人々もいるが、盛大な祭事ではなく祝祭日として、外出や帰省をしたり、ちまきや団子等を食したりする程度である。

図表 7 イスラームの主な宗教行事

ヒジュラ暦 (AH)	名称・概要	西暦換算 AH1435年 AH1436年
第3月12日	預言者ムハンマドの聖誕祭 預言者であるムハンマドの誕生日で、男性は Masjid に行き、クルアーンのみならず預言者賛歌を朗唱する。なお、聖誕祭を実施しない Masjid もある。	2014年 1月14日 2015年 1月3日
第10月1日	断食明け祭り 毎年ヒジュラ暦第9月（ラマダーン）の1か月間、日の出から日没まで飲食物を全く口にしない断食が行われる。断食明け祭りは、ラマダーンが明けたことを祝う大祭であり、およそ3日間にわたって行われる。祭りの間は各家庭で豪勢な食事や菓子が振る舞われ、子供には小遣いが手渡される。人々は友人や親類の家を訪問し合う。墓地にお参りを行うこともある。	2014年 7月29日 2015年 7月18日

ヒジュラ暦 (AH)	名称・概要	西暦換算 AH1435年 AH1436年
第12月10日	犠牲祭 ヒジュラ暦第12月10日には、各地で犠牲祭が行われる。犠牲祭では、牛、山羊、羊などの動物が捧げられ、近隣に贈り合う。男性は早朝、マスジドに行きアホンの説教を聴き、集団礼拝を行う。礼拝終了後に、マスジドの敷地内や裏手で家畜を屠り、新鮮な肉を、マスジド、親類、友人、貧しい人に配る。女性は来客に備えて食事を用意する。	2014年 10月5日 2015年 9月24日

② 冠婚葬祭

ムスリムは、様々な儀礼を経て成長していく。儀礼は公的に定められたものではないが、儀礼に多くの人々が参加することで社会秩序が形成されている。

以下の誕生、節目、結婚、葬儀の行事は、主にウイグル族や回族に見られるが、地域差があり、実施方法などは多様である。

1) 誕生

ウイグル族の女性は、出産後、家の戸に赤い布を張る。それは、出産の知らせであるとともに、母親が他人の訪問を断ることを目的とした知らせでもある。生まれて7日後に、アット・トイと呼ばれる命名祝いを行う。イマームやモッラーと呼ばれる宗教指導者を自宅に招き、絨毯を敷いた上に子供を寝かせ、布で幾重にも巻いた後、アホンが抱き上げて祈願する。

2) 節目

ムスリムの男性は、割礼を病院若しくは家で受ける。かつては床屋が副業として行っていたが、現在は医師が行う。家族のみで内々に行われるが、近年は多くの人々が集まり、お金を出して祝うこともある。割礼の対象となる年齢は民族などで異なっており、7歳くらいで行う場合や、生まれてすぐ行う場合もある。

3) 結婚

近年、伝統的な結婚式が減り、ウエディングドレスを着用するような西洋式の結婚が増えている。かつては結婚相手を親が決めていたが、現在では自分で相手を探して親の承認を得ることも一般的となっている。結婚式そのものは世俗的であり、イスラームの色彩は薄い。結婚式に先立って行われる婚約式では、男性が女性にマフルと呼ばれる婚資を贈り、宗教指導者がクルアーンを朗唱する。その後の婚礼で、友人知人と呼んで式を挙げ、宗教指導者がクルアーンを詠んだ後、披露宴を行う。

ウイグル族の場合、結婚式は年々盛大になる傾向が見られ、式の会場と日が、婿方と嫁方で別々である。農村では女性が先、男性が後の日にする。結婚式ではニカーフと呼ばれるイスラームにおける結婚の承認をし、電気製品、時計、服などを交換する。かつては、花嫁を絨毯に乗せて火の周りを回る等の儀式があった。現在は、一部 Masjid で行われる式もあるが、ホテルやレストランで挙げられる結婚式が多いため、このような習慣は見られない。

4) 葬儀

中国ムスリムは、日本のように病院で死亡することが一般的ではなく、治療の見込みがない病人は家に戻る。そして、医師が死の判定をすることはなく、患者が動かなくなれば、家族は死亡とみなす。

葬儀の手順としては、まず遺体を洗い、白い布で包んで Masjid へ運び、葬儀を行う。その後、遺体はマッカの方角に頭を向け土葬される。イスラームでは偶像崇拝を禁止しているため、故人のための位牌、祭壇、遺影を設置することはない。

中国ムスリムに限らず、イスラームでは土葬が義務とされ、火葬は禁忌である。

図表 8 回族の礼拝風景（寧夏回族自治区）



提供) 澤井充生

図表 9 犠牲祭の集団礼拝（青海省）



提供) 澤井充生

図表 10 多様なイスラームの建築様式



清真寺
(寧夏回族自治区)

清真寺
(北京市)



提供) 澤井充生

1-5. 宗教生活(道教)の概要

(1) 日常生活

中国では、道教信仰は人々の生活の一部となっており、多くの人は、日常的に起こる災いを払い、利益を得ることを目的に頻繁に廟や道観へ足を運ぶ。

1) 衣食住

道教の一般的な信者の衣食住は、その他の中国人のものと大きな違いはない。ただし、大規模な廟の役員など、特に信仰心の厚い信者は、素食（精進料理しか口にしない）を貫く場合もある。

2) 礼拝

人々は、悩みや願い事があるたびに廟や道観を訪れ、参拝して願掛けをする。参拝する人々は、廟に用意された台に持参した供物（果物や肉、魚、卵など）を供え、拝する神の像の前に赴き線香をあげる。参拝が済むと、金炉と呼ばれる炉で紙銭を焼き、神々に送る。占いも盛んであり、多くの廟では日本の神社等と同様、おみくじができるようになっている。

道士が不在で行うこのような礼拝のほか、道士やシャーマン、法師等による様々な儀式も、廟において日常的に行われている。最も一般的に見られるのは「祭解」と呼ばれる呪術儀式で、これは道士が神々に対して祈り、信者に降りかかる災いを取り払うという、日本の神社における「お祓い」と似た内容になっている。

このように、中国の人々は何かが不吉なことがあると、比較的気軽にこうした儀式を依頼し、災いを退けようとする。

3) 教化育成

中国の人々にとって、道教の神々や廟に対する信仰は生活の一部となっており、幼い頃から自然と身に付けていくものである。多くの人は経典を読むこともなく、廟、家庭いずれにおいても、特別な教化育成は行われぬのが一般的である。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

道教には様々な儀式が存在するが、その多くは人々の求めに応じて実施されるものであり、定期的な行事は多くない。ただ、それぞれの廟が主神として祀る神の誕生日には、「廟会」と呼ばれる大規模な祭事を行うことが多い。

廟会では、道士だけでなく扶乩（フーチー）と呼ばれるシャーマンや法師と呼ばれる民間信仰の聖職者も加わり、様々な儀式が盛大に行われる。なかでも、主神の像を神輿に乗せて練り歩き、シャーマンがその周囲で神がかりを行う「出巡」は、廟会のなかでも特に重要な儀式とされている。また、一定規模以上の廟では、主神のほかにも多くの神々

を祀っている場合が多く、主神以外の神の誕生日にも同様に廟会を開催する廟もある。

例えば、以下に示す神々は人々からの信仰が特に厚く、誕生日とされている日には各地の廟で盛大な廟会が開催されている。

図表 11 道教の宗教行事（廟会）の例

時期	名称・概要
1月9日	<p>玉皇誕</p> <p>玉皇の誕生日。玉皇は正式名称を「昊天金闕至尊玉皇大帝」と言い、人々から道教の最高神として崇められている。（先に挙げた「元始天尊」等の3柱の神は道教の教義上の最高神であり、一般の人々の感覚とは少しずれがある。）</p>
3月23日	<p>媽祖誕</p> <p>媽祖の誕生日。もともとは航海の安全をつかさどる神であったが、後に航海だけでなく全体的な守護神の位置に据えられ、日常生活の身近に存在する女神として幅広く信仰されている。</p>
6月24日	<p>關帝誕</p> <p>關帝の誕生日。三国志で有名な蜀の關羽が神格化されたものであり、金運や商売をつかさどる神でもあることから人々からの人気が高い。</p>

注) いずれも旧暦。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

誕生に関して、特別な祭事行われていない。

2) 節目

成人等の節目に関して、特別な祭事行われていない。

3) 結婚

結婚に関して、特別な祭事行われていない。

4) 葬儀

道士が葬儀に深く関わる台湾道教とは異なり、中国道教、特に全真教では道士が葬儀に関与することは少ない。

2. 日本における宗教事情

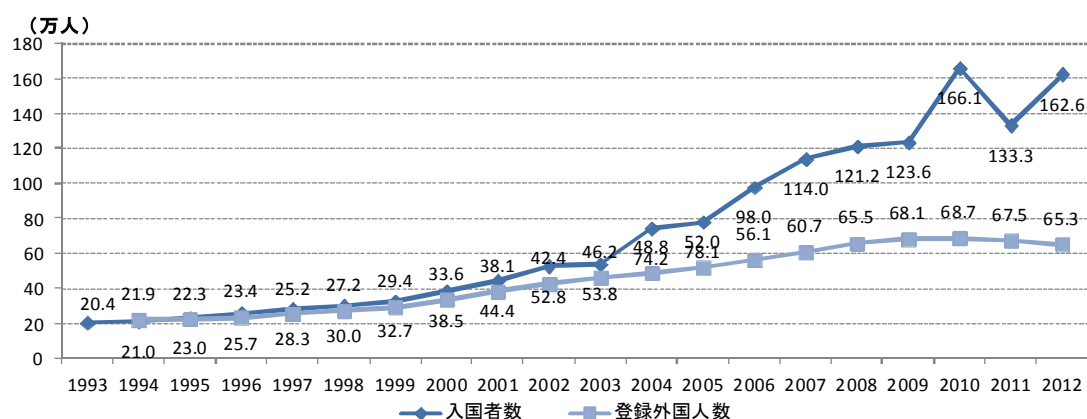
2-1. 在留外国人の概要

(1) 中国から日本への渡航の傾向

日本に住む中国人は、2012年時点で60万人を超えており、東京都、神奈川県、大阪府など、大都市周辺に居住する傾向が見られる。在留資格別に見ると、永住者、定住者、技能実習、留学など、多岐にわたる。

2011年の法務省「登録外国人統計」によると、出身地別では、遼寧省出身者が10万人と最も多く、黒竜江省、福建省と続く。なお、ムスリムの割合が高いウイグル族が多く住む新疆ウイグル自治区出身者は1,984人である。

図表 12 入国者数・在留外国人数の推移（中国）



出典) 法務省『登録外国人統計』, 同『出入国管理統計』の各年版

注) 入国者数は、台湾・香港を除く。登録外国人数は、2012年のみ台湾・香港を除くが、それ以前は全て台湾・香港を含む。

図表 13 都道府県別在留外国人上位10都道府県（中国、平成24年）

順位	都道府県名	在留外国人数	全国に占める割合	順位	都道府県名	在留外国人数	全国に占める割合
1	東京都	154,449人	23.7%	6	千葉県	41,254人	6.3%
2	神奈川県	53,108人	8.1%	7	兵庫県	24,338人	3.7%
3	大阪府	50,581人	7.8%	8	福岡県	21,169人	3.2%
4	埼玉県	47,267人	7.2%	9	岐阜県	14,955人	2.3%
5	愛知県	46,949人	7.2%	10	広島県	14,553人	2.2%

出典) 法務省『登録外国人統計』平成24年版

(2) ネットワークとコミュニティ

日本に住む中国人は、地縁、血縁、宗教などの様々なネットワークを活用して暮らしている。古くから、同郷団体や同職団体が組織され、各地に中華会館が建てられた。

仏教の場合、コミュニティの中で寺院が一定の役割を果たす。信者が互いに支援することが多く、経済面、病気、倒産などで困っている人がいれば、寺院のネットワークの中で寄附を行うなどして助け合う。

キリスト教の場合、教会を中心として信者間のコミュニティ・ネットワークが形成されている。教義の上においてもそのようなコミュニティは重要なものとされており、信者は教会が企画するボランティア活動等に積極的に参加することで互いの結びつきを深め、問題が起こった際には互いに助け合うことも多い。

中国ムスリムの場合、中華街や華人コミュニティとの関わりは希薄である。マスジドやイスラーム団体に関わる者もいるが、こうした礼拝施設や団体と関わらない者もあり、宗教やコミュニティに対する意識やそれらを取り巻く状況は様々である。本国のムスリムがマスジドの周辺に集住してコミュニティを形成するのに対して、日本の中国ムスリムは交通の便や家賃で住宅を選ぶため、マスジドを中心としたコミュニティの形成は見られない。なお、現時点で中国ムスリムによって設立されたマスジドは日本国内に存在せず、身近なマスジドに通う。

道教の場合、中国人がコミュニティを形成している箇所が都市部に幾つか存在する。人間関係を頼って来日する事例が多く、住宅を借りる際にもそれらのつてを頼るため、当該地域の中国人が増えることとなり、必要となった廟が設立される流れとなる。

コラム 2 日本のチャイナ・タウン

◆幕末から現在まで

江戸末期に、我が国はそれまでの鎖国から、西欧諸国に対して開国をした。諸外国は、日本と貿易を行うために、通訳として中国人を連れてきた。もちろん日本語で会話をするのではなく、共通する漢字を用いて、筆談で交渉を行ったのである。この時期に、幕府によって開港された函館、新潟、横浜、神戸、長崎には、やがて商売を行う中国人が移住してきたのであった。

次第に街が形成されて、今や日本最大のチャイナ・タウンとなったのが、神奈川県横浜市の中野区中華街である。多くの中華料理店や雑貨店が立ち並ぶが、宗教関係の施設として、三国志の関羽で知られる関帝廟、航海の神である媽祖廟、中国語の礼拝を行うキリスト教会がある。交流のため出身地別で自主的に組織された同郷会館も複数ある。

近年、東京都豊島区の池袋駅北口周辺には、多くの中国人が集まる。1980年代以降に来日したニューカマーの人々によって、飲食店や商店、旅行、国際通信、書店、新聞社など様々な業種が営まれている。

2-2. 宗教生活(仏教)の概要

(1) 日常生活

中国の仏教団体が日本で宗教法人の認証を受ける事例はほとんどなく、中国人の仏教徒は、東京や各地にある台湾系の仏教寺院である佛光山に参拝することが多い。ただし小規模ではあるが、宗教法人化せずに活動している団体も存在する。

1) 衣食住

食生活は、禁酒が求められ、精進料理が推奨されるが、それをどの程度実践するかは個人に任せられている。精進料理を本格的に食する信者は、日本では外食が困難であるという問題を抱えている。

2) 礼拝

中国の仏教徒は定期的に寺院に参拝しており、日を選んで行く人が多い。菩薩の誕生日等には必ず参拝するほか、熱心な信者は時間が許す限り参拝する。

3) 教化育成

寺院に参拝する際、親は子供と一緒に連れて行くことが多い。

また、子供に仏教への関心を持たせるため、日本では「少年班」と呼ばれる青少年向けプログラムが提供されており、ボーイスカウト的な活動を通して仏教活動を行っている。中国ではそのような活動は少なく、日本で盛んに行われている。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

佛光山の場合、日常的に開催される法会以外に、清明節、盂蘭盆会、釈迦誕生を祝う浴仏節などが開かれる。その他、寺社間、信者間の交流のための団体旅行がよく行われている。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

中国人の仏教信者は、出産前に寺に参拝し、観音菩薩像に祈りをささげることが多い。

2) 節目

在留する中国人の間で行われる特別な通過儀礼はないが、台湾系の仏教寺院へ行き、仏・法・僧の三法に帰依し、仏教徒となるための儀式である三帰依式を受ける者もいる。

3) 結婚

中国人が日本で結婚式を挙げるとき、仏前にするかどうかは人により異なる。日本のように宗教色の薄い結婚式が一般的であり、仏前で挙げる人はむしろ少ない。

4) 葬儀

中国人の仏教徒が死亡した場合、本国に遺骨を送る人もいれば、日本の霊園で埋葬する人もいる。裕福な人は埋葬場所を選ぶが、その際は華僑が多く埋葬されている寺院などを選ぶ。

なお、中国では必ず墓前で爆竹を鳴らすのが、日本でそれをできない点が、墓参りにおいての本国と日本の大きな相違である。中国では、にぎやかな音で祖先に知らせると言われている。

コラム 3 仏学院と仏教徒

◆中国の仏学院と仏教教育

中国の仏教教育機関は仏学院と呼ばれ、中国各地にある大きな寺院の附属機関として設けられている。教育課程は、初級・中級・高級と分かれ、初級は中専（職業高等学校）、中級は大学専科（3年制）、高級は大学本科（4年制）に相当するものと位置付けられている。なお、仏学院の入学資格として、全く仏教に関する素養のない一般人の入学は認められておらず、既に沙弥として寺院に所属し、僧侶になる前の修行を積み、一定の作法を知っていることが求められる。

◆高等教育に相当する仏学院では仏教学のみならず歴史、外国語なども学ぶ

北は北京の法源寺の仏学院、南はアモイにある南普陀寺の仏学院が、中国における仏教教育関係の最高機関と称されている。これらの仏学院では、高卒以上の出家者を対象に高等教育レベルの仏教教育を行っている。在籍者は、仏教学、中国史、哲学、外国語（英語や日本語）などを学ぶ。

（参考）中国仏学院ウェブサイト

<http://www.zgfyx.cn/>

2-3. 宗教生活(キリスト教)の概要

(1) 日常生活

中国国内で活動している「中国天主教愛国会」系、「中国基督教三自愛国運動委員会」系の教会は、中国共産党政権により海外での活動を制限されており、日本国内にこれらの系統に属する教会は存在しない。一方で、日本国内には華僑・華人の手によって建てられた中国系の教会は多数存在しており、日本で生活している中国人キリスト教徒の多くはこれらの教会に通っている。

1) 衣食住

一部の敬虔なキリスト教徒（特にプロテスタント系）は、日本においても飲酒と喫煙の禁止などの教義を遵守しているが、特に日本国内で生活する上において不便になることはない。その他、一般的な信者の日常生活も通常の日本人と大きく変わらない。

2) 礼拝

日本で生活する中国人キリスト教徒は、華僑・華人の手によって建てられた中国系の教会に通い、礼拝の儀式に参加するのが一般的である。また、日本人が運営する教会においても、大規模なところでは中国語による礼拝の儀式を定期的に行っている場合があり、これを利用する信者も少なくない。

3) 教化育成

日本国内においても、日曜学校（教会学校）を開いて子供向けに教化育成を行っている教会は存在する。しかし一般的には、信者数がそろわず日曜学校を開催できない場合が多い。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

日本国内においても、「復活祭（イースター）」「クリスマス」「聖霊降臨日（ペンテコステ）」等の際には、教会において通常の礼拝とは異なる特別な儀式が開催される。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

両親が信者の場合は、生まれて間もない子に対して洗礼式を受けさせる場合がある（幼児洗礼）。内容については中国本国におけるものと同様である。

2) 節目

幼児洗礼を受けた子供がある程度成長し、信仰の内容について理解できるようになると、「初聖体」「堅信」という儀式を行う。「初聖体」はキリストの血と肉の象徴

であるパンとぶどう酒を受けることであり、「堅信」は生活の中で信仰を生きるという自覚を強めるための儀式である。これも内容については中国本国におけるものと同様である。

3) 結婚

中国人同士の結婚では、中国に帰って結婚式を挙げる場合も多いが、日本国内の教会でキリスト教式の結婚式を行う場合もある。

4) 葬儀

教会や葬儀会場において、キリスト教式の葬儀を行う。

図表 14 教会の内部（広東省潮州市）



提供) 藤野陽平

2-4. 宗教生活(イスラーム)の概要

(1) 日常生活

中国ムスリムの日常生活は多様であり、宗教的な生活を送る者と、そうでない者がいる。

1) 衣食住

衣食住に関しては、中国ムスリムは日本の暮らしに合わせながら生活をしており、その暮らしや服装について、他の日本人と異なる大きな特徴は見られない。日本での中国ムスリムは、ウイグル族、回族ともに、通常洋服を着ているが、マスジドや宗教行事などを行う場合には、民族衣装やスカーフなどを着用することが多い。

中国ムスリムは、ハラールと呼ばれる、イスラームの教えにのっとって適切に加工・調理された食品を購入するのが一般的である。礼拝や断食は行わなくても、ムスリムのレストランにしか行かない人は多い。

なお、本国同様、酒やたばこをたしなむ人もいる。また、断食の実施の有無、飲酒と喫煙の習慣などは、人により異なる。

2) 礼拝

中国ムスリムの礼拝の習慣については個人差があり、熱心な信者はマスジドに通うが、通わない人もいる。毎日 5 回の礼拝を行う人は一部であり、ほとんど礼拝をしない人もいる。しかし、犠牲祭や断食明け祭りなどの年中行事の際には、可能な限りマスジドへ行く。

3) 教化育成

信仰の度合いにより、マスジドでアラビア語の習得や、クルアーンについて学ぶ機会を得る人もいるが、ウイグル族も回族も、宗教というよりは民族意識の方が強く、イスラームに対する信仰は緩やかな人が多い。それらの度合いは、地域差や個人差が大きい。

中国ムスリムの中には、トルコ政府管轄下で運営される東京ジャーミー（東京都渋谷区）に通う人もおり、トルコ人と知り合ってクルアーンを学ぶといったこともある。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

ウイグル族、回族のいずれも、犠牲祭及び断食明け祭りの二大祭りを祝う人は多く、祭りの日にマスジドへ礼拝に行ったり、授業や仕事で忙しい場合には自宅に友人知人を招いて祝ったりする。

特にウイグル族の場合、マスジドで礼拝を行った後に、それぞれ親しい友人同士が自宅でパーティーを開き、祝ったりする。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

中国ムスリムは、子供が誕生すると、宗教指導者又は父親が耳元でクルアーンを唱えるなどの儀式を行い、イスラーム名を付与する。

2) 節目

中国ムスリムは、一般的に男の子が生まれた場合、割礼を施す。日本で生まれた男児も、日本又は本国で割礼を行う。なお、日本で割礼を施術する場合、外国人患者の受入れ体制が整った病院など、割礼を行える病院に行くことになる。

3) 結婚

回族は、民族形成の過程で周辺民族を取り込んで形成された歴史的背景から、他民族であっても相手がイスラームに改宗すれば結婚は認められる。ウイグル族の場合、結婚相手は同じ民族や同じテュルク系の民族、回族であることが望まれる。

出会いに関しては、本国において親の紹介などで知り合い、結婚式は日本から本国へ帰国して挙げることが多い。日本で結婚式を挙げる場合においても、マスジドでイスラームの結婚式を挙げ、本国で盛大に披露宴を行う。

4) 葬儀

中国ムスリムはニューカマーがほとんどであり、留学などで来日する人が多いことから、高齢者が少なく、死亡する事例はまだ少ない。過去の死亡者の場合では、イスラームにのっとった埋葬が可能なイスラーム霊園に埋葬されている。ムスリムの場合、必ず土葬であり、火葬による埋葬は禁忌である。

コラム 4 イスラームと多様な中国のムスリム

◆中国ムスリムは、10の民族からなるとされる

中国には、イスラームを信仰する10の民族があるとされる。人口の順に、回族、ウイグル族、カザフ族、東郷族、クルグズ族、サラール族、タジク族、ウズベク族、保安族、タタール族である。回族がほとんど中国全土に分布しているのに対して、回族以外の諸民族は、一部の例外的な人々を除いて、その大部分が、新疆ウイグル自治区、甘肅省、青海省、寧夏回族自治区という、中国の西北部に集中している。

◆ムスリムのいるところマスジドあり

かつてより廃れてきたもののムスリムのいるところには必ずマスジドがあると言われてきた。中国ムスリムは、地域にマスジドを建立し、マスジドを中心にコミュニティを形成し、その中で冠婚葬祭など各種儀礼をやってきたという伝統がある。教育も宗教も、社会生活全般がマスジドを中心に営まれている。

2-5. 宗教生活(道教)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

大規模な廟の役員など、特に信仰心の厚い信者は、素食（精進料理しか口にしない）を貫く場合もある。その場合、日本では精進料理を食べられる飲食店が限られており、外食が困難となっている。

その他の点に関しては、衣食住において大きな支障となることは少ない。

2) 礼拝

横浜中華街にある関帝廟のように、中国人が多く集まるエリアには廟が建てられることがある。ただし、台湾の人々と比較すると、中国の人々は廟に対するこだわりがそれほど強くなく、廟設立の意欲は高くないと考えられる。

3) 教化育成

既に信仰を持った人々が日本に来て廟に集まるのが通常で、日本国内では教化育成は行われていない。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

日本の廟においても、中国の廟と同様に廟会を行っている。しかし、主神を神輿に乗せて練り歩く「出巡」において、中国ではシャーマンによる荒々しい神がかりが重要な役割を持つのに対し、そのように危険な儀式を路上で行うことが困難で、また担い手もいない日本では実施されていないという点が、本国と大きく異なる部分である。

② 冠婚葬祭

誕生や節目、結婚など、冠婚葬祭については道教との関係が薄く、日本国内では道教系の祭事は行われていない。

1) 誕生

誕生に関して、特別な祭事は行われていない。

2) 節目

成人等の節目に関して、特別な祭事は行われていない。

3) 結婚

誕生に関して、特別な祭事は行われていない。

4) 葬儀

日本において道教式の葬儀を行うことはほとんどない。

中国の人々は、道教の教義そのものに対する関心は比較的lowく、道教は主に現世利益のために信仰されていると言える。しかし一方で、その教義や仙人になるための修行法は長い歴史の中で発展を続けている。ここでは、その一部について『中国人の宗教・道教とは何か』（松本浩一）より紹介したい。

◆「外丹」の研究が生み出したもの

古くは、仙人になるためには、仙薬、つまり不老不死になるための薬を服用する必要があると考えられていた。（このような考え方・方法を「外丹」と呼ぶ。）現代の日本人からすると、仙薬で不老不死になるなど荒唐無稽な話に聞こえ、またそれが実際どのような成果を生み出したのかは、今となっては分からない。しかし、外丹の研究成果の一部が、別の形で今の中にもいかされていることは確かである。

金は仙薬の一つとして重宝され、金そのものの錬成も外丹の研究として進められてきた。その原材料には硫黄と硝石が、そして燃料としては炭が使われたが、これは今も使われている黒色火薬の原料であり、黒色火薬は外丹の研究から生まれたと言われている。

さらに、金のほかにも鉱物や植物などあらゆるものが仙薬の候補として研究され、その知識の系譜は現在の漢方薬につながっている。

このように、（恐らく）不老不死の仙薬を生み出すことはかなわなかった外丹の研究であるが、その副産物として、火薬と漢方薬の発明という、重要な成果を残したのである。

◆「外丹」から「内丹」へ

外丹の研究の結果として開発された仙薬の中には、水銀等の有害物質を含むものも存在しており、その毒性が明らかになるにつれ、外丹は次第に廃れていった。一方で、外丹の研究成果として蓄積された知識の体系は、そのまま失われることなく、次は「内丹」という形で発展していくことになる。

内丹は、外丹で用いる炉に代わり、自らの身体を炉と見立て、精神や気の操作で不死の体を作り出すという発想のもので、宋代以降、現在に至るまで道教の修行の主流となっている。その内丹の修行法からは、「太極拳」や「気功」が生み出され、現在の日本でも多くの愛好者が楽しみ、またその健康づくりにも役立っている。

第2章 台湾

1. 現地における宗教事情

1-1. 宗教の概要

(1) 宗教人口

2012年の台湾政府内政部の統計報告によると、台湾における宗教人口は、道教及び一貫道、キリスト教（カトリック及びプロテスタント）並びに仏教が主流を占めており、それ以外にイスラーム、バハイイー教、日本を発祥とする宗教団体などの信者も存在している。

(2) 宗教団体に関する制度

台湾では、中華民国憲法第3章第13条に基づき宗教の自由が認められ、各宗教は平等であると規定されている。

台湾の宗教行政は内務部民政司が担っており、宗教団体は、財団法人として登録することで税制優遇を受けることができ、布教者用のビザ取得が可能となる。ただし、法人登録をせずに私的な団体として活動する事例も存在する。

台湾においては、1949年から1987年まで戒厳令が敷かれており、いわば「戦時体制」として宗教活動に制限が加えられていた。思想・信仰の自由、集会の自由に制限が加えられ、特に日本的な思想・宗教については厳しく監視されていた。日本から台湾に進出した宗教団体には、例えば、支部の解散命令を受け、1990年代になるまで活動が認められなかった宗教団体もあれば、禁止はされなかったが戒厳令下に厳しい制約を受けた団体も存在したという。こうした統制は1970年代後半から緩くなり、戒厳令が解除されたのち、現在では法人として登録していなくても布教は可能であり、登録そのものも以前より認められやすくなっている。

(3) 主要な宗教の概要

以下では、比較的宗教人口の多い、仏教、キリスト教、道教の概要について整理する。

仏教について、台湾では純粋な仏教寺院は少なく、多くが道教との習合と見られる。

また、2012年時点で、カトリック教徒19万人に対し、プロテスタントが40万人であることから、特に記載のない限り、キリスト教はプロテスタントについて言及している。

① 仏教(台湾)の概要

台湾の主要な仏教団体としては、五大道場と呼ばれる法鼓山（台北県金山）、佛光山（高雄県大樹）、慈濟基金会（花蓮県）、中台山（南投県）、靈鷲山（台北県貢寮郷）などがある。例えば佛光山関連施設における、「教育で人材を育成し、文化で仏法を広め、慈善で社会に福利をもたらす、共に修行することによって人心を浄化する」とのスローガンに見られるように、これら台湾の五大道場に共通する仏教の特徴は、「人間仏

教」「慈善事業」「仏学教育」「禅修」という言葉で表すことができる。また、これらの仏教団体には幾つか共通する点があり、まず、強いカリスマ性を備えた出家者が中心となっている点、都市から離れた場所に壮麗な本拠地を構えている点、出版・放送メディアを積極的に利用している点、そして出家者も信者も女性の割合が高い点、海外の華人社会にも拠点を持つ点が挙げられる。その他、独自に教義を解釈する仏教系の新宗教も多く存在する。

1) 教義

日本と同じ大乘仏教であり、教義として単一かつ至高の聖典が存在しているわけではなく、般若心経はんにやしんぎょうや阿弥陀経あみだぎょうなど、日本と同様のものを経典として用いている。

台湾の五大道場に共通する仏教の思想として、「人間仏教」が特徴的なキーワードとして挙げられる。これは、仏教をより現代の生活に合わせて解釈しようとするもので、これまでの仏教に見られた、世俗世界からの隔離や清貧といったイメージを一掃し、既存の思想を分かりやすく伝え、現代の生活に密着した仏教を目指すものである。

2) 儀式や行事

信者は寺院の法会ほうえに参加し、読経する。佛光山の場合、ほとんどの週末に法会が行われている。

3) 教化育成

信者の教化育成に当たって五大道場は、仏教思想を分かりやすく説き、学校教育・大学教育を通して仏教の普及啓発を行っている。いずれも、出版・放送メディアを積極的に取り入れている点の特徴である。

佛光山の場合、中学高校及び高等教育機関などの学校教育機関、美術館、図書館のほか、日本のカルチャーセンターにも似た社会教育機関などを有している。講座等の教育内容は仏教及び仏教以外の多彩なプログラムから成り、これらは出家者や在家者によって提供されている。

4) 礼拝施設

五大道場の場合、礼拝施設として本山を拠点に、台湾全土に道場と呼ばれる支部を有する。本山は都心から離れた場所に壮麗な本拠地を構えているが、支部は都心の利便性の高い場所に設けられていることも多い。佛光山の本山には、阿弥陀仏像を安置した一般参拝客向けの空間や、仏教の展示解説や仏教美術の展示ギャラリーや宿泊食事施設、その他仏学講座、坐禅ざぜんや写経などの機会を提供する仏学普及の空間や、出家者及び仏学院在籍者のための空間も存在する。宗教施設としての聖なる領域と、散策や観覧という観光地的な領域の二つの側面を有する施設である。

② キリスト教(台湾)の概要

台湾では1800年代以降、欧米のキリスト教諸派が活発な布教活動を行っており、カトリック、そしてプロテスタントの様々な教派が根付いている。さらに台湾の教会は、礼拝で使用する言語の違い（北京語あるいは台湾語）によっても大きく性格が異なっており、そのあり方は多様である。

この中で最も信者数が多い教派としては、プロテスタント系の「台湾^{キリスト}基督長老教会」が挙げられる。台湾基督長老教会は、礼拝において台湾語を用い、信者は本省人（日本統治時代から台湾に住む人々）が中心である。次に信者数が多いのが「地元にあって合一である立場に立つ教会」であり、こちらは礼拝において中国語を用い、信者は外省人（日本の台湾統治終了を経て、国共内戦後に中国本土から移住した人々とその子孫）が中心である。

またこの他に、欧米の教派とは関係の薄い教派も幾つか存在しており、なかでも「真耶穌^{しんやそ}教会」が有名である。これはもともと中国で設立された教派であるが、現在では台湾が活動の中心となっている。

1) 教義

台湾のキリスト教諸派の中でも、欧米由来の教派が持つ教義は、欧米の同系統教派の教義と大きく違わない。一方で、欧米の諸教派と関わりの薄い教派では、独自の解釈に基づく教義を持っている場合がある。

例えば真耶穌教会では、聖書主義に基づき、洗礼、洗足、^{せいじき}聖餐、安息日、聖霊の五大教義を持ち、神は父・子・聖霊の三位ではなく、全てイエスが姿を変えて現れたものと考えている。

2) 儀式や行事

儀式や行事は、教派によって若干異なるが、安息日である日曜日に信者が教会に集まって礼拝する点やクリスマスやイースター（復活祭）を重視する点などは、ほとんどの教派で共通している。ただし、真耶穌教会では土曜日を安息日としている点が他の教派と異なる。

3) 教化育成

信者の教化育成は、教会において行われる。安息日には「日曜学校」「教会学校」と呼ばれる教育活動が子供を対象として行われており、子供たちはそこで聖歌を歌い、聖書の朗読をするなどして信仰心を養う。

4) 礼拝施設

教派ごとに各地に教会を建て、そこを礼拝施設としている。また、そこで主に用いられる言語が北京語か台湾語かによっても教会が分かれていることが、台湾におけるキリスト教の特徴と言える。なお、北京語を使用する教会には外省人や台湾語が不自

由な若者が集い、台湾語を使用する教会には本省人が集うのが一般的である。

③ 道教(台湾)の概要

道教の宗派は、中国では「全真教」と「正一派」に大別されるのに対し、台湾では「全真教」は存在せず、「正一派」が中心となっている。正一派の特徴は、神々を祀る「廟」を信仰の対象とすることであり、「廟信仰」とも呼ばれている。

また、廟信仰のほか、道教系の新宗教も多数存在しており、これらは「民間教派」と呼ばれている。その中で最も大規模なものの一つが、「一貫道」と呼ばれる教派である。

さらに、占いを主な活動内容とする「術数」と呼ばれる団体も、広義での道教団体とみなされている。

これらのうち、台湾の人々にとって最も一般的なものは廟信仰であり、本節でもこれを中心に整理する。一方で、民間教派や術数は、信者の数こそ廟信仰よりも少ないものの日本への進出意欲を示す事例があるため、後半の「日本における宗教事情」で部分的に取り上げる。

1) 教義

道教では、あらゆるものに神が宿るとされており、無数の神々の存在が説かれている。また、それらの神々には序列があり、「元始天尊」「靈宝天尊(太上道君)」「道德天尊(太上老君)」の3柱の神が最高神として位置付けられている。

道教の聖職者は「道士」と呼ばれ、仙人になることを目標に修行に励む傍ら、人々の求めに応じて様々な宗教的儀式を行う。中国の全真教は出家主義であるが、台湾の廟信仰は在家主義であり、道士は市井にあって妻子を持つ。

道教には無数の経典があり、道士は修行の一つとしてこれらを学ぶが、人々がこうした経典に触れることは少ない。人々は、道教の持つ哲理よりも、日常における願い事の成就や困り事の解決を願って道教の神々を祀っている。

2) 儀式や行事

人々は悩みや願い事があるたびに廟を訪れ、参拝して願掛けをする。また、その悩みなどが重大な場合には、道士等の聖職者を廟に呼び、儀式を行う。その内容は、道士等が神将、神兵(神の使いの将軍、兵卒)を呼び出し、災いを取り払うという性格のものが多い。

その他、廟に祀っている神々の誕生日には、「廟会」と呼ばれる盛大な儀式を行う。

廟における儀式は、純粋に道教的なものというよりは、様々な民間信仰が混ざり合ったものとなっている。儀式の担い手に関して、道士だけではなく童乩(タンキー)と呼ばれるシャーマンや法師と呼ばれる民間信仰の聖職者が加わって行う儀式も多く、この3者で一つの儀式を執り行うという点が、台湾や中国における道教系の儀式の特

徴だと言える。

3) 教化育成

廟信仰は人々の生活の一部となっており、幼い頃から自然と身に付けていくものであるため、一般信者への教化育成は行われないのが通常である。

4) 礼拝施設

廟信仰の礼拝施設は、道教の神々を祀った廟であり、小さいものでは、ほこら程度のものから、複数の建物から成る大規模なものまで様々である。

台湾の道教、特に廟信仰は、仏教や儒教とも分かれ難く結びついている。廟には道教の神々だけではなく、儒教の聖人や仏教の仏と一緒に祀られていることも多く、人々はこれらの神仏を特に区別することなく信仰の対象としている。

廟は道士のものではなく、信者から選出される役員たちによって運営されている。道士は妻子や家を持ち市井で生活を営んでおり、儀式や行事の都度、廟の管理者から声が掛かり、廟において儀式を執り行う。

民間教派では、やはり専用の廟を持って信仰の対象としている場合が多い。ただし、一般的な廟信仰の廟が独立した建物であるのに対し、民間教派の廟はマンションの一室などに設置されている場合もある。

図表 15 北港朝天宮（雲林県北港鎮）



提供) 山下一夫

1-2. 宗教生活(仏教)の概要

(1) 日常生活

信者は、信仰の度合いに応じて、仏教徒としての生活を営む。

1) 衣食住

仏教徒には、菩薩戒などの信仰のレベルに応じた戒律などがある。

衣服に関して、菩薩戒を受けている信者は法会の際に着用を求められる衣服があるが、僧侶以外の在家信者が日常的に着用する衣類については特に決まりがなく、一般的な平服を着用する。

食事に関しては、佛光山の場合、信者は法会の前後に食事をとっている。その内容は、肉、魚やにんにくを用いない精進料理であり、信徒たちが交代で用意する。出家者の生活を体験するような講座を除いて、食事は信者の交流の場となる。なお、僧侶は日常生活の上で3食全て精進料理でなければならないとされ、飲酒と喫煙も認められていない。なお、在家信者は法会では精進料理だが、日常的には通常の食事をとる人が多い。ただし、信仰の度合いに応じて、僧侶のように精進料理を食す人もいる。

2) 礼拝

佛光山の本山には、学習施設、食事処、ギャラリー及び宿泊施設など、様々な施設が充実し、2,000人程度が入ることのできる板間の礼拝空間がある。本殿に相当する大雄宝殿では、定期的に法会が開かれる。信者は自分の居住地の近くにある道場などの支部で法会に参加することが一般的である。

3) 教化育成

五大道場をはじめとする台湾仏教は、学校教育や高等教育機関を有するほか、文化・教養の場として社会教育の機会を提供しており、小学校から寄宿舎を備えている所もある。

佛光山の場合、信者が現地で出家するためには、寄宿制となっている仏学院で2～3年間程度学び、資質のある人のみ選ばれて出家することになる。なお、選ばれない信者は佛光山の運営スタッフになることも多い。在家の信者に対しては、様々な法会や講座などを提供している。仏教をある種の「文化」や「教養」として伝えることで、仏教の普及に努めている。

佛光山において提供される法会においては、阿弥陀経や般若心経等の経文が掲載された小冊子が渡され、開始前にまず担当僧侶から経文の順番とページ数、その意味についての説明がなされる。その後、参加者全員で読経する。こうした一連の行為が終了したのちに、僧侶より話を聞く。話の内容は、その日の法会の縁起や意味、唱えた経文の意味、法話などである。

このほか佛光山では、一般の信者向けの教養講座などを開いており、写経や仏学講

座だけでなく、フラワーアレンジメントなど、一般的な教養・趣味プログラムを提供し、まず来てもらうことを目的としている。講師は、出家者及び在家者が中心である。

慈済基金会の場合、慈善、医療、教育、人文の4項目を「四大志業」と称している。これらに、国際援助、環境保全運動、骨髄寄贈、地域ボランティアを加えたものを同会の取り組む事業の方針である「四大志業・八大法印」として掲げている。疾病は苦痛の根源であり貧困に由来するものとして、医療活動を通して仏陀の精神を人間社会で実践するという考え方に基づく。台湾で発生した洪水や地震などの災害時には大規模な救援活動を行っている。海外での活動も行っており、アジア・アメリカ・ヨーロッパ・アフリカ地域にも支部を設置している。「富める者を啓発し、貧しき者を救済する」という思想に基づき慈善活動を行い、一方で独自のテレビ局や出版事業などを通じて啓発活動を行っている。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

日常的に開催される法会以外に、清明節があり、3日連続で供養、読経するといった盂蘭盆会、浴仏節などが祝われている。

このほか、寺社間、信者間の交流のための団体旅行がよく行われている。

図表 16 仏教の主な宗教行事

時期	名称・概要
4月4日	清明節（せいめいせつ） 別名「民族掃墓節」と言い、家族で祖先の墓参りを行う。
4月8日	浴仏節（よくぶつせつ） 灌仏会（かんぶつえ）、花祭りとも呼ばれ、釈迦の誕生を祝う日。各宗派の合同による法要が行われる。
8月15日頃	中元節（ちゅうげんせつ） 道教の行事と仏教行事の盂蘭盆会が習合し一体化したもの。盂蘭盆会とは仏教行事の一つで、旧暦7月15日に無縁仏を供養する。また、寺院では3日連続で読経・供養を行う。

注) 宗教行事は旧暦に基づき行われるため、毎年数日程度ずれる可能性がある。

② 冠婚葬祭

冠婚葬祭など、人生の節目の儀式は、伝統的な父系親族集団を重視する習慣と民間信仰によるところが根強くあり、仏教、道教の枠どおりに区分できるものではない。

1) 誕生

仏教の考え方に基づくものではないが、子供が生まれた際には、一族の祖廟^{そびょう}において祖先に報告・挨拶する習わしがある。

2) 節目

成人式などに該当するものは存在しない。

信者が出家者として出家する場合には、私有財産の全てを処分する。出家者は、生涯を独身で過ごすことになる。信者は徳を積むことが良いとされ、寺院に布施をして、それがそのまま社会活動に使われる。

3) 結婚

仏教の考え方に基づく冠婚葬祭の行事はなく、民間信仰がほとんどである。漢民族の世界は父系の血縁原理が土台にある。そのため出生や結婚などの際には、一族の祖廟において祖先に報告・挨拶する習わしがある。

例えば、結婚する際、花嫁は実家の祖先に出て行く事を挨拶し、嫁ぎ先でまた挨拶する。以前は、婚姻儀式で家から家に移動する間、花嫁がどこの一族にも守られていないことになるため、竹で編んだ篩^{ふるい}をかぶせて魔物から守った。民間信仰として現代でも結婚の際には車の後部座席に篩を付ける風習が受け継がれている。

台湾人は宗教施設を使用することなく、ホテルや専用のレストランで結婚式や披露宴を盛大に行う。結婚式の前には、貴金属のやり取りを行う婚約式などもあり、夫婦ともに大きな費用が掛かる。花嫁は持参金を持って嫁ぐが、他の南アジアなどで見られる持参金制度とは異なり、夫の財産ではなく妻の財産として子供の養育などに使われる。

4) 葬儀

台湾の葬式は、かつては土葬が一般的であったが、近頃では火葬で執り行う人が増えている。日本とは大きく異なり、葬儀は厳粛な雰囲気ではなく、派手に執り行われる。民間信仰に基づく考え方であり仏教の由来ではないが、遺族は亡くなったことが本人に分かるように激しく泣いたり、魔よけのための音楽隊がいたり、昔からのしきたりが根強く残る。

図表 17 仏教系の宗教施設（左：佛光山の本山，右：本山の仏像，高雄市）



提供) 五十嵐真子

図表 18 仏教寺院の様子（高雄市）



提供) 本課職員

1-3. 宗教生活(キリスト教)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

教派によって様々であるが、プロテスタント系の教派では飲酒や喫煙を禁じているところが多い。しかし実態としては、信者が皆それを遵守しているわけではなく、信仰の度合いによってその遵守の程度も様々である。

真耶穌教会では比較的厳格な教義を持っており、飲酒と喫煙の他、男女の交際等に関しても制限があり、多くの信者がこれを遵守している。

なお、プロテスタントの牧師は妻帯が認められるが、カトリックの司祭の妻帯は認められていない。

2) 礼拝

安息日（多くの教派では日曜日）には信者が教会に集い、聖職者が執り行う礼拝の儀式に参加する。この儀式をカトリックでは特に「ミサ」と呼ぶ。

礼拝の儀式の内容は教派によって異なる部分もあるが、多くの場合、聖書の朗読、聖歌の合唱、聖職者による説教等の後、キリストの血と肉を意味するぶどう酒とパンが聖職者から信者に与えられるという構成になっている。

3) 教化育成

信者の教化育成は主に教会において行われている。安息日には「日曜学校」「教会学校」と呼ばれる教育活動が子供を対象として行われており、子供たちはそこで聖歌を歌い、聖書の朗読をするなどして信仰心を養う。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

キリスト教には様々な年中行事があり、重視するものは教派によって様々であるが、ほぼ全ての教派にとって重要な祭事は、以下に示す「復活祭（イースター）」と「クリスマス」「聖霊降臨日（ペンテコステ）」である。これらの祭事では、当日だけでなく、その数週間前から連日のように特別な礼拝の儀式が行われ、多くの信者が教会に集う。ただし、真耶穌教会では聖書主義の立場からクリスマスを認めておらず、特別な行事は行わないこととなっている。

また、台湾のキリスト教では、もともとキリスト教とは関係のない一般的な年中行事にも教会が関わる場合がある。例えば、仏教関係の祭事である「清明節（日本の「お盆」に当たる年中行事）」では、キリスト教の教会においても死者の弔いを目的とした礼拝の儀式が行われることがある。

図表 19 キリスト教の主な宗教行事

時期	名称・概要
年によって異なる	<p>復活祭（イースター）</p> <p>十字架にかけられて死んだイエス・キリストが3日目に復活したことを記念・記憶するための行事であり、多くのキリスト教派にとって最も重要な祭日。「春分後の最初の満月の次の日曜日」に開催されるため、年により開催日が異なる。この日の礼拝では、復活の象徴である「イースター・エッグ」が信者に配られる。</p>
年によって異なる	<p>聖霊降臨日（ペンテコステ）</p> <p>イエスの復活・昇天後、集まって祈っていた信徒たちの上に、神からの聖霊が降ったという出来事を記念する行事。復活祭の50日後に開催される。</p>
12月25日	<p>クリスマス</p> <p>イエス・キリストの降誕（誕生）を祝う行事。多くの信者は前日と当日に教会で礼拝を行い、当日の夜は家族で過ごす。</p>

図表 20 台湾におけるカトリック教会の清明節



提供) 藤野陽平

◆本省人・外省人の対立構造とキリスト教会

台湾では、第二次世界大戦後から現在に至るまで、本省人（日本統治時代以前から台湾に住んでいる人々とその子孫）と外省人（それ以降に中国から台湾へ移住した人々とその子孫）の対立構造が続いている。その影響は宗教にも表れており、本省人の集う「台湾語教会」と外省人の集う「国語教会」が明確に分かれ、時には政治的な議論も持ち出しながら、論争を繰り返していることもある。

◆若い世代を中心に「靈糧堂」の支持が拡大

一方で、最近では若い世代を中心として、このような対立を良く思わない人々が増えてきている。「靈糧堂」は1950年代に中国で設立され、その後台湾に本部を移した比較的新しいキリスト教の教派であるが、政治色の薄い教派であるため、こうした人々に支持され、近年急速にその規模を拡大している。「靈糧堂」は活発な布教活動を行っており、日本にも既に複数の教会が設立されている。

② 冠婚葬祭

他国でも基本的に同様であるが、台湾のキリスト教でも冠婚葬祭には聖職者と教会が深く関わっている。

1) 誕生

キリスト教に入信する際の儀式として「洗礼」があるが、両親が信者の場合は、生まれて間もない子に対して洗礼式を受けさせる場合がある（幼児洗礼）。幼児洗礼では、両親と代父母（神に対する契約の証人となる役割の者）が儀式に立ち会い、聖職者が子供の頭に水を注ぐ。また、このときに、洗礼名が付けられることが多い。

なお、教派によっては幼児洗礼を認めていないところもある。

2) 節目

幼児洗礼を受けた子供がある程度成長し、信仰の内容について理解できるようになると、「初聖体」「堅信」という儀式を行う。「初聖体」はキリストの血と肉の象徴であるパンとぶどう酒を受けることであり、「堅信」は生活の中で信仰を生きるという自覚を強めるための儀式である。なお、幼児洗礼を受けていない人が入信する場合、「洗礼」と「堅信」を一度に行うことが一般的である。

3) 結婚

キリスト教にとって結婚は重要な意味を持ち、結婚式は聖職者の立ち会いの下、教会で執り行われる。結婚式の後、ホテル等の会場で親類・友人等を招いた盛大な披露宴を開くことも多い。ただし、この披露宴は宗教的な行事とは切り離されたパーティーであり、他の宗教の信者が実施しているものと大きな差はない。

4) 葬儀

キリスト教信者はキリスト教式の葬儀を行うのが一般的である。式には聖職者が立ち会い、聖書の朗読や説教、聖歌の合唱などが行われる。

図表 21 真耶穌教会における礼拝の儀式



提供) 藤野陽平

図表 22 民家玄関にある肖像画（台北市）



提供) 本課職員

1-4. 宗教生活(道教)の概要

(1) 日常生活

台湾では、道教信仰は人々の生活の一部となっており、多くの人は、日常的に起こる災いを払い、利益を得ることを目的に頻繁に廟へ足を運ぶ。

1) 衣食住

道教の一般的な信者の衣食住は、その他の台湾人のものと大きな違いはない。ただし、大規模な廟の役員など、特に信仰心の厚い信者は、素食（精進料理しか口にしない）を貫く場合もある。

一方で、道教系の新宗教である民間教派は、一般的な廟信仰と比較して厳しい戒律を持っており、多くの信者は素食を徹底している。

2) 礼拝

人々は、悩みや願い事があるたびに廟を訪れ、参拝して願掛けをする。参拝する人々は、廟に用意された台に持参した供物（果物や肉、魚、卵など）を供え、拝する神の像の前に赴き線香をあげる。参拝が済むと、金炉と呼ばれる炉で紙銭を焼き、神々に送る。台湾では占いも盛んであり、多くの廟では日本の神社等と同様、おみくじができるようになっている。

道士不在で行うこのような礼拝のほかに、道士やシャーマン、法師等による様々な儀式も、廟において日常的に行われている。最も一般的に見られるのは「祭解」と呼ばれる儀式で、これは道士が神々に対して祈り、信者に降りかかる災いを取り払うという、日本の神社における「お祓い」と似た内容になっている。

このように、台湾の人々は何かが不吉なことがあると、比較的気軽にこうした儀式を依頼し、災いを退けようとする。

3) 教化育成

台湾の人々にとって、道教の神々や廟に対する信仰は生活の一部となっており、幼い頃から自然と身に付けていくものである。多くの人は経典を読むこともなく、廟、家庭いずれにおいても、特別な教化育成は行われぬのが一般的である。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

道教には様々な儀式が存在するが、その多くは人々の求めに応じて実施されるものであり、定期的な行事は多くない。ただ、それぞれの廟が主神として祀る神の誕生日には、「廟会」と呼ばれる大規模な祭事を行うことが多い。

廟会では、道士だけでなく扶乩（フーチー）と呼ばれるシャーマンや法師と呼ばれる

民間信仰の聖職者も加わり、様々な儀式が盛大に行われる。なかでも、主神の像を神輿みこしに乗せて練り歩き、シャーマンがその周囲で神がかりを行う「出巡」は、廟会のなかでも特に重要な儀式とされている。また、一定規模以上の廟では、主神のほかにも多くの神々を祀っている場合が多く、主神以外の神の誕生日にも同様に廟会を開催する廟もある。

例えば、以下に示す神々は人々からの信仰が特に厚く、誕生日とされている日には各地の廟で盛大な廟会が開催されている。

図表 23 礼拝における供物



提供) 山下一夫

図表 24 道教の主な宗教行事

時期	名称・概要
1月9日	<p>玉皇誕</p> <p>玉皇の誕生日。玉皇は正式名称を「昊天金闕至尊玉皇大帝」と言い、人々から道教の最高神として崇められている。(先に挙げた「元始天尊」等の3柱の神は道教の教義上の最高神であり、一般の人々の感覚とは少しずれがある。)</p>
3月23日	<p>媽祖誕</p> <p>媽祖<small>媽祖</small>の誕生日。もともとは航海の安全をつかさどる神であったが、後に航海だけでなく全体的な守護神の位置に据えられ、日常生活の身近に存在する女神として幅広く信仰されている。</p>
6月24日	<p>関帝誕</p> <p>関帝の誕生日。三国志で有名な蜀の関羽が神格化されたものであり、金運や商売をつかさどる神でもあることから人々からの人気が高い。</p>

注) いずれも旧暦。

図表 25 新港奉天宮の廟会（嘉義県新港郷）



提供) 山下一夫

② 冠婚葬祭

1) 誕生

誕生に関して、特別な祭事行われていない。

2) 節目

成人等の節目に関して、特別な祭事行われていない。

3) 結婚

結婚に関して、特別な祭事行われていない。

4) 葬儀

一般的な道教式の葬儀は、ダンサーや音楽隊なども呼ばれたにぎやかな雰囲気なのか、道士や扶乩（フォーチー）、法師が数日にわたり様々な儀式を行う。ただし、一般的な道教信者は、道教式の葬儀に強いこだわりがあるわけではなく、多大な費用の掛かる道教式葬儀でなく、仏教式など他宗教の葬儀形式を選択する信者も多い。

また、葬儀のあり方は、地域による差も大きい。上記のような道教式の葬儀は、主に台湾南部で行われており、北部では葬儀に道士が関わることはまれである。

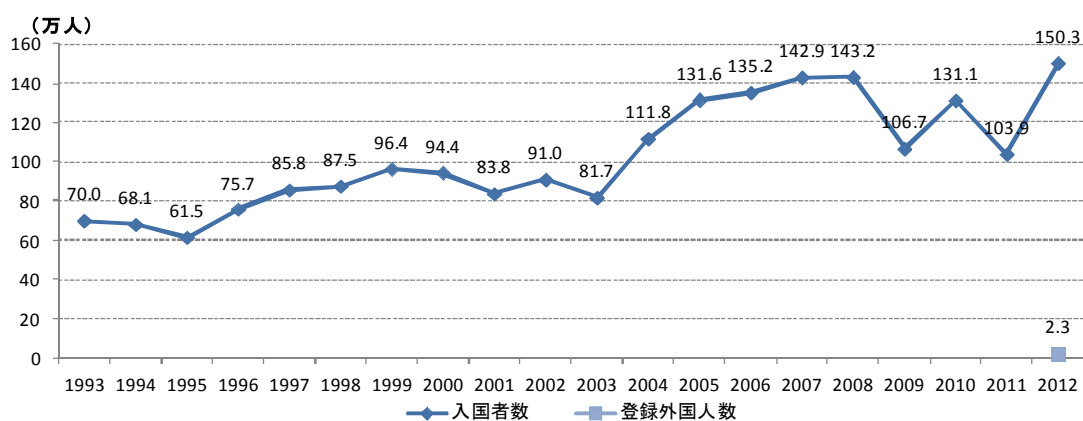
2. 日本における宗教事情

2-1. 在留外国人の概要

(1) 台湾から日本への渡航の傾向

在留台湾人には、国際結婚により来日した人や、留学生として来て就職する人などがあり、その来日の理由は様々である。関東又は関西の大都市圏に居住する傾向が見られるが、特別に集住している地域はない。なお、在留台湾人全体の1/3が東京に住んでいる。

図表 26 入国者数・在留外国人数の推移（台湾）



出典) 法務省『登録外国人統計』，同『出入国管理統計』の各年版
注) 2012年までは登録外国人数のデータなし。

図表 27 都道府県別在留外国人上位10都道府県（台湾，平成24年）

順位	都道府県名	在留外国人数	全国に占める割合
1	東京都	7,720人	33.9%
2	大阪府	2,460人	10.8%
3	神奈川県	2,221人	9.8%
4	千葉県	1,396人	6.1%
5	埼玉県	1,305人	5.7%
6	愛知県	966人	4.2%
7	京都府	749人	3.3%
8	兵庫県	748人	3.3%
9	茨城県	635人	2.8%
10	栃木県	596人	2.6%

出典) 法務省『登録外国人統計』平成24年版

(2) ネットワークとコミュニティ

在日台湾人は、宗教、血縁などのコミュニティ・ネットワークを活用して暮らしている。

日本の台湾の仏教徒について、佛光山は花見などの催事が多く、参加者も多い。その他、僧侶が無償で相談を受け付けており、母語で相談することができる。商売や人間関係の悩みなどが多く、日本人や台湾人の知人などにも話せないことを、僧侶に相談することもある。

キリスト教に関しては、教会を中心として信者間のコミュニティ・ネットワークが形成されている。教義の上においてもそのようなコミュニティは重要なものとされており、信者は教会が企画するボランティア活動等に積極的に参加することで互いの結びつきを深め、問題が起こった際には互いに助け合うことも多い。

道教に関しては、台湾や中国からの信者がコミュニティを形成している箇所が都市部に幾つか存在する。人間関係を頼って来日する場合が多く、住宅を借りる際にもそれらのつてを頼るため、当該地域の台湾人が増えることとなり、必要となった廟が設立される流れとなる。

図表 28 日本国内の仏教系宗教施設の内部（兵庫県）



提供) 五十嵐真子

2-2. 宗教生活(仏教)の概要

(1) 日常生活

精進料理の問題を除き、現在、台湾と日本の生活習慣は大体が似通っており、大きな支障となることはない。

1) 衣食住

出家者及び一部の在家信者は、精進料理を食するため、食事については苦勞をすることになる。例えば、みりんやかつお出汁などが入っているだけでも食べることが許されないため、外食がほとんどできないという問題などが起こる。

2) 礼拝

礼拝施設について、内装は台湾のそれと似ているが、規模は小さい。また、大阪佛光山のように住宅街に立地する場合、周辺地域への配慮から、外装を寺社らしくしていない。その他の台湾仏教系の施設では、ビルに入居する事例なども見られる。

3) 教化育成

寺院によっては、仏教講座のプログラムを中心としながら、中国語講座も提供されている事例がある。プログラムは出家者の得意分野によるところがあり、手芸や経営マネジメントについての講座があることもある。

家庭での教育は、台湾でも日本でも特別には行われていない。親が子供を宗教施設に連れて行くことが多いため、親が熱心な場合はその影響を受けることがあるが、宗教への帰属意識が希薄なため、人間関係や金銭などを原因とした宗教・宗派替えなども見られる。また、親子で宗教・宗派が異なることもよくある。

なお、佛光山は台湾出身者を主に対象としており、日本人には既存の仏教があるため、あえて日本人を出家させるような教育プログラムを組むことはない。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

定期的に実施される法会は、坐禪を組み中国語で読経や念仏を唱えるなど、台湾とおおむね同じ方法で行われている。法話を中国語と日本語半分ずつで行うこともある。また、経本も中国語が分からない人向けに日本語のルビを振ったものもある。

日常的に開催される法会以外にも、台湾と同様に清明節、盂蘭盆会が祝われる。浴仏節に当たる花祭りでは、法会だけではなくバザーなどが開かれ信者の交流の会になっている。このほか日本独自のものとして、年末に忘年会などを開催し、信者が踊りや歌唱などを披露し会食するが、飲酒は行わない。その他、別院や道場、信者の間での交流のための団体旅行がよく行われている。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

子供が生まれた際には、一族の祖廟に行き、祖先に報告のお参りをする。

2) 節目

成人等の節目に関して、特別な祭事は行われていない。

3) 結婚

国際結婚であれば、台湾・日本それぞれで、台湾式・日本式の結婚式を行うことが多い。台湾人は宗教施設を使用することなく、ホテルや専用のレストランで結婚式、披露宴を盛大に行う。

4) 葬儀

日本では、火葬で対応する信者がほとんどである。日本人同様、仏教徒は仏教の墓に入る。墓を作る資金がない場合、お金を払ってお寺に遺骨を預ける。

コラム 7 台湾仏教と社会貢献活動

◆出家を志す人の経緯は様々である

出家する際は、私有財産を全て処分し、何も持たずに出家する。名前も変える。生活費や衣服、生活用品などは支給される。また、生涯独身を貫く必要がある。信者のみならず、出家者についても女性が多く、男性が少ない。これは、出家者は妻帯ができないこととともに、台湾で課されている兵役も理由の一つとして考えられる。

若い頃に出家する人、一度社会に出て働いてから出家する人など、出家に至る経緯は様々である。

◆社会貢献活動と密接に結びついた仏教団体

仏教寺院は、出家者に限らず、多数の在家信者によるボランティアに支えられている。仏学院に通う人の中には、高度専門職に就いていた人も多く、その動機について、「ボランティアをやりたい」「社会のためになる仕事をしたかった」と言う人も多く見られる。日本で若者が NGO や NPO に興味を持つような感覚に近い。

台湾の仏教団体では、慈善事業に力を入れている団体も多く、震災などの際には組織的に寄附を集めて活動している。災害の多い台湾で、政府の支援を待つのではなく、自分たちで立て直すという意識が強く、社会的な活動を寺院が担ってきた経緯がある。

大阪の佛光山では、仮本堂を設立した時期に阪神大震災があり、その際、近隣の避難者の支援をしたことにより日本の地域社会とつながりができるきっかけとなった。また東日本大震災の際には、台湾から多額の義援金が贈られたことがニュースとなったが、これらの多くは台湾の仏教団体を介して集められたものである。

図表 29 仏教系の宗教施設（上：兵庫県，中：大阪府）及び仏像（下）



提供) 五十嵐真子 (上・下) , 三木英 (中)

2-3. 宗教生活(キリスト教)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

一部の敬虔なキリスト教徒（特にプロテスタント系）は、日本においても飲酒と喫煙の禁止や男女交際の制約などについて教義を遵守しているが、日本国内で生活する上において特に不便になることはない。その他の一般的な信者の日常生活も通常の日本人と大きく変わらない。

2) 礼拝

日本国内には少なくない数の台湾系の教会が設立されており、日本で生活する台湾人キリスト教徒は、自身の宗派の教会が近くにあればそこに通い礼拝するのが一般的である。日本国内にある台湾系の教会は、商業ビルの一角やマンションの一室に作られた簡素なものも多い。

また、台湾のキリスト教派の中には、日本のキリスト教派とつながりを持って活動しているところもある。例えば、台湾基督長老教会は、プロテスタント系の日本基督教団とのつながりが深く、牧師間の交流も盛んである。台湾基督長老教会の信者が、日本基督教団の教会での礼拝に参加することも多い。

3) 教化育成

日本国内においても、日曜学校（教会学校）を開いて子供向けに教化育成を行っている教会は存在する。しかし一般的には、信者数がそろわず日曜学校を開催できない場合が多い。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

日本国内においても、「復活祭（イースター）」「クリスマス」「聖霊降臨日（ペンテコステ）」等の際には、教会において通常の礼拝とは異なる特別な儀式が開催される。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

両親が信者の場合は、生まれて間もない子に対して洗礼式を受けさせる場合がある（幼児洗礼）。内容については台湾におけるものと同様である。

2) 節目

幼児洗礼を受けた子供がある程度成長し、信仰の内容について理解できるようになると、「初聖体」「堅信」という儀式を行う。儀式は台湾におけるものと同様である。

3) 結婚

台湾人同士の結婚では、台湾に帰って結婚式を挙げる場合も多いが、日本国内の教会でキリスト教式の結婚式を行う場合もある。

4) 葬儀

教会や葬儀会場において、キリスト教式の葬儀を行う。

図表 30 台湾のキリスト教教会（台南市）



提供) 藤野陽平

図表 31 台湾での洗足式



注) 洗足式とは、イエスが弟子の足を洗った^{ほんま}謙遜な姿に倣って足を洗い合う儀式。

提供) 藤野陽平

2-4. 宗教生活(道教)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

民間教派の信者は、素食（精進料理しか口にしない）を徹底しているが、日本では精進料理を食べられる飲食店が限られており、外食が困難となっている。その他の点に関しては、衣食住において大きな支障となることは少ない。

2) 礼拝

近年、横浜媽祖廟（2006年）や東京媽祖廟（2013年）ができたように、台湾の人々が多く集まるエリアには、廟信仰系の廟が建てられることがある。台湾の人々は信心深く、また子供の頃から廟に参拝することが習慣になっているため、廟の設立意欲は高い。日本においても礼拝の作法などは台湾と変わらない。新しく廟を作る場合は、既存の廟からの「のれん分け」形式で設立するのが一般的であり、例えば横浜媽祖廟は、台湾南部の媽祖廟からののれん分けによる。また、民間教派では、マンションの一室などに作った小規模な礼拝施設や、有力信者の自宅において「法会」と呼ばれる定例会を開催する機会が多い。術数に関しては、礼拝施設とは少し性格が異なるが、小規模なところでは占い師の営業店舗という形で拠点を作る場合が多く、そこに信者が集う。なかには大規模な施設や修行場を持つ団体も存在する。

3) 教化育成

廟信仰では、既に信仰を持った人々が日本に来て廟に集まるのが通常で、日本国内において教化育成は行われていない。民間教派の礼拝施設では、定期的に法会を開催しており、そこが教化育成の場として機能している。

図表 32 媽祖廟（左、神奈川県横浜市）と関帝廟（右、兵庫県神戸市）



提供) 本課職員

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

日本の廟信仰系の廟においても、台湾と同様に廟会を行っている。しかし、主神を神輿に乗せて練り歩く「出巡」において、台湾ではシャーマンによる荒々しい神がかりが重要な役割を持つのに対し、そのように危険な儀式を路上で行うことが困難で、また担い手もない日本では実施されていないという点が、本国と大きく異なる部分である。

② 冠婚葬祭

冠婚葬祭について、誕生や節目、結婚については道教との関係が薄く、日本国内では道教系の祭事は行われていない。

1) 誕生

誕生に関して、特別な祭事は行われていない。

2) 節目

成人等の節目に関して、特別な祭事は行われていない。

3) 結婚

誕生に関して、特別な祭事は行われていない。

4) 葬儀

台湾では道教式の葬儀が一般的に行われているが、日本でそれができる環境はなく、仏教式やその状況に応じた形で葬儀を行う場合が多い。

コラム 8 「民間教派」の成り立ち

◆民間教派と羅教・白蓮教

ここまで整理してきた「民間教派」は、一貫道や先天道など、多くの教派の総称である。これらの教派は、その教義等は多様であるものの、多くが「無生老母」（明明上帝ともいう）という女神を最高神としているという点で一致している。

「無生老母」は、もともとは中国の明の時代に創設された「羅教」という宗教に由来する神で、それ以前の道教の伝統には現れない。羅教は、民間信仰と禅宗（仏教）の影響を受け、「坐禅の修行によって世界の創造主である無生老母に会い、死後に救われる」という独特の教義を持っていた。また、民間教派は南宋時代の中国で生まれた「白蓮教」の影響も強く受けているが、こちらはマニ教と浄土教が習合して成立したものだと言われている。

このように、「民間教派」は、道教以外にも様々な要素が複雑に絡んで成立しており、これを道教に属するものとは捉えず、道教・儒教・仏教に次ぐ台湾内第4の宗教として捉える専門家も少なくない。

第3章 韓国

1. 現地における宗教事情

1-1. 宗教の概要

(1) 宗教人口

国際連合の統計においては、韓国の人口のうち、22.8%が仏教徒で、18.3%がプロテスタント教徒、そして10.9%がカトリック教徒で、残りの人々は様々な少数派の宗教、例えば儒教、円仏教や天道教、また甌山道（チュンサンド）や大巡真理会をはじめとする甌山系教団、道教などを信奉している。

なお、本章の基督教については、プロテスタントを中心に解説するが、必要に応じてカトリックについても記述する。

(2) 宗教団体に関する制度

韓国の憲法第20条においては、全ての国民は宗教の自由を有し、国教を認定せず、宗教と政治は分離されることが規定されている。

宗教団体の法人認定に関する一般的な法律は存在せず、民法第32条の「学術、宗教、慈善、技芸、社交その他営利でない事業を目的とする社団又は財団」として非営利法人の認定が適用され、非営利活動の内容に応じて主務官庁が管轄することになる。宗教活動の法人認定に関しては、文化体育観光部宗務室が主務官庁となる。

その法人の設立許可業務については、「文化体育観光部及び文化財庁所管非営利法人の設立及び監督に関する規則」が適用される。

宗教関係の法人に対する課税に関しては、法人税法などの各種法令において、宗教関連の活動に伴う免税措置が規定されている。

(3) 主要な宗教の概要

① 仏教(韓国)の概要

韓国の仏教信徒数は1,000万人を超え、全人口の22.8%を占める。教団数は詳細不明のものを含め168団体あり、多数の信徒を持つ宗派として曹溪宗、太古宗、天台宗などが挙げられる。

1) 教義

韓国仏教は、漢訳された経典に基づき、衆生救済を重んじる大乘仏教に属している。

信仰・儀礼体系としては、華嚴経と禅宗を軸としながら、儒教と中国仏教の影響を受けている。華嚴経は、時間・空間を超越した存在である毘盧遮那仏について説いた経典を基に念仏を唱えるものであり、禅宗は、坐禅によって人の持つ仏の性質を再発見するといった思想に基づくものである。

2) 儀式や行事

毎週行われる定期的な行事や説法よりも、信徒が僧侶に悩みの相談を持ちかけるため、個別に寺院を訪れるといった場合が多い。

一方、定例行事については、新年祈願、釈迦の出家や誕生日の祝祭など、年間を通じて様々な行事が行われている。

3) 教化育成

行事のたびに説法が行われ、仏教の教えを説いている。

また、継続的な修行を促す仕組みとして、修行を行った日数等に応じて修了印を押す手帳がある。

4) 礼拝施設

「法堂」（ポットン）と呼ばれるいわゆる本堂に当たる場所が、韓国仏教の寺院の中心である。法堂は説法を行う場所とされており、仏像、位牌、仏像画などが置かれている。

② キリスト教(韓国)の概要

国際連合の統計によると、韓国のキリスト教のうち、カトリック以外のキリスト教（主にプロテスタント）の信者は、およそ 860 万人である。1960 年代から信者数が増加し、教会も多いが、特に都市部で密度が高く、十字架が林立している。また、1 万人以上の信者数を有する巨大教会（メガ・チャーチ）が幾つも存在する。

1) 教義

韓国のキリスト教での所依の教典は聖書である。この点は欧米や日本など他国のキリスト教と共通している。しかしながら、一部のプロテスタント系と称する教会の中には、聖書の思想を逸脱した教義を持つ団体もあり、社会問題化している。

2) 儀式や行事

プロテスタント教会では、毎週日曜日の主日礼拝に加え、早天祈祷会、水曜祈祷会、金曜祈祷会等の礼拝が行われるのが伝統的スタイルである。大きな教会での日曜礼拝では、礼拝が複数回に分けて行われ、その後に食事をとる。

このほか教会の牧師や伝道師は、定期的又は必要に応じて「尋訪」（シンバン）と呼ばれる家庭訪問を行い、信者の生活相談などを行うこともある。

3) 教化育成

プロテスタント教会では、教化育成として、主日礼拝、早天祈祷会、水曜及び金曜日の祈祷会をはじめとする礼拝・祈祷や、聖書の勉強会を開催する。韓国のプロテスタント教会は、聖書を基礎から学び直す「弟子訓練」に重点を置いているのが特徴である。

4) 礼拝施設

韓国のキリスト教の教会は、礼拝を行う教会堂を中心とした施設である。韓国では比較的容易に教会を開設することができ、独立した教会堂を有する教会もあれば、商業ビルの部屋を賃借する形態の教会も存在する。

カトリックにはマリア像やキリストの像が設置されることが多いが、プロテスタントでは、礼拝堂正面の中央に十字架が架けられ、講話のための説教壇が設置されているだけの簡素な空間が一般的である。

③ 民族宗教等(韓国)の概要

韓国における民族宗教としては、甑山道、大巡真理会をはじめとした甑山系教団や、円仏教、天道教など様々な宗教が存在する。民族宗教の信徒数について見ると、『世界宗教百科事典』によれば、円仏教が民族宗教の中では最も多く、約13万人に上る。

本節では、多種多様な民族宗教の中から、特に活発な布教活動を行っている甑山系教団並びに円仏教について主に解説する。

1) 教義

様々な奇跡を行ったとされる姜一淳（カン・イルスン、号・甑山（チュンサン）、1871-1909）の教えに基づいて創始された新宗教が甑山系教団の始まりである。甑山の死後、その弟子たちによって、多くの分派した教団が設立されるが、こうした甑山の教えに端を発する教団を甑山系教団と総称する。これらの教団はそれぞれの教義を持つが、重要な教義として「解冤相生」による「後天開闢」思想を説いている点は共通している。「解冤相生」は恨みを持って亡くなった人間の魂を解放することであり、これにより「後天開闢」、つまり新たな世界が開かれるものとされている。

円仏教は朴重彬（パク・ジュンビン、号・少太山（ソテサン）1891～1943）が創始した新宗教である。教理の基本を仏法に置く一方で、「物質が開闢されたゆえに、今や精神を開闢しよう」を開教の標語として掲げており、「後天開闢」思想と習合している点の特徴である。宇宙の真理を「一元相」で象徴しており、修行によって真理と合一できるとするのが教理の核心である。

2) 儀式や行事

甑山系教団は、修養を重んじており、韓国各地の道場で修行が行われている。修行は、太乙呪（テウルジュ）と呼ばれる呪文を唱えるものである。

円仏教の信徒は、朝と夕方に心告と祈禱をささげる「朝夕申告」を毎日行う。また、定例法会として「日曜法会」があり、信徒は教堂に集まって祈りをささげる。日曜法会への参席は重要視されており、当日は修行にだけ専念することが求められる。

3) 教化育成

多くの甌山系教団は、姜甌山の言行を収集した甌山系教団最初の経典とされる『大巡典経』を基とした経典類をそれぞれ編集し、これにより信徒の教化育成を行っている。

円仏教は、中央総部が教団全体を統括し、教区と教堂を置いて教化に取り組んでいる。また、教団の設置した円光大学校などの大学が、教化育成の役割を担っている。

4) 礼拝施設

甌山系教団は、各地に開いた道場で修行を行っている。姜甌山を信仰の対象としているため、姜甌山の肖像画などを祀^{まつ}っている。本部道場は伝統的な韓国の建築様式が採用されているが、都市部の支部道場は一般的なビルを利用している場合が多い。

円仏教は、教区ごとに教堂を設置し、修行や教化育成を行っている。

1-2. 宗教生活(仏教)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

一般の信徒については、衣食住などで特に制限はない。ただし食事については、行事の行われる前後には肉食を控えることとされている。また、部屋にだるまを置くことが多い。

僧侶の衣服については僧服を着用することとされている。(僧服は上下ともにグレーの色合いのものが多く。)また、僧侶の妻帯可否は宗派によって異なる。曹溪宗では妻帯を禁じられているが、太古宗では許されている。

2) 礼拝

旧暦1日、15日に祈禱を主とする法会が行われる。また、都市部では職業人が参加しやすいよう、土日に定期の法会、講義が開催されている。

釈迦の誕生日を祝う花祭りなどの定例行事が行われる際は、儀礼後、信者が寺院に集まって会食することが多い。(ただし、寺院により異なる。)

説法は寺院の中心に置かれる法堂において行われる。法堂には、仏像、位牌、仏像画などが置かれている。

3) 教化育成

入初教育(参拝の仕方などの基礎知識)に始まり、信徒基本教育を受け、その後場合によっては主要な寺院に附設されている仏教の教育機関(1~2年課程、講義は週1~2回)へ進み、信徒教育が行われる。

また、定期的な行事の際に、僧侶から信者に対する説法が行われる。

その他に、修行の方法などを示した手引を作成している場合もある。例えば、禅宗であれば坐禅の方法を整理している。これに加え、修行に取り組んだあかしとして、手引に修了印を押印するといったことも行われている。修行内容の例としては、長期間にわたり毎日坐禅に取り組むといったものがある。

なお、僧侶となる者は幼少期より仏門に入り、寺院で修行することが多い。出家する者はまず寺院で起居し、1~2年雑用を行う「行者」を経て、剃髪、十戒を受けて「沙弥」となる。5年間の沙弥を終えると「具足戒」を受けて僧侶として認定される。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

一年を通じた主要な行事は、以下のとおりである。特に釈迦の誕生日に行われる花祭りなどが大きな行事である。

また、韓国仏教には日本仏教のような檀家制度がないため、花祭りにおける信徒の提灯購入費が寺院の大きな収入源となっている。

図表 33 仏教の主な宗教行事

時期	名称・概要
1月	新年祈願
1月15日	冬間禪房 100日坐禅修行の修了の日。
4月8日	釈迦の誕生日（花祭り） 花祭りが開催される。色・形の様々な提灯に火がともされ、寺院の境内などに飾られる。また、街で華やかなパレードが行われる。なお、この日は国家の祝日として制定されている。
10月15日	冬間禪房 結制日 100日坐禅修行の開始の日。
12月8日	釈迦成道日 釈迦が悟りを開いたとされている日。

注) いずれも旧暦。

② 冠婚葬祭

誕生、節目、結婚、葬儀の行事における儀礼の実践については、以下のとおりである。

なお、特に冠婚葬祭など生活に関わる儀礼については、韓国に儒教の思想が浸透していることもあり、仏教と儒教の儀礼とを厳密に分けて捉えるのは難しい状況である。

1) 誕生

生後 100 日後に儀礼が行われる。（ただし、これは儒教の影響によるところが大きい。）

2) 節目

節目として特別に行われる儀礼等はない。

3) 結婚

仏教徒であるからといって仏教式の結婚式を挙げるということは余りなく、一般的な結婚式を行う場合が多い。

4) 葬儀

韓国ではこれまで土葬が中心であったが、政府が火葬を奨励していることもあり、現在では火葬が主流になりつつある。ただし、地方ではまだ土葬が多い。また、韓国では病院内に簡易的な葬儀場があり、院内で葬儀が執り行われることもある。（特に

都市部ではその傾向が強い。)

韓国仏教で行われる死者の冥福めいふくを祈る儀礼としては、死後7日目ごとに49日まで行われる四十九齋などがある。

図表 34 市街地にある仏教寺院（釜山広域市）



提供) 本課職員

図表 35 山中にある仏教寺院（釜山広域市）



提供) 本課職員

1-3. 宗教生活(キリスト教)の概要

(1) 日常生活

韓国のキリスト教徒の日常生活には、特別に大きな禁忌や儀礼が義務付けられているわけではない。信者は、教会へ行き礼拝を行うほか、日常的に聖書を読んだり祈りを行ったりする。

1) 衣食住

宗教上、衣食住に関する禁忌や規則はほとんど存在しない。

食事に関しては、飲酒と喫煙は望ましくないものとされ、長老や執事などの役職者はこれらを守る傾向にある。一般信者の行動様式については、その信仰度合いにゆだねられているため、飲酒や喫煙を行う人もいる。

なお、プロテスタントの牧師は妻帯が認められるが、カトリックの司祭の妻帯は認められていない。

2) 礼拝

韓国のキリスト教徒は、毎週日曜日に教会へ行き、礼拝を行う。大きな教会の日曜礼拝では、礼拝が午前・午後に複数回に分けて行われ、礼拝後に食事をとる。

日曜日の礼拝以外では、ほぼ毎日早朝に行われる早天祈祷会のほか、水曜日の夕方や、金曜夜の祈祷会など、様々な礼拝が行われている。

礼拝時、定期的に、又は祭事の開かれる日に聖餐式せいあんしきを行うことがある。その時には、パンとぶどう酒が配られ、信者はそれを食す。パンはキリストの肉体、ぶどう酒はキリストの血を意味する。

このほか教会は、牧師や伝道師が信者の家庭を訪問する尋訪を行い、信者の祝い事や悩み事に応じたり、礼拝に出席できない信者の信仰生活のサポートを行ったりすることもある。春や秋に基本的に全信者の家を訪問するのは、大尋訪（テーシンバン）と呼ばれる。

3) 教化育成

親がキリスト教であれば、子供も親と一緒に教会へ通うようになり、自然にキリスト教を信仰するようになる。教会ではそのような子供向けのプログラムが提供されており、日曜学校では、幼時から中学生くらいまでを対象に聖書の講話が行われている。

布教に熱心な信者が多いこと、また、海外に対する宣教活動に積極的であることも韓国キリスト教の特徴である。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

一年を通じた主要な行事は、以下のとおりであり、最も盛大な祭事は、復活節であるイースターである。祝祭日は、キリスト教で用いられる教会暦に基づいている。この他、母の日等の一般社会の祝いに合わせて礼拝・祈念することもある。

図表 36 キリスト教の主な宗教行事

時期	名称・概要
3月下旬～4月下旬までのいずれかの日曜日	復活節（イースター） イエス・キリストのよみがえりを祝う礼拝である復活節（イースター）では、信者にゆで卵を配る教会もある。 復活節は毎年変わり、2014年は4月20日、2015年は4月5日が予定されている。
11月第4木曜日	収穫感謝節 プロテスタントのみの行事であり、プロテスタントの教会は感謝節に礼拝を行い、食事を行う。
12月25日及び直前の日曜日	聖誕節（クリスマス） クリスマス直近の日曜日に、聖誕節礼拝として礼拝を行う。 クリスマスは韓国では祝日に当たり、キリスト教徒は教会に行き、礼拝を行う。教会によっては教会学校の子供たちによる讚美歌や劇などを披露したり、食事会が行なわれるところもある。

② 冠婚葬祭

誕生、節目、結婚、葬儀の行事における儀礼の実践については、以下のとおりである。キリスト教徒における主要な儀礼は、洗礼である。

1) 誕生

キリスト教の信者が出産した場合、生まれて間もない時期に幼児洗礼を受けさせるのが一般的である。

2) 節目

節目として特別な行事はないが、キリスト教徒でない者が信者になる際には、洗礼を受けることになる。信者でなかった者が入信し洗礼を受けることもあれば、幼少期に幼児洗礼を受けた者が自らの意思でキリスト教徒として信仰告白を行う場合もある。後者の信仰告白は、入教式、信仰告白式と言われる。（日本では「堅信礼」とも言われる。）幼児洗礼を行っただけでは、信者としてまだ正式に認められた状態にあるわけではなく、入教式、信仰告白式を経て初めて信者として正式に認められることになる。

なお、韓国の「成人の日」は5月の第3月曜日とされているが、特別な行事はなく、その直前の礼拝で成人を迎える者の名前が呼ばれ、牧師によって祈りがささげられる。

3) 結婚

韓国のキリスト教徒が結婚する場合、教会で挙式するのが一般的である。教会で結婚式を行わない場合もあるが、日本のようにホテルのチャペルで挙式するのではなく、礼式場と呼ばれる結婚式場で行う場合が多い。

4) 葬儀

韓国ではこれまで土葬が中心であったが、政府が火葬を奨励していることもあり、現在では火葬が主流になりつつある。

韓国では、霊園内の納骨堂に骨壺こつぼを納める方式が一般的であり、キリスト教に限らず仏教徒なども同じ納骨堂に納められることが多い。なお、キリスト教徒の場合、骨壺に十字架が描かれており、一目で故人の生前の宗教が分かるようになっている。

図表 37 教会の外観（ソウル特別市）



提供) 中西尋子

図表 38 韓国の納骨堂 室内（左）、屋外（右）



提供) 中西尋子

1-4. 宗教生活(民族宗教等)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

甌山系教団の信徒は、日常生活では通常 of 衣服を着用しており、特に衣食住に関する制限等はない。飲酒や喫煙、妻帯についても禁止されていない。

円仏教の場合は、出家制度があり、出家した場合には様々な生活上の制限が課される。出家信徒は、仏教僧の衣服と類似した円仏教の衣服を着用する。また、出家信徒は肉食や妻帯が禁じられているが、出家していない一般の信徒については制限されていない。

2) 礼拝

甌山系教団は、「太乙呪」(テウルジュ)と呼ばれる呪文を唱える修行を行っている。これらの修行は韓国各地の道場を中心に行われているが、道場だけでなく自宅でも行われている。

円仏教には、仏教儀礼にのっとった様々な儀礼がある。また、円仏教は円光大学校を教育・研究機関として設立し、儀礼・儀式を確立している。

3) 教化育成

多くの甌山系教団は、姜甌山の言行を収集した甌山系教団最初の経典とされる『大巡典経』を基とした経典類をそれぞれ編集し、これにより信徒の教化育成を行っている。信徒が入信するきっかけは、親の影響や大学等における勧誘など、様々である。

円仏教は、創始者である少太山の基本教理を記した『正典』や少太山の一代言行録である『大宗経』を合わせた『円仏教教典』などを基本教典としている。教化育成に当たっては、中央総部が教団全体を統括し、教区と教堂を置いて取り組んでいる。また、円光大学校、円光デジタル大学校の他、円光高等学校をはじめとする九つの中高等学校を置いている。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

年間行事として、教団ごとに創始者や教団設立等に関する日を祭典の日として定めていることが多い。

図表 39 民族宗教等の主な宗教行事

時期	名称・概要
1月1日	新正節（円仏教）
3月6日	玉皇上帝化天日（甌山系教団）
4月8日（旧暦）	釈尊生誕節（円仏教） 釈迦が生まれたとされる日を祝う行事である。
4月28日	大覚開教節（円仏教） 少太山が円仏教の真理である一円相を悟った日であるとされる記念日である。
6月1日	六一大齋（円仏教） 少太山の涅槃忌日に、円仏教の歴代先祖の霊を追慕して行われる定例の合同献祭。告祝文が読まれた後、聖歌が歌われる。
6月24日	九天上帝化天日（甌山系教団）
8月21日	法認節（円仏教）
9月19日	九天上帝降世日（甌山系教団）
12月1日	名節大齋（円仏教） 六一大齋同様、円仏教の歴代先祖の霊を追慕して行われる定例の合同献祭である。告祝文が読まれた後、聖歌が歌われる。
12月4日	玉皇上帝降世日（甌山系教団）

② 冠婚葬祭

1) 誕生

甌山系教団には、洗礼などの特別な儀礼はない。

一方、円仏教には出生の儀礼がある。

2) 節目

甌山系教団には、洗礼や通過儀礼などの特別な儀礼はない。

一方、円仏教には成人の儀礼がある。

3) 結婚

韓国では、宗教によらず冠婚葬祭の基本的な形式が決まっており、結婚式にも一般的な流れがある。ただし、結婚の誓いなどは、各宗教により異なった方法で行われる。

4) 葬儀

葬儀についても基本的な形式が決まっているが、死者に対する祈りなど、儀式の中核となる部分については、民族宗教それぞれの方法で行われる。

2. 日本における宗教事情

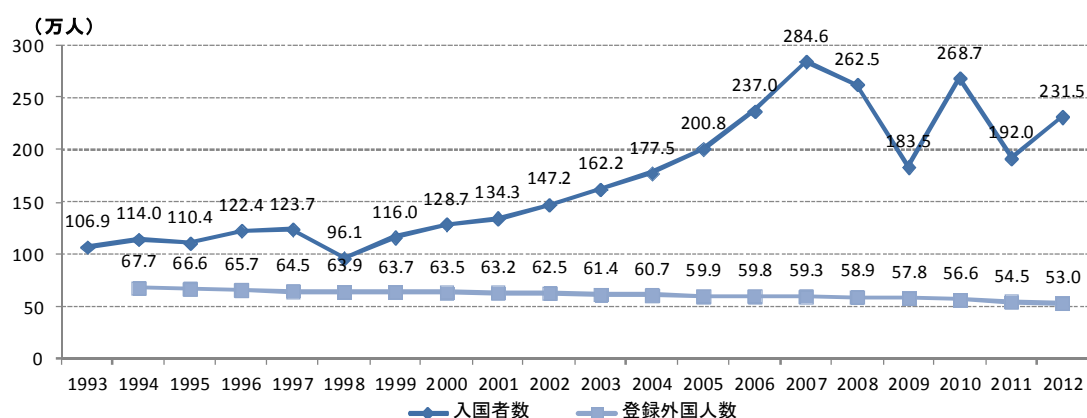
2-1. 在留外国人の概要

(1) 韓国から日本への渡航の傾向

1989年の韓国の海外渡航完全自由化により、韓国から日本への渡航者は増加傾向にあるが、リーマンショック後の2009年、及び東日本大震災の発生した2011年には、大幅な渡航者の落ち込みが見られた。渡航者の主な渡航目的は、留学・就労である。就労目的の場合、単純労働者として来日する者から企業の駐在員まで、職種は多様である。

法務省の登録外国人統計によると、在日韓国・朝鮮人の最も多く住む都道府県は、大阪府であり、東京都よりも約2万人多くなっている。

図表 40 入国者数・在留外国人数の推移（韓国）



出典) 法務省『登録外国人統計』, 同『出入国管理統計』の各年版
注) 入国者数は韓国のみ。登録外国人数は韓国・朝鮮。

図表 41 都道府県別在留外国人上位10都道府県（韓国・朝鮮，平成24年）

順位	都道府県名	在留外国人数	全国に占める割合
1	大阪府	120,889人	22.8%
2	東京都	100,684人	19.0%
3	兵庫県	49,167人	9.3%
4	愛知県	37,404人	7.1%
5	神奈川県	31,281人	5.9%
6	京都府	29,992人	5.7%
7	福岡県	18,010人	3.4%
8	埼玉県	17,805人	3.4%
9	千葉県	16,755人	3.2%
10	広島県	9,906人	1.9%

出典) 法務省『登録外国人統計』平成24年版

(2) ネットワークとコミュニティ

日本に住む韓国人は、歴史的な経緯により古くから居住するオールドカマーと、1980年代以降に来日したニューカマーに大きく分けられる。オールドカマーは戦前・戦中よりある程度特定の地域に集住しており、そこでコミュニティを形成していた。なお、ニューカマーもオールドカマーの暮らす地域に住居や職を求める傾向がある。

また、在日朝鮮人仏教徒の団体である在日本朝鮮仏教徒協会に属する寺院等においては、信徒が在日韓国・朝鮮人の高齢者を対象としたデイサービスを行うなど、地域に根ざしたコミュニティ活動に取り組む例も見られる。

日本の韓国人キリスト教徒は、本国でもキリスト教徒であった場合もあるが、一方で特にキリスト教を信仰していなかった人が、来日後にキリスト教徒になる事例も見られる。韓国系の教会のネットワークを通じて人間関係を構築する過程で信者になることが多い。

図表 42 在日韓国・朝鮮人の多く住む鶴橋駅周辺の街角（大阪府大阪市）



提供) 本課職員 (上), 橋本和子 (下)

2-2. 宗教生活(仏教)の概要

(1) 日常生活

日本の韓国人仏教徒の日常生活について、本国と大きく異なる点は見られない。ただし、日本に在住している信徒は比較的本国ほど戒律に厳格でない傾向がある。

なお、日本においては、韓国仏教は巫俗（シャーマニズム）などの民俗宗教と混交している場合がある。

1) 衣食住

本国と同様、一般の信徒については、衣食住などの制限は特にない。

僧侶の衣服については僧服を着用することとされている。

2) 礼拝

主に先祖の法要等が中心である。

また、韓国から来日した僧侶によって創設された曹溪宗などの韓国仏教系寺院において、日本仏教寺院に倣って盆の死者供養などを行う場合が見られる。

なお、日本に暮らす韓国人仏教徒は現世利益を求める傾向があり、僧侶から教義等の説法を聞くことよりも、個人的な相談事のために寺院を訪問することが多い。

3) 教化育成

定例行事の際などに説法等が行われるが、信徒に対する手引のようなものではなく、本国のような教化育成は行われていない。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

本国では定期的に宗教行事が行われているが、日本においては主に花祭り、七夕、盂蘭盆、冬至などの宗教行事に信徒が集まる。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

本国とほとんど同様である。

2) 節目

本国と同様、節目として特別に行われる儀礼等はない。

3) 結婚

本国とほとんど同様である。

4) 葬儀

本国と異なり、病院内で葬儀が行われることはない。また、ほとんどの場合、土葬

でなく火葬される。

一般的な葬儀としては、地域内の韓国・朝鮮系仏教寺院，あるいは日本固有の寺院を会場にして通夜・告別式が行われる。遺族は白い麻の喪服を着るなど，一部に韓国式が取り入れられることもあるが，僧侶による読経や参列者の焼香など，日本人の葬儀の形式と同様である場合が多い。

図表 43 日本の韓国・朝鮮系仏教寺院



兵庫県神戸市長田区の寺院（左上），大阪府大阪市生野区の寺院（右上），京都府宇治市の寺院における中元法要の様子（左下）

提供) 宮下良子

コラム 9 在日韓国・朝鮮系寺院（在日コリアン寺院）のネットワーク

◆在日韓国・朝鮮系寺院では複数の寺院から構成されるネットワークがある

日本に多数存在する在日韓国・朝鮮系の仏教寺院，及び巫俗などの民俗宗教系寺院を含めて「在日コリアン寺院」と称するが，これらは複数の寺院から成る寺院間のネットワークを形成している。

主な仏教寺院ネットワークとして，在日本朝鮮仏教徒協会（朝仏協），在日本韓民族仏教徒総連合会（韓仏連），海東会が挙げられる。朝仏協は在日本朝鮮人総連合会（朝鮮総連）の傘下団体である。海東会は，朝仏協，韓仏連の両者を結ぶネットワークであり，朝仏協，韓仏連は布教活動を主な目的としているが，海東会は寺院間の親睦に重きを置いている。

なお，これらのネットワークに属さない仏教及び民俗寺院もある。

2-3. 宗教生活(キリスト教)の概要

(1) 日常生活

日本の韓国系キリスト教徒の日常生活について、本国と大きく異なる点は見られない。

なお、日本における韓国系キリスト教会(プロテスタント)の潮流として、日韓併合(1910年)以降の戦前・戦後に設立された教会と、1989年の韓国での海外渡航完全自由化以降に設立された教会がある。(本節では、特別の場合を除いて主に後者を扱うこととする。)

1) 衣食住

本国と同様、宗教上、一般の信者に対する衣食住に関する禁忌や規則はそれほど存在しないが、飲酒喫煙は望ましくないものとされ、原則として禁じられている。

2) 礼拝

韓国のキリスト教会の特徴としては、聖書勉強と祈りに積極的であることが挙げられる。日本の韓国系キリスト教会も、本国同様に日曜礼拝や早天祈祷会、水曜や金曜の祈祷会を行っている。礼拝時、本国同様に聖餐式を行うこともある。

信者の多くが韓国人という教会や、日本人の信者が一定数いる教会もある。また、オールドカマーの多い教会、ニューカマーの多い教会など信者の構成は多様である。

なお、日本の教会は比較的年配者が多く、静かで厳かな中で礼拝が行われるのに対し、韓国系キリスト教会は比較的若者も多く見られ、力強く活気のある礼拝が行われる点が、日本と異なる部分である。このような点が、韓国系教会を開放的な雰囲気とし、信者でない者も足を踏み入れやすい場所となる要因になっていると思われる。

3) 教化育成

教化育成の取組については、教会の方針及び教会の立地する環境により大きく異なる。ニューカマーの多い地域に立地する教会は、ニューカマーの韓国系信者に対するサポートに主眼が置かれている。一方で、ニューカマーが少ない地域に立地する教会の場合では、日本人信者の獲得を目指すところもある。

日本人の中にも、国内外での韓国系キリスト教徒との交流をきっかけに、洗礼を受けて韓国系キリスト教会の信者となる事例が見られる。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

韓国人のキリスト教徒が祝う宗教行事について、本国と大きな違いはなく、母の日礼拝、復活節(イースター)、収穫感謝節(11月)及び聖誕節(クリスマス及びクリスマス直前の日曜日)には礼拝が行われる。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

韓国人のキリスト教徒は、子供が生まれた際、宗教行事に合わせて教会で幼児洗礼を受けさせる。この儀礼は本国と大きく変わらない。

2) 節目

本国と同様、節目として特別な行事はないが、キリスト教でない者が信者になる際には、洗礼を受けることになる。信者でなかった者が入信し洗礼を受ける事例もあれば、幼少期に幼児洗礼を受けた者が、自らの意思でキリスト教徒として信仰告白を行うこともある。後者の場合の信仰告白を「堅信礼」と言う。（韓国では、入教式、信仰告白式と言われる。）なお、成人式に関する特別な行事はないが、成人の日を目前に控えた信者に対して、礼拝時に祈りを行う教会もある。

3) 結婚

韓国人のキリスト教徒が日本で結婚する場合、特別に挙式に関する規定はない。信者といえども、必ずしも教会で挙式するわけではなく、信仰度合いなどにより異なる。

4) 葬儀

オールドカマーの在日韓国人は、所属する教会で葬儀を行い、日本で埋葬される場合が多いが、一時滞在のニューカマーは本国で埋葬されることが想定される。教会の中には、オールドカマーなど日本での埋葬を望む在日韓国人に対して、独自に納骨堂を有する教会も一部には存在する。こうした納骨堂に納骨する信者もいるが、家の墓を作ったことで、納骨堂から墓に骨を移設する人もいる。

日本の仏教のように年忌法要は行わないが、年に1度、命日を控えた日に、家族や親族のほか、牧師や生前親しくしていた信者が故人の家庭に集まり、家庭礼拝（追悼礼拝）を行う。

図表 44 大久保駅周辺の街角（東京都新宿区）



提供) 本課職員

図表 45 日本における韓国系教会（上：東京都，下：兵庫県）



提供) 中西尋子

コラム 10 日本と異なる韓国基督教の信仰と祈り

◆韓国人のキリスト教徒は、声を出して祈ることが多い

日本人は、キリスト教といえば、厳かな環境で静かに黙想し祈る雰囲気イメージすることが多い。しかし、韓国の教会は若い人が多く活気があり、印象は異なる。礼拝についても、「祈りの教会」と呼ばれることがあるほど祈りが中心である。皆が声を出しながら祈りを唱える形態は、「通声祈祷」と呼ばれ、韓国系教会ならではのユニークな祈りである。韓国の教会の中でも、特にペンテコステ派などは激しい祈りを行うことが多い。ただし、日本の韓国系教会では、牧師によって通声祈祷を行う教会もあれば行わない教会もある。

◆信者であり、同時に宣教師でもある韓国のキリスト教徒

キリスト教が広く浸透している韓国では、信者の一人一人が布教者である。このため、韓国では路上や駅などで布教や宣教活動を行う人を見かけることもある。

2-4. 宗教生活(民族宗教等)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

甌山系教団の場合は衣食住の制限がほとんどないため、日本においても大きな問題は生じない。一方、円仏教の場合、出家信徒には、肉食の禁止や円仏教で定められた衣服の着用など幾つかの制限があり、これらは日本でも同様に遵守される必要がある。

2) 礼拝

甌山系教団は、呪文を唱える修行を自宅等でも行うため、その信者は近隣住民に配慮している可能性がある。

3) 教化育成

甌山系教団は布教に積極的であり、経典を日本語に翻訳し、布教活動に取り組む教団もある。また、甌山系教団の一つである甌山道は、東京都、大阪市、神戸市、西宮市に道場を開いている。

円仏教もまた海外布教に積極的に取り組んでおり、日本にも教区が設けられている。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

本国と同様に行われるものと考えられるが、韓国の民族宗教の道場は少なく、詳細は不明である。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

本国と同様に、甌山系教団には洗礼などの特別な儀礼はなく、円仏教には出生の儀礼があると考えられるが、日本には円仏教の道場が少ないため、儀礼を行うことには困難が伴うものと考えられる。

2) 節目

本国と同様に、甌山系教団には節目における特別な儀礼はなく、円仏教には成人の儀礼があると考えられるが、日本には円仏教の道場が少ないため、儀礼を行うことには困難が伴うものと考えられる。

3) 結婚

韓国では結婚の誓いなどが民族宗教によって異なるが、日本では民族宗教の道場などが少ないため、本国と全く同様に民族宗教の形式で儀式を執り行うことには、困難が伴うものと考えられる。

4) 葬儀

韓国では、死者に対する祈りなど、儀式の中核となるものが民族宗教によって異なるが、日本では民族宗教の道場などが少ないため、本国と全く同様に民族宗教の形式で儀式を執り行うことには、困難が伴うものと考えられる。なお、円仏教においては、四祝二斎などの儀礼は日本教区でも同様に行われている。

コラム 11 韓国民族宗教の系譜

◆東学から甌山系教団への流れ

韓国民族宗教の始まりは、1860年に崔濟愚（チェ・ジェウ）によって創唱された東学であるとされている。東学の教えの特徴として、全ての人間に「天（主）」が内在しているとする「侍天主」という平等思想が挙げられる。また、東学は「後天開闢」の思想を説いており、これは後の甌山系教団も影響を受けている。その後、東学は天道教として受け継がれ、活動している。

甌山系教団は、東学の流れをくみながらも、儒教、仏教、道教などの思想を習合させた独自の教理を説くものである。主な甌山系教団として、大巡真理会、甌山道があり、活発な布教活動を行っている。

第4章 ブラジル

1. 現地における宗教事情

1-1. 宗教の概要

(1) 宗教人口

ブラジルの宗教人口を見ると、64.6%がカトリック、22.2%がプロテスタント、2%が心霊主義、3.2%がその他宗教、8%が無宗教となっている（ブラジル地理統計院、2010年）。

上記のとおり、ブラジルで最も宗教人口が多い宗教はカトリックであるが、冒頭「はじめに」のiii ページで述べたとおり、カトリックについては、今後日本において新たに宗教法人設立が申請されることは想定されにくく、したがって宗教法人の新規設立に際しての参考に資するため、本章では主にプロテスタント（特にプロテスタント人口の7割を占めるペンテコステ派）について解説する。

(2) 宗教団体に関する制度

ブラジルには、日本のような宗教法人制度は存在しない。教会、修道会等は、社会福祉法人に属する。各団体の規定により収益事業の有無が問われ、目的が収益事業でない場合は、市、州、国のレベルで調査を経て、免税されることになっている。

2012年以降は、新たに社会福祉法人の資格を保持するために、毎年、自治体の社会福祉委員会の検査を受けなければならなくなった。これまでは福祉・教育・健康と包括されていたが、教育委員会、健康委員会など個別に、事業の目的に従って登録することが必要となっており、厳格化している。これは不正に課税を免れることを防ぐためである。法人登録後も、創設目的にかなった活動でないとみなされれば、法人の取消し、あるいは一定活動の停止となることもある。

近年、信仰の自由が重要視されるようになり、今まで公の場にあった宗教的シンボル（十字架、聖像等）が取り除かれるようになっている。また、学校での宗教の授業は従来カトリックの教義に基づくものが主であったが、カトリックに限定しない世界宗教や哲学などの科目へと変更されるなど、公的教育の世俗化が進んでいる。

(3) 主要な宗教(キリスト教)の概要

1) 教義

カトリック、プロテスタントに共通して、キリスト教の根底には「三位一体」（神と子と聖霊は、一つの神が三つの姿となって現れたものである）という考え方が存在する。

なお、伝統的なプロテスタントが死後の世界を重視する一方、ブラジルをはじめとしたラテンアメリカ諸国で盛んなプロテスタントのペンテコステ派は、特に聖霊の働きを重視する特徴があり、聖霊信仰による病気の治癒、貧困からの回復など、現世利益に重きを置いている。（ただし、死後の世界が軽んじられているわけではない。）ペンテコステ派は他のプロテスタント教会同様、聖書を明文化された教義本として理解する。

2) 儀式や行事

一般的に、カトリックのミサは週 1 回程度、プロテスタントの集会（プロテスタントでは、ミサでなく集会と言う）は週 2～3 回程度行われるところもある。

カトリックの伝統によって定められた祝日が、国の祝日として設定されているものもある。

ペンテコステ派に属する教会では、特別に定められている宗教行事はないが、年に数回、定例の集会よりも大規模な集会が行われる。この大集会に関しては、特に音楽を重視し、ショーのような形のものも多く見られる。信者間の^{きずな}絆を強める活動が多い。

3) 教化育成

司祭が主導してミサなどを行うカトリックと異なり、プロテスタントでは、個々の教会による差はあるものの、^{ほいけん}敬虔な信者が中心となって集会が開かれる傾向があり、この集会が信者の教化育成の役割を担っている。信者は聖書をよく読むが、原理主義的に解釈することが多い。

4) 礼拝施設

カトリック、プロテスタントともに礼拝施設としての教会（聖堂、礼拝堂）がある。

1-2. 宗教生活(キリスト教)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

宗教上の定めとして、プロテスタントでは、飲酒と喫煙をしてはならないとされているが、信者の信仰の度合いにより、その遵守の程度は様々である。

なお、プロテスタントの牧師は妻帯が認められるが、カトリックの司祭の妻帯は認められていない。

2) 礼拝

プロテスタントの集会は、教会だけでなく信者の自宅などでも行われている。集会を開催する曜日などは教義によって定められておらず、信者の都合によって開催される。なお、ペンテコステ派の集会でバンドの演奏に合わせて大声で合唱する点、感情をあらわにして祈る点などは、一般的なプロテスタントと異なる部分である。

3) 教化育成

日曜学校を開催するプロテスタント教会があり、教会活動の中で自然に宗教意識が醸成される。日曜学校では、子供用の平易な聖書の読み聞かせや合唱などが行われているが、教会の規模や人数によってその内容は異なる。

なお、政教分離により、学校教育における改宗を促す宗教教育は否定されているが、知識教育として宗教の科目が設けられている。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

憲法に定められた祝日のうち、「カーニバル」「聖金曜日」「キリスト聖体祭」「聖母アパレシーダの日」「死者の日(プロテスタントでは万霊節)」「クリスマス」などはいずれもカトリックの伝統に従って定められたものである。

また、ブラジルでは、憲法に定められた祝日以外にも、州・市レベルで定められた祝日があり、その中にもキリスト教に関連した祝日が存在する。

ペンテコステ派として定められている宗教行事はないが、年に数回「青年の集会」「家族の集会」「夫婦の集会」といった大規模集会を合宿形式で行う教会が多い。(集会の内容としては通常の集会と特に変わらない。)

図表 46 キリスト教（ブラジル）の主な宗教行事

時期	名称・概要
3月から4月（復活祭の前の金曜日）	聖金曜日 復活祭の前の金曜日に、キリストの受難の典礼として、イエス・キリストの受難を偲んで聖劇、十字架の道行が行われる。
5月から6月（カーニバル後11週目の木曜日）	聖体と御血の祝日 カトリック教会で聖体（キリスト）を讀（よ）める日とされ、町によっては道路を花の絨毯（じゅうたん）で飾り、聖体を掲げて行進するところがある。
10月12日	聖母アパレシーダの日 ブラジルでは、1930年代にアパレシーダの聖母を国家の守護聖人として定めており、この日を祝日としている。
11月2日	死者の日（万霊節） 教会でも墓地でもミサが行われ、祈りをささげることが通例となっている。なお、カトリックでは死者の日、プロテスタントでは万霊節という。
12月25日	クリスマス カトリック教会では、通常24日の夜から夜中にかけてミサが行われ、家族で出席することが多い。クリスマスに先立つ9日間を準備の期間とし、イエス誕生のための祈りをするのが通例である。プロテスタント教会でも集会を行うところがある。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

教会において誕生会などを開催することがある。

2) 節目

成人の儀式などもなく、節目の行事は特にない。

ペンテコステ派の教会では、信者が「聖霊のバプテスマ」を体験することが望まれている。聖霊に満たされることをバプテスマ（洗礼）と言い、祈りによってその体験を得た信者は、異言を語り出すようになり、それまで見えなかったものが見え、予知能力などのカリスマ（神から与えられる賜物）を得るとされている。多くの信者が聖霊のバプテスマを授かるわけではないが、牧師にはその経験が求められることも多い。

3) 結婚

教会において結婚式を行うのが通例であったが、近年は教会で結婚式を挙げない人もおり、レストランや自宅での挙式も増えている。また正式に結婚せず同居する人も増えている。

4) 葬儀

葬儀が行われ、土葬により埋葬される。

プロテスタントの教会が、墓地や埋葬について干渉することはない。カトリックでは、亡くなった日と初七日が大切にされ、故人の関係者が集まってミサをささげ、最後に故人の写真とメッセージの入ったカードを参加者に配るのが通例である。

図表 47 ルター派プロテスタント教会



提供) 山田政信

2. 日本における宗教事情

2-1. 在留外国人の概要

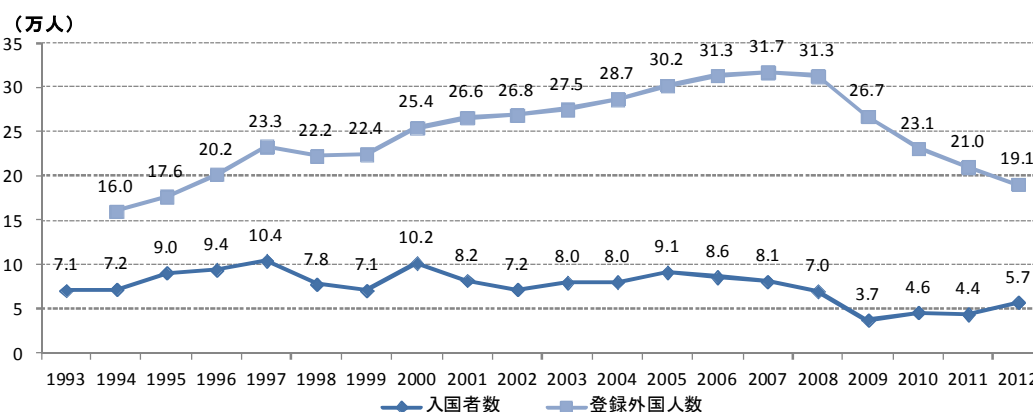
(1) ブラジルから日本への渡航の傾向

日本に住むブラジル人は減少傾向にある。2007年では約32万人が滞日していたが、2008年のリーマンショックや2011年の東日本大震災の影響により、2012年では19万人にまで減っている。今後も、現状維持、あるいは更なる減少が見込まれる。

来日するブラジル人の多くを占める日系2世、3世等のブラジル人は、就労制限のない「定住者」の在留資格により滞在しており、出稼ぎ目的で来日し、派遣労働者として工場などに勤めている者が多い。ただし、リーマンショック以降は解雇された者も多く、雇用期間が短期化するなど就労状況などに変化が見られる。

今は短期契約（1年）で10時間労働という場合が多い。以前には住宅の提供があったが、今では個人で探さなければならないことも多く、また病気になった時の保障もない場合が多い。

図表 48 入国者数・在留外国人数の推移（ブラジル）



出典) 法務省『登録外国人統計』，同『出入国管理統計』の各年版

図表 49 都道府県別在留外国人上位10都道府県（ブラジル，平成24年）

順位	都道府県名	在留外国人数	全国に占める割合
1	愛知県	50,529人	26.5%
2	静岡県	29,668人	15.6%
3	三重県	13,324人	7.0%
4	群馬県	12,194人	6.4%
5	岐阜県	11,530人	6.0%
6	神奈川県	9,144人	4.8%
7	埼玉県	8,212人	4.3%
8	滋賀県	8,165人	4.3%
9	茨城県	6,778人	3.6%
10	長野県	6,294人	3.3%

出典) 法務省『登録外国人統計』平成24年版

(2) ネットワークとコミュニティ

出稼ぎ労働者の多い日系ブラジル人の中には孤独を感じている者も多く、ブラジル人とのつながりを求めて宗教のコミュニティに参加し、熱心に宗教活動をするようになる事例が多く見られる。

また、日本のカトリック教会ではポルトガル語でミサを行う司祭がいる場合もあるが、そうでない場合には意思疎通ができずに孤立してしまうブラジル人信者がいる。カトリック信者の中には自分で集会を開く者がいるが、日系ブラジル人が開いたプロテスタント教会に通うようになる者もいる。そのため、本国では信仰が薄かったにもかかわらず、来日後にプロテスタントに改宗する者も多い。在日ブラジル人のプロテスタント信者の半数はカトリックからの改宗である。

また、教会の日曜学校がブラジル人の子供にとってポルトガル語教育の場となり、母語学習の支援を担っている場合もある。

教会がコミュニティに対して生活支援や福祉サービスに取り組んでいることも多い。また、信者ではない日本人のホームレス支援に取り組んでいる教会もある。

図表 50 日本におけるブラジル人のプロテスタント



日系ブラジル人が開いたプロテスタント教会
(左上, 左下)
日本におけるブラジル人プロテスタント信者の
野外活動の様子 (右上)

提供) 山田政信 (左上, 右上)
三木英 (下)

2-2. 宗教生活(キリスト教)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

宗教上の事由により日本での生活に支障を来すことは余りない。

2) 礼拝

活動当初は信者の自宅で集会を開くところから始まることが多い。

日本においても集会の多くはポルトガル語で行われているが、日本で生まれ育った日系ブラジル人 3 世等はポルトガル語で聖書を読めないことも多く、日本語で集会が行われている事例もある。日本語での集会には、日本人信者の姿も見られる。

3) 教化育成

ブラジル本国と同様、熱心な信者によって草の根的に教会が作られる場合が多い。

しかし、日本におけるペンテコステ派教会の多くは、日本人に対する宣教を目的としたものではなく、日系ブラジル人の手により日系ブラジル人のために設立されたものである。

日本に暮らすブラジル人には小さな子供を持つ者も多く、ほとんどの子供は親と一緒に日曜集会に行っており、自然とキリスト教に触れることになる。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

ブラジル本国と同様、ペンテコステ派として定められた宗教行事はない。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

ブラジル本国と同様、誕生会などを開催する。

2) 節目

ブラジル本国と同様、成人式などが開かれることはない。

3) 結婚

ブラジル本国と同様、教会において結婚式が行われている。

4) 葬儀

葬儀は、カトリック、プロテスタントのそれぞれが行っているが、ポルトガル語話者のブラジル人の場合、宗派が異なってもポルトガル語で執り行える葬儀を優先することが多い。例えば、カトリック信者が亡くなった場合も、ポルトガル語の通じるプロテスタント教会で葬儀を執り行うことがある。

ブラジルでは土葬が通常であるが、日本で信者が亡くなった場合は、火葬した上で遺骨が家族に渡され、ブラジルに埋葬されるため、日本で埋葬される事例は少ない。よって、日本でブラジル人のための霊園や墓地が開設される動きはない。

プロテスタント教会が墓地や埋葬について干渉することはない。

コラム 12 キリスト教の近年の潮流と関連するその他の宗教

◆ネオペンテコステ派の台頭

ペンテコステ派の教団の一派に、急成長を遂げている神の王国ユニバーサル教会 (Igreja Universal do Reino de Deus) がある。同教団には、カトリックやアフロ・ブラジリアン宗教の否定、教会に寄附をすれば富が増えるといった「繁栄の神学」の思想、悪魔祓いの儀式など、従来のペンテコステ派とは異なる特徴が見られ、ネオペンテコスタリズムと呼ばれている。

また、神の王国ユニバーサル教会は、本部からの宣教活動が積極的で、日本に教会を置いて布教を進めているといった点も、従来のペンテコステ派教団とは異なっている。

◆在日ブラジル人の間でも信仰されている民間信仰・心霊主義

ブラジルでは、カンドンブレと呼ばれるアフリカ系の民間信仰や心霊主義を信仰する人々も相当数存在する。また、カトリックとカンドンブレを同時に信仰する人も多い。さらに、カンドンブレから派生し、キリスト教と心霊主義の教義が習合したウンバンダという宗教があり、こちらを信仰する人も多い。日本においても、小規模ながらこうした民間信仰・心霊主義の団体が存在している。

図表 51 日本における神の王国ユニバーサル教会 (左) ,

図表 52 在日ブラジル人による聖母アパレシーダの日の祭事 (右)



提供) 山田政信 (左) , 石川治子 (右)

第5章 ペルー

1. 現地における宗教事情

1-1. 宗教の概要

(1) 宗教人口

ペルーの宗教人口を見ると、81.3%がカトリック、12.5%がプロテスタント（福音派）、3.3%がその他宗教、2.9%が無宗教である（ペルー統計情報庁、2007年）。

ペルーはスペインの植民地政策の中心地であったこともあり、カトリックへの徹底的な改宗が行われたため、カトリックが主流であり、プロテスタントは少数派である。しかしカトリックであっても、山岳部などではペルー土着のアンデス宗教と習合している様子が見られる。

(2) 宗教団体に関する制度

ペルーでは、2010年12月、憲法で定められた全ての人々への宗教の自由を保障するものとして、宗教団体登録制度等を定めた宗教自由法が制定され、カトリック以外の宗教についても、宗教団体として認定されれば、カトリック教会と同様に扱われるようになった。

従来は、カトリック教会のみが税制、土地購入など様々な面で優遇を受けていたが、同法の施行に伴い、他の宗教団体についても同様の優遇制度が適用されている。

宗教団体の登録認証等については、法務人権省が所管している。

(3) 主要な宗教(キリスト教)の概要

1) 教義

ペルーにおけるカトリックの教義は、一般的なカトリックの教義と大きく異なるものではないが、一部の地域ではインカ帝国時代からの土着宗教と習合している。

アンデスの民俗宗教は、日本における山岳信仰のように、土地に結びついた信仰であり、崇拝の対象となる自然物が見える地域において信仰されている。

2) 儀式や行事

カトリックでは、地域や職業それぞれに守護聖人が定められている。ペルーにおいても、ペルー国独自、あるいは地域ごとに守護聖人が存在する。

聖人の祝日には盛大に祭りが行われ、人々は守護聖人の聖人像を担いで練り歩く。重要な祝日には数万人規模のプロセッション（行列）が行われている。

3) 教化育成

カトリックにおいては、ミサや教会学校、教会の使徒活動を通して育成される。プロテスタントでは集会が開かれている。

学校教育において宗教の時間があり，聖書を読むことになっている。

4) 礼拝施設

カトリック，プロテスタントともに礼拝施設として教会がある。プロテスタントは信者が自由に新たな教会を設置することができるが，カトリックは教区が定められているため，自由に設立することはできない。

図表 53 ペルーのキリスト教会（カトリック）



提供) 細谷広美

1-2. 宗教生活(キリスト教)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

ペルーのプロテスタントでは、飲酒や喫煙、コカの葉をかむことが教義において明確に禁じられている。一方、カトリックでは、飲酒や喫煙は禁じられていない。また、プロテスタントの牧師は妻帯が認められるが、カトリックの司祭の妻帯は認められていない。

2) 礼拝

信者は、教会において行われるミサや集会に参加し、礼拝を行っている。

3) 教化育成

教会のミサや集会には、熱心に通う人とそうでない人がある。

学校教育で宗教の時間もあるが、家庭においても聖書は読まれている。ミサや葬儀、結婚式など、様々な場面で聖書が読まれ、讃美歌が歌われている。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

国や市町村、職業等によって定められた守護聖人の祝日には大きな祭りが行われ、人々は守護聖人の聖人像を担いで練り歩く。重要な祝日には数万人規模のプロセッション(行列)が行われている。

ペルーには、国の守護聖人であり、国家警察の守護聖人でもあるサンタ・ロサ・デ・リマ(リマの聖ローサ)や、ペルーからの移住者の守護聖人であるセニョール・デ・ロス・ミラグロス(奇跡の主)といった、ペルー独自の守護聖人がいる。また、それぞれの町、村ごとの守護聖人もおり、各地における聖人の日には、住民による盛大な祭りが行われている。

図表 54 キリスト教（ペルー）の主な宗教行事

西暦	名称・概要
3 月下旬から 4 月 （復活祭（パスクワ） 前の 1 週間）	<p>セマナ・サンタ</p> <p>キリストの復活祭（イースター。ペルーでは「パスクワ」と呼ばれる。）は、3 月 21 日以降の最初の満月の次の日曜日と定められているので毎年変動する。セマナ・サンタ（聖週間）は復活祭前の 1 週間で、キリストの受難にちなんだ行事が執り行われる。</p>
8 月 30 日	<p>サンタ・ロサ・デ・リマの日</p> <p>ペルー生まれの聖人であり、ペルー国家警察の守護聖人でもあるサンタ・ロサの祝日。盛大な祭りが開かれ、聖人像は信者たちによって衣装を何度も替えられながら、人々に担がれ、街の中を練り歩く。</p>
10 月 3～4 週	<p>セニョール・デ・ロス・ミラグロス</p> <p>1655 年にリマを襲った大地震の中で、キリスト像が奇跡的に残ったことが信仰の始まりとなった。サンタ・ロサの日と同様、盛大な祭りが開かれ、キリスト像を担いだ行列ができる。</p>
12 月 25 日	<p>クリスマス</p> <p>イエス・キリストの降誕（誕生）を祝う行事。最も重要な祝日とされ、家族が集まって過ごすのが一般的である。</p>

② 冠婚葬祭

1) 誕生

親がカトリック信者の場合は特に、子供にもカトリックのバプテスマ（洗礼）を受けさせることが多く、乳児や児童は親の信仰により幼児洗礼を授けられる場合が多い。

2) 節目

キリスト教の入信に際しては、必ず洗礼を受ける必要がある。なお、親の信仰により幼児洗礼を受けている場合も、自身で信仰を言い表すことのできる年齢に達した後、本人に信仰を確認する信仰告白の儀式が行われる。

また、カトリックでは、儀式においてパドリーノ（女性はマドリーナ）を頼むことで、コンパドラスゴと呼ばれる擬制的な親族関係を結ぶ。パドリーノは儀式で必要とされる品々、衣装、招待客等の飲食を負担し、洗礼式では子供の名付け親となる。子供の両親と名付け親は子供を介してコンパドレ（女性はコマドレ）と呼び合う。

3) 結婚

結婚には宗教婚と市民婚の二つがあり、以前は必ずペルー国内で両方を行う必要があったが、現在では市民婚のみを行う人々が増えている。

宗教婚では教会において挙式が行われる。なお、カトリックでは宗教上、離婚を認めていない場合が多く、宗教婚を挙げた場合は離婚することが難しくなる。

市民婚は市役所に登録することを示す。従来は、宗教婚と市民婚の両方を行っていたが、最近では市民婚のみの場合が増えている。その場合も結婚披露宴を開催する。

4) 葬儀

死者は一般的に教会の墓地や共同墓地に埋葬されるが、教会内の納骨堂に納められる場合もあり、地域によって異なる。

葬儀当日だけではなく、死後何日、何年といった節目にも故人を追悼する儀式を行う。そのような儀式には、家族だけでなく親族や友人も参列する。

図表 55 カトリックのミサ (ペルー)



提供) 細谷広美

2. 日本における宗教事情

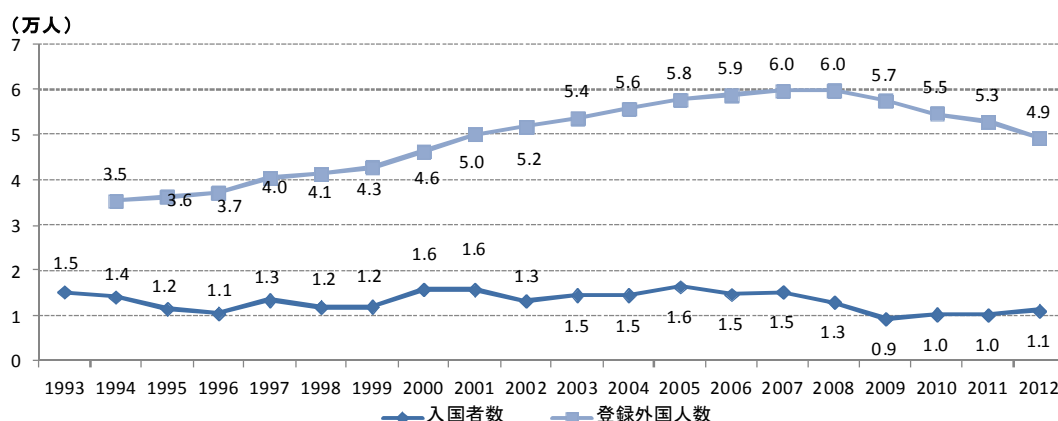
2-1. 在留外国人の概要

(1) ペルーから日本への渡航の傾向

1990年に改正出入国管理法が施行され、日系3世までとその配偶者及び未成年の子を対象とした「定住者」の在留資格が設定されて以降、ペルー出身者、特に日系ペルー人の日本への渡航は急増した。こうした日系ペルー人の多くが「出稼ぎ」を目的としていたが、家族間のつながりが非常に強いため、配偶者や子供など、家族を連れて来日する事例が多い。こうした傾向は日系ブラジル人と同様であるが、来日者数の規模は日系ブラジル人よりも日系ペルー人は小さくなっている。

バブル期には多くの日系ペルー人が来日し、なかでも自動車関連工場等に勤める者が多かったが、自動車産業の労働力需要の落ち込みに伴い、建設業や食品加工製造業、サービス業など、その働く場は多様化した。その後、2008年のリーマンショックに始まる不況により雇用状況が悪化し、日本に滞在する日系ペルー人の数は減少している。

図表 56 入国者数・在留外国人数の推移（ペルー）



出典) 法務省『登録外国人統計』, 同『出入国管理統計』の各年版

図表 57 都道府県別在留外国人上位10都道府県（ペルー、平成24年）

順位	都道府県名	在留外国人数	全国に占める割合
1	愛知県	7,217人	14.7%
2	神奈川県	6,862人	13.9%
3	静岡県	4,986人	10.1%
4	群馬県	4,660人	9.5%
5	埼玉県	3,866人	7.9%
6	栃木県	3,434人	7.0%
7	三重県	3,159人	6.4%
8	千葉県	2,915人	5.9%
9	東京都	1,934人	3.9%
10	茨城県	1,698人	3.4%

出典) 法務省『登録外国人統計』平成24年版

(2) ネットワークとコミュニティ

来日したペルー人の多くは、元来は出稼ぎを目的としていたために、日本においてコミュニティを形成しようとする意識は希薄であった。また、来日している人数も比較的少ないため、在日ブラジル人と比較しても、コミュニティはそれほどできていない状況である。これは来日したペルー人の社会的背景が多様であることも関係している。

また、同じキリスト教であっても、ペルー人にとってカトリックとプロテスタントは明確に区別されており、これらの宗教間のつながりは生まれにくい。

同じ教会に通い、宗教行事をともに行うことによってペルー人同士の互助関係に発展することもあるが、そうしたつながりを持っているのは在日ペルー人全体から見ればごく一部である。一方、日本語学校などでペルー人に限らない外国人同士のつながりが生まれることもある。

また、様々な教会が在日ペルー人に対する支援に取り組んでいるが、それぞれの教会が個別に行っている状況である。組織的ではなく、個人の考え方によるものであるため、司祭や牧師が交代すれば支援の状況が変わることもある。なかには、カトリック、プロテスタントの別なく在日ペルー人の支援に熱心に取り組んでいる教会もある。

2-2. 宗教生活(キリスト教)の概要

(1) 日常生活

1) 衣食住

一般的な信者については、宗教上の事由により日本での衣食住に支障を来すことは余りない。

また、宗教ではなく文化的な習慣として、ペルー人の女兒は生まれてすぐ耳にピアスをすることが多いが、日本の学校ではピアスが禁止されているため、問題になった例もあった。

2) 礼拝

基本的に、カトリックであればカトリック教会、プロテスタントであればプロテスタント教会とそれぞれの日本の教会に通い、そこで行われるスペイン語のミサ・集会に参加することが多い。

カトリックの司祭やプロテスタントの牧師にペルー人はほとんどいないため、フィリピン人やスペイン人の司祭・牧師の協力を得てスペイン語の儀式を行う必要がある。日本では、セニョール・デ・ロス・ミラグロスの祭事に使用する衣や香木、像、絵などが入手できないため、儀式を行う際は本国の専門店から仕入れることになる。

ペルー人が一定以上集中して住んでいる地域（静岡県など）の教会では、ペルー式カトリックの儀式を執り行っている教会もある。

3) 教化育成

在日ペルー人は、日本の教会組織に積極的に関わることは余りなく、教会が定期的で開催するスペイン語のミサや集会に参加する程度であり、日本の教会に所属しているという意識は希薄である。そのため、在日ペルー人は教会の活動への参加や寄附などをしないこともあり、日本人の信徒から苦言が呈されていることもある。

スペイン語を話せる司祭が、スペイン語でミサや集会を開くために教区内の教会を順に回っている地域もある。ただ、それらの司祭は必ずしもペルー人ではない。

(2) 祭事

① 定期的な宗教行事

都市部出身者が多いとはいえ、在日ペルー人は様々な地域から来日しており、町や村ごとに定められた守護聖人の祭りを本国同様に行うことは難しい。そのため、ペルーから国外への移住者の共通の守護聖人であるセニョール・デ・ロス・ミラグロスの祭りが行われている。現在、この祭りは神戸や静岡などで10月に開催されている。

ただし、この祭りを行うには、教会にキリスト像や絵を置かせてもらう必要があるため、教会に理解がなければ難しい。また、ペルーで行われているような、公道など教会

の敷地外に出て十字架につけられたキリスト像を掲げて行うプロセッション（行列）ではなく、ミサのみを行うことが多い。それは、日本でプロセッションを行うことに理解が得られず、必要な調整（教会の理解、地域住民の了解、警察の道路使用許可などを得ること）が難しいためである。過去に神戸でプロセッションが行われたこともあるが、住民から苦情が出たため、その後は行われていない。

② 冠婚葬祭

1) 誕生

在日ペルー人が子供に洗礼を受けさせるか否かは人それぞれであるが、出稼ぎを目的として来日したペルー人は、時間的な制約が大きいことやスペイン語のミサや集会が行われる教会から遠いことなどの理由により、洗礼を受けていない子供もいる。

洗礼の儀式は、ペルーと日本とで大きくは変わらない。

2) 節目

信仰確認のための洗礼についても、受けるか否かは個人によるところが大きい。

3) 結婚

ペルーでは結婚のパーティーがかなり盛大に開かれるが、日本で結婚する場合、その規模などは人によって異なる。ペルー人と日本人の国際結婚であれば、日本に合わせた結婚式を挙げることもある。

4) 葬儀

在日ペルー人には若い世代が多く、葬儀、埋葬に関する例はまだそれほどないが、移住者の遺体の扱いや埋葬方法、場所については課題となっている。

埋葬について、ペルーであれば、教会の納骨堂への納骨、共同墓地への埋葬いずれかの場合が多いが、日本には納骨堂を持つ教会が少ないため、ほとんどの場合、墓地に埋葬されることになる。

図表 58 奇跡の主の祭り (セニョール・デ・ロス・ミラグロス)
(上：大阪府, 下：兵庫県)



提供) 三木英

第 3 部 資料編

資料 1 統計資料

凡例

(1) 各国・地域の宗教人口の留意点

- ・ 国際連合の統計を主として利用し、国際連合の統計に記載のないもの等については各国・地域の公的機関の統計を用いた。具体的には、韓国、ペルーについては国際連合の統計を利用し、台湾、ブラジルについては国・地域の公的機関の統計を用いた。
- ・ 中国については、公的機関による統計がないため、計算していない。そのため、宗教人口の概況については、下記の文献等が参考になる。

清水勝彦 2008『宗教がわかれば中国がわかる』創土社。

- ・ 中国における宗教に関しては、中国の研究機関により毎年刊行されている宗教藍皮書（白書に相当）が参考になる。ただし中国語である。

金沢・邱永輝編 2013『中国宗教報告 2013—宗教藍皮書一』北京：社会科学文献出版社。

- ・ 台湾については、全住民に対するアンケート等の結果ではなく、各宗教施設からの報告に基づく数値である。
- ・ ペルーについては、12歳以上を対象とした統計である。
- ・ 世界の宗教別人口とそのデータの出典及び推計方法に係る研究については、以下の文献が参考になる。

早瀬保子・小島宏編 2013『世界の宗教と人口』原書房。

(2) 在留外国人数、入国者数の留意点

- ・ 在留外国人数については法務省の在留外国人統計（旧登録外国人統計）、入国者数については法務省の入国管理統計を用いた。
- ・ 韓国について、入国管理統計は韓国のみを対象としたものであるが、在留外国人統計は「韓国・朝鮮」を対象としている。
- ・ アジア、南米に含まれる国・地域の詳細については、在留外国人統計（旧登録外国人統計）、入国管理統計の分類を参照すること。

(3) 新しい在留管理制度について

- ・ 平成 24 年 7 月に新しい在留管理制度が導入され、外国人登録法が廃止されたことにより、平成 24 年から統計の対象が変更となった。
- ・ 本書では在留外国人数の経年変化のイメージをつかみやすいように同一のグラフ内に提示しているが、平成 23 年と平成 24 年のデータの比較の際には留意が必要である。平成 23 年までの中国の在留外国人数は台湾・香港を含むが、平成 24 年のデータについては中国、台湾、香港は区分けされている。

1. 各国・地域の宗教人口統計概要

図表 59 台湾の宗教人口（2012年）

宗教名	国全体の宗教人口 (人口に占める割合)
道教	821,271 人 (3.5%)
キリスト教 (カトリック)	400,852 人 (1.7%)
キリスト教 (プロテスタント)	187,493 人 (0.8%)
仏教	165,749 人 (0.7%)
その他	36,839 人 (0.2%)

出典) 『台湾内政統計年報』台北駐日経済文化代表処

(<http://www.roc-taiwan.org/>)

注) 台湾については、全住民に対するアンケート等の結果ではなく、各宗教施設からの報告に基づく数値である。

図表 60 韓国の宗教人口（2005年）

宗教名	宗教人口（人口に占める割合）		
	国全体	都市部	農村部
仏教	10,726,463 人 (22.8%)	8,405,754 人 (21.9%)	2,320,709 人 (26.7%)
キリスト教 (カトリック以外)	8,616,438 人 (18.3%)	7,240,850 人 (18.9%)	1,375,588 人 (15.8%)
キリスト教 (カトリック)	5,146,147 人 (10.9%)	4,454,779 人 (11.6%)	691,368 人 (7.9%)
儒教	104,575 人 (0.2%)	45,547 人 (0.1%)	59,028 人 (0.7%)
その他	377,143 人 (0.8%)	302,009 人 (0.8%)	75,134 人 (0.9%)
特定の宗教でない	205,508 人 (0.4%)	168,555 人 (0.4%)	36,953 人 (0.4%)
無宗教等	21,865,160 人 (46.5%)	17,720,205 人 (46.2%)	4,144,955 人 (47.6%)

出典) United Nations Statistics Divisions, *UNSD Demographic Statistics*

図表 61 ブラジルの宗教人口（2010年）

宗教名	宗教人口（人口に占める割合）		
	国全体	都市部	農村部
キリスト教 （カトリック）	123,280,172 人 (64.6%)	100,055,896 人 (62.2%)	23,224,277 人 (77.9%)
キリスト教 （プロテスタント）	42,379,154 人 (22.2%)	37,924,307 人 (23.6%)	4,454,846 人 (14.9%)
その他	8,875,424 人 (4.7%)	8,409,838 人 (5.2%)	465,587 人 (1.6%)
無宗教等	16,221,049 人 (8.5%)	14,544,608 人 (9.0%)	1,676,440 人 (5.6%)

出典) United Nations Statistics Divisions, *UNSD Demographic Statistics*. Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística *2010 Population Census*

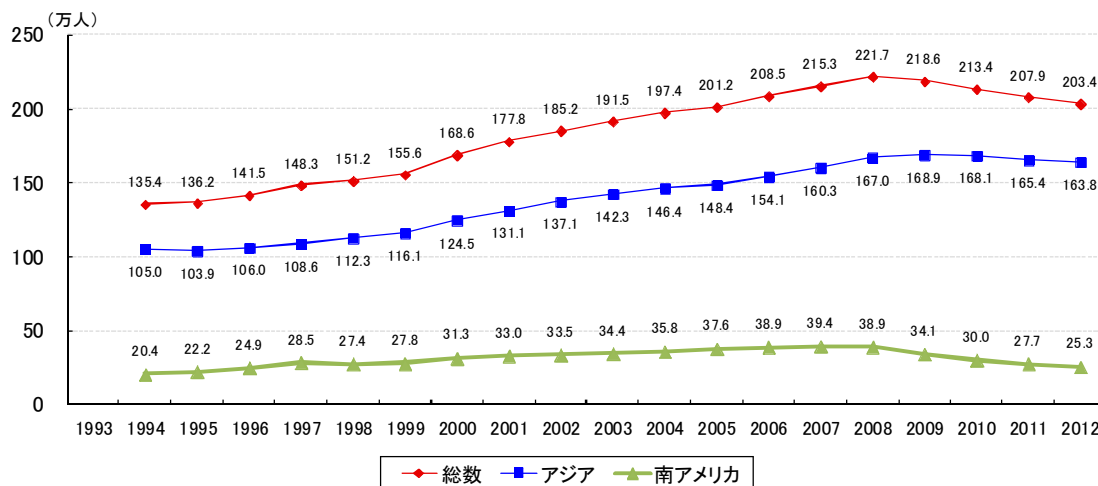
図表 62 ペルーの宗教人口（2007年）

宗教名	宗教人口（人口に占める割合）		
	国全体	都市部	農村部
キリスト教 （カトリック）	16,956,722 人 (81.3%)	13,354,210 人 (82.3%)	3,602,512 人 (77.9%)
キリスト教 （福音派）	2,606,055 人 (12.5%)	1,870,285 人 (11.5%)	735,770 人 (15.9%)
その他	679,291 人 (3.3%)	532,384 人 (3.3%)	146,907 人 (3.2%)
無宗教等	608,434 人 (2.9%)	471,759 人 (2.9%)	136,675 人 (3.0%)

出典) United Nations Statistics Divisions, *UNSD Demographic Statistics*

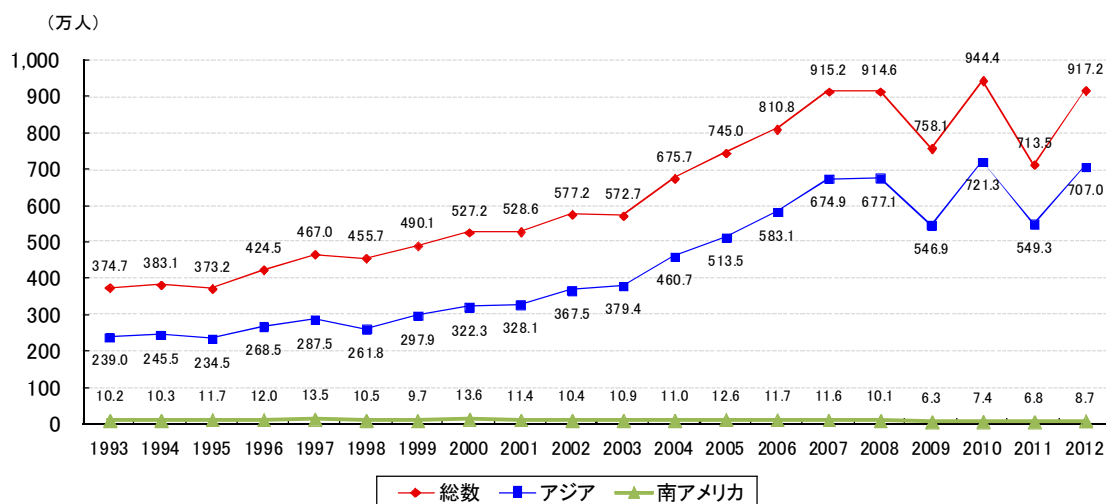
2. 総数及びアジア並びに南アメリカ全体の在留外国人・入国者数の動向

図表 63 在留外国人数の推移（総数・アジア・南アメリカ）



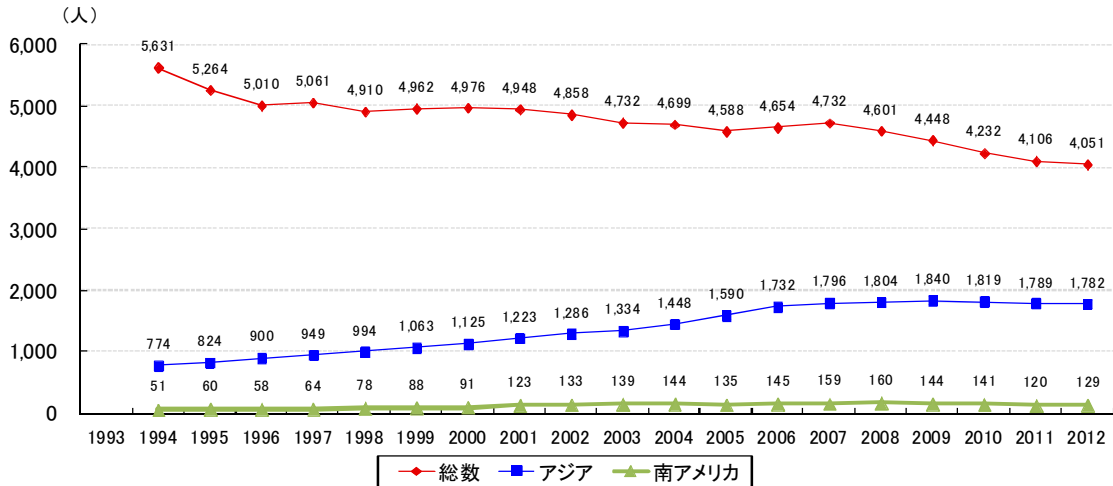
出典) 法務省『登録外国人統計』

図表 64 入国者数の推移（総数・アジア・南アメリカ）



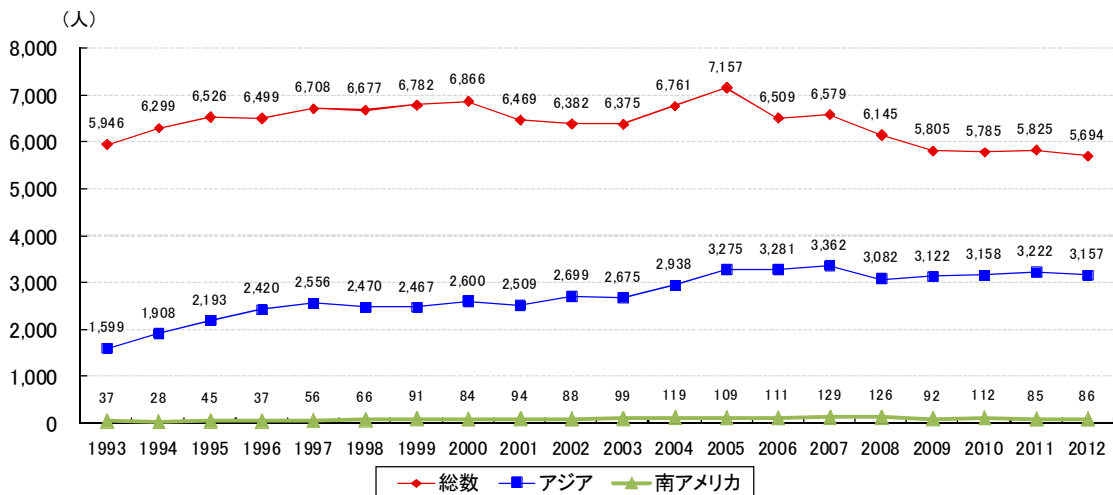
出典) 法務省『出入国管理統計』各年版

図表 65 在留資格を宗教とする在留外国人数の推移（総数・アジア・南アメリカ）



出典) 法務省『登録外国人統計』各年版

図表 66 在留資格を宗教とする入国者数の推移（総数・アジア・南アメリカ）

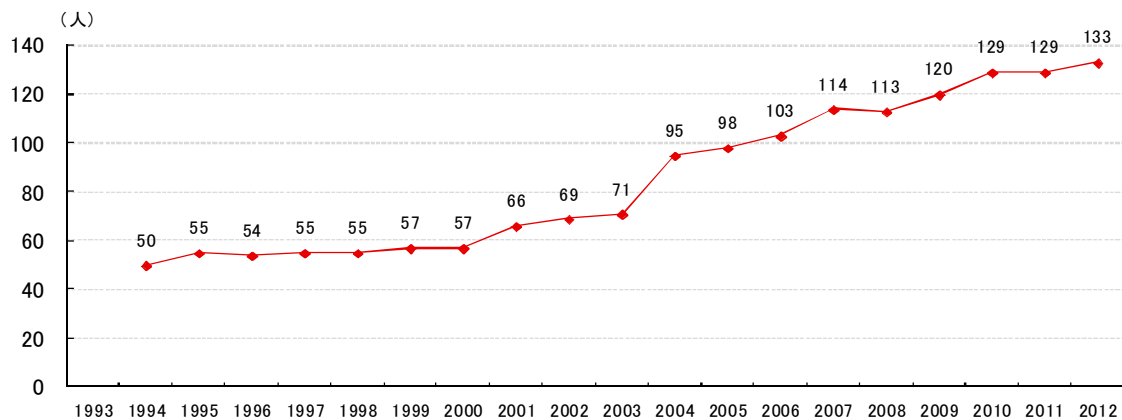


出典) 法務省『出入国管理統計』各年版

3. 国・地域別の在留外国人・入国者数の動向

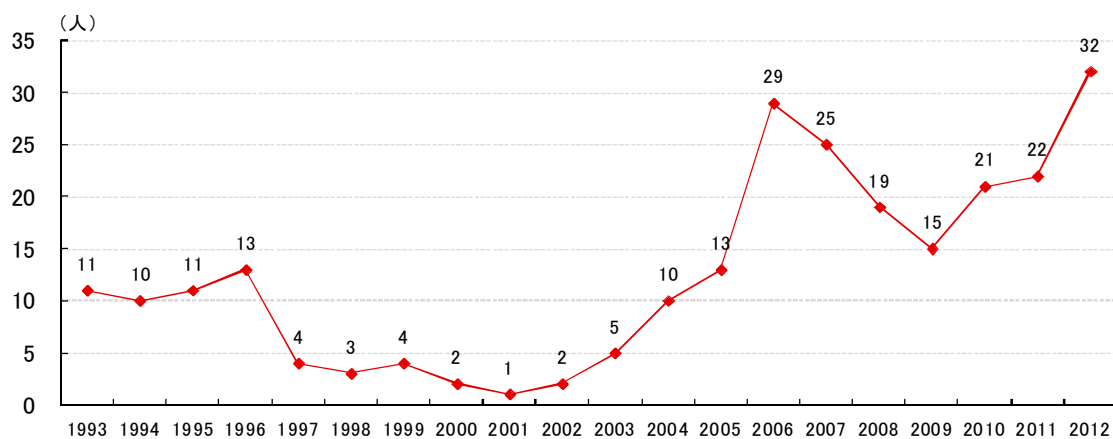
3-1. 中国

図表 67 在留資格を宗教とする在留外国人数の推移（中国）



出典) 法務省『登録外国人統計』各年版

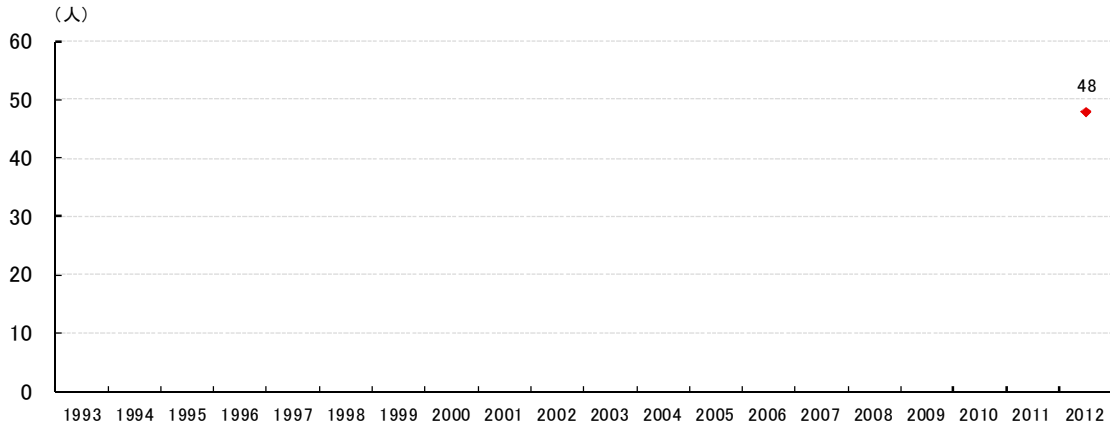
図表 68 在留資格を宗教とする入国者数の推移（中国）



出典) 法務省『出入国管理統計』各年版

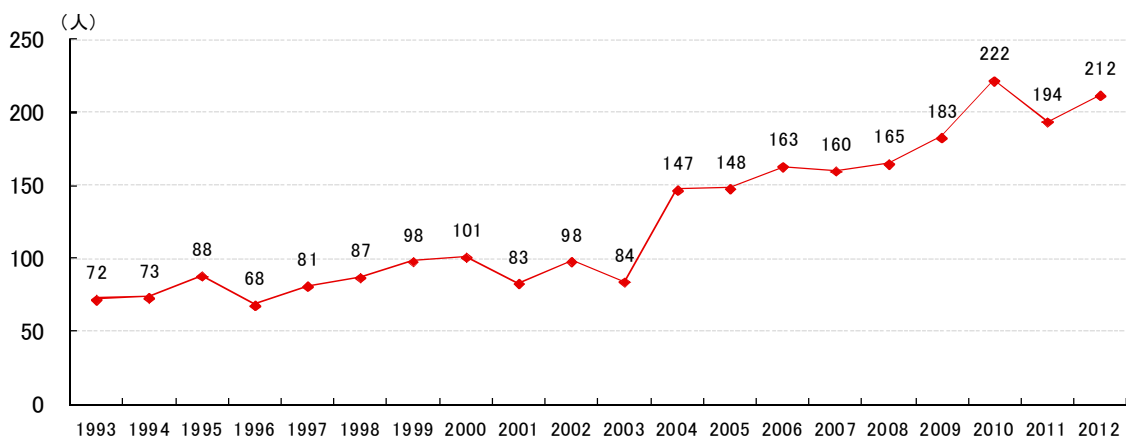
3-2. 台湾

図表 69 在留資格を宗教とする在留外国人数の推移（台湾）



出典) 法務省『登録外国人統計』各年版

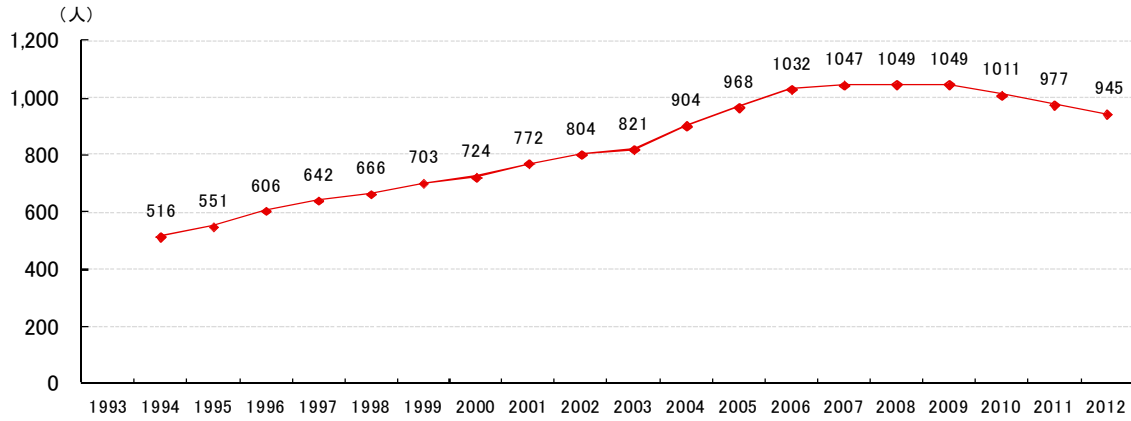
図表 70 在留資格を宗教とする入国者数の推移（台湾）



出典) 法務省『出入国管理統計』各年版

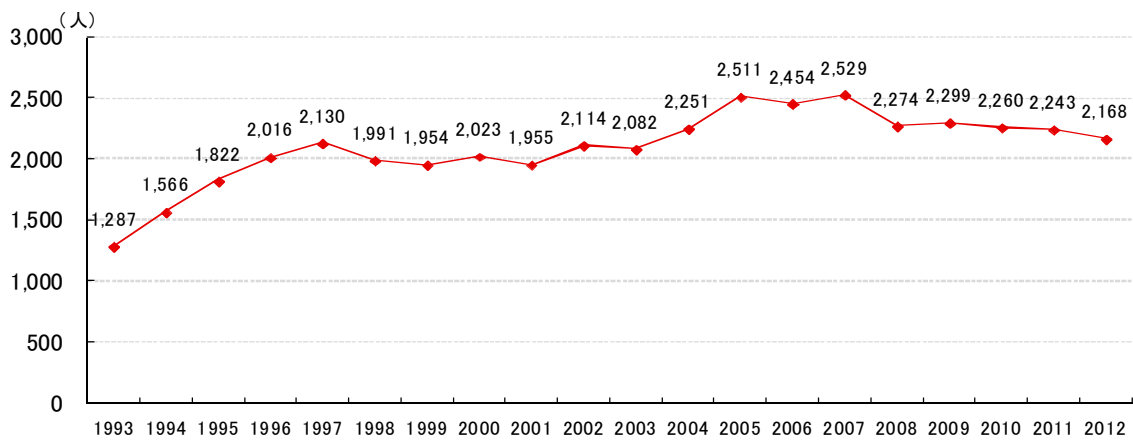
3-3. 韓国

図表 71 在留資格を宗教とする在留外国人数の推移（韓国）



出典) 法務省『登録外国人統計』各年版

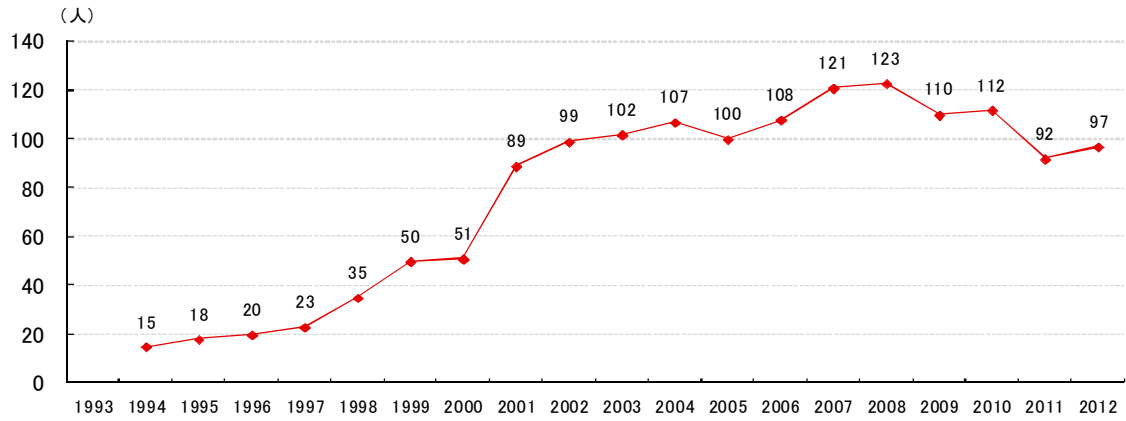
図表 72 在留資格を宗教とする入国者数の推移（韓国）



出典) 法務省『出入国管理統計』各年版

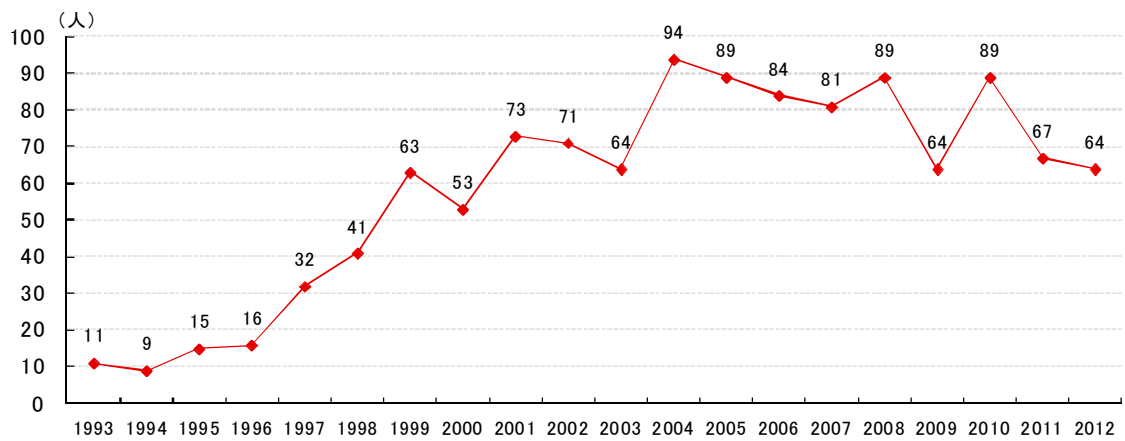
3-4. ブラジル

図表 73 在留資格を宗教とする在留外国人数の推移（ブラジル）



出典) 法務省『登録外国人統計』各年版

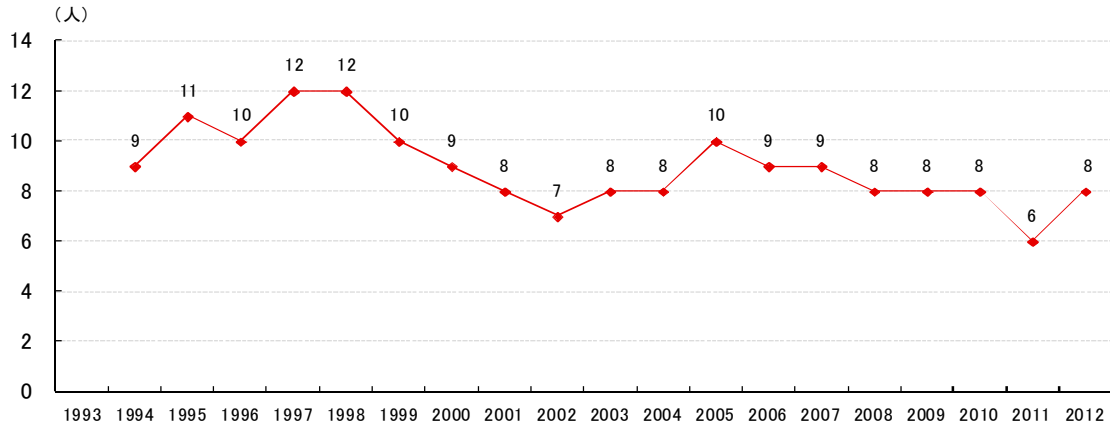
図表 74 在留資格を宗教とする入国者数の推移（ブラジル）



出典) 法務省『出入国管理統計』各年版

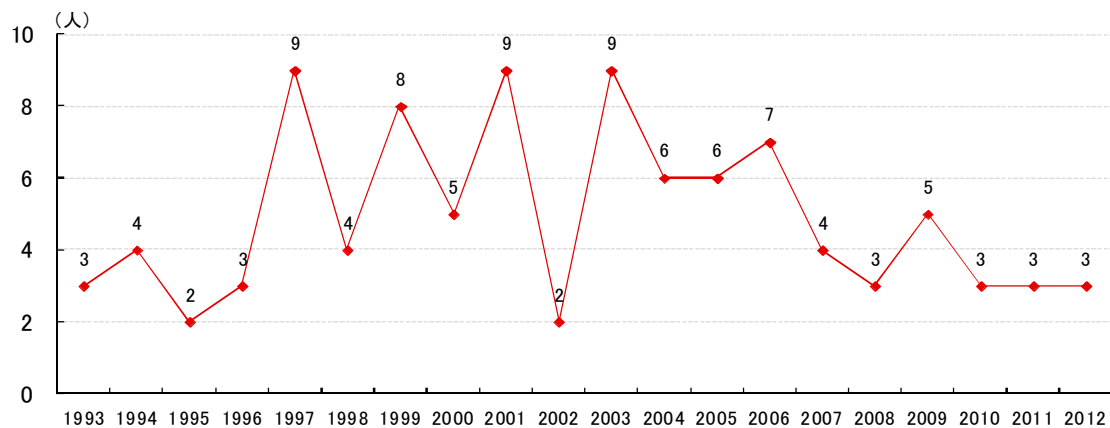
3-5. ペルー

図表 75 在留資格を宗教とする在留外国人数の推移（ペルー）



出典) 法務省『登録外国人統計』各年版

図表 76 在留資格を宗教とする入国者数の推移（ペルー）



出典) 法務省『出入国管理統計』各年版

4. 地域別・在留資格別在留外国人数

図表 77 都道府県別在留外国人数（平成24年）

中国		台湾		韓国・朝鮮				
	都道府県名	在留 外国人数		都道府県名	在留 外国人数			
1	東京都	154,449人	1	東京都	7,720人	1	大阪府	120,889人
2	神奈川県	53,108人	2	大阪府	2,460人	2	東京都	100,684人
3	大阪府	50,581人	3	神奈川県	2,221人	3	兵庫県	49,167人
4	埼玉県	47,267人	4	千葉県	1,396人	4	愛知県	37,404人
5	愛知県	46,949人	5	埼玉県	1,305人	5	神奈川県	31,281人
6	千葉県	41,254人	6	愛知県	966人	6	京都府	29,992人
7	兵庫県	24,338人	7	京都府	749人	7	福岡県	18,010人
8	福岡県	21,169人	8	兵庫県	748人	8	埼玉県	17,805人
9	岐阜県	14,955人	9	茨城県	635人	9	千葉県	16,755人
10	広島県	14,553人	10	栃木県	596人	10	広島県	9,906人
11	茨城県	14,255人	11	福岡県	340人	11	山口県	7,082人
12	静岡県	12,783人	12	長野県	332人	12	岡山県	5,975人
13	京都府	11,970人	13	静岡県	286人	13	静岡県	5,958人
14	長野県	10,432人	14	山梨県	268人	14	三重県	5,564人
15	岡山県	9,508人	15	北海道	256人	15	滋賀県	5,436人
16	北海道	9,330人	16	沖縄県	236人	16	茨城県	5,262人
17	三重県	9,241人	17	宮城県	179人	17	北海道	5,148人
18	群馬県	7,378人	18	群馬県	169人	18	岐阜県	5,148人
19	栃木県	7,264人	19	奈良県	160人	19	奈良県	4,336人
20	富山県	5,701人	20	三重県	139人	20	長野県	4,312人
21	宮城県	5,461人	21	新潟県	138人	21	宮城県	3,989人
22	新潟県	5,232人	22	広島県	114人	22	福井県	2,981人
23	石川県	4,978人	23	岡山県	93人	23	栃木県	2,862人
24	滋賀県	4,904人	24	熊本県	88人	24	群馬県	2,834人
25	愛媛県	4,866人	25	大分県	81人	25	和歌山県	2,593人
26	熊本県	4,668人	26	石川県	78人	26	大分県	2,388人
27	福井県	4,256人	27	鹿児島県	73人	27	山梨県	2,160人
28	大分県	4,050人	28	岐阜県	72人	28	新潟県	2,081人
29	香川県	3,968人	29	岩手県	63人	29	山形県	1,859人
30	山梨県	3,839人	30	滋賀県	63人	30	石川県	1,855人
31	山口県	3,613人	31	長崎県	55人	31	福島県	1,768人
32	福島県	3,533人	32	山口県	53人	32	愛媛県	1,458人
33	奈良県	3,359人	33	福島県	51人	33	長崎県	1,283人
34	長崎県	3,330人	34	富山県	51人	34	富山県	1,237人
35	鹿児島県	3,002人	35	山形県	50人	35	鳥取県	1,194人
36	徳島県	2,916人	36	愛媛県	49人	36	熊本県	1,097人
37	山形県	2,666人	37	和歌山県	47人	37	岩手県	1,024人
38	岩手県	2,387人	38	秋田県	31人	38	香川県	1,007人
39	島根県	2,029人	39	香川県	31人	39	青森県	980人
40	宮崎県	1,853人	40	高知県	31人	40	佐賀県	824人
41	佐賀県	1,824人	41	福井県	25人	41	島根県	814人
42	沖縄県	1,730人	42	青森県	23人	42	沖縄県	752人
43	秋田県	1,608人	43	鳥取県	22人	43	秋田県	695人
44	鳥取県	1,567人	44	宮崎県	20人	44	高知県	640人
45	和歌山県	1,419人	45	佐賀県	17人	45	宮崎県	629人
46	青森県	1,363人	46	徳島県	16人	46	鹿児島県	545人
47	高知県	1,314人	47	島根県	12人	47	徳島県	370人

ブラジル

	都道府県名	在留 外国人数
1	愛知県	50,529人
2	静岡県	29,668人
3	三重県	13,324人
4	群馬県	12,194人
5	岐阜県	11,530人
6	神奈川県	9,144人
7	埼玉県	8,212人
8	滋賀県	8,165人
9	茨城県	6,778人
10	長野県	6,294人
11	栃木県	4,994人
12	千葉県	3,851人
13	東京都	3,217人
14	山梨県	2,971人
15	広島県	2,710人
16	大阪府	2,707人
17	兵庫県	2,706人
18	福井県	2,684人
19	富山県	2,399人
20	島根県	1,233人
21	石川県	966人
22	岡山県	959人
23	奈良県	508人
24	京都府	339人
25	新潟県	318人
26	福岡県	293人
27	沖縄県	252人
28	香川県	236人
29	福島県	187人
30	愛媛県	149人
31	宮城県	143人
32	山口県	141人
33	北海道	128人
34	山形県	80人
35	和歌山県	70人
36	大分県	59人
37	岩手県	54人
38	熊本県	49人
39	徳島県	48人
40	青森県	33人
41	鹿児島県	30人
42	宮崎県	29人
43	長崎県	28人
44	高知県	22人
45	佐賀県	17人
46	秋田県	13人
47	鳥取県	13人

ペルー

	都道府県名	在留 外国人数
1	愛知県	7,217人
2	神奈川県	6,862人
3	静岡県	4,986人
4	群馬県	4,660人
5	埼玉県	3,866人
6	栃木県	3,434人
7	三重県	3,159人
8	千葉県	2,915人
9	東京都	1,934人
10	茨城県	1,698人
11	滋賀県	1,648人
12	大阪府	1,146人
13	兵庫県	883人
14	山梨県	865人
15	岐阜県	863人
16	広島県	622人
17	長野県	566人
18	香川県	399人
19	沖縄県	268人
20	福岡県	222人
21	奈良県	204人
22	岡山県	138人
23	京都府	135人
24	福井県	74人
25	新潟県	70人
26	石川県	67人
27	富山県	44人
28	北海道	38人
29	宮城県	37人
30	福島県	36人
31	大分県	36人
32	愛媛県	30人
33	山口県	20人
34	和歌山県	12人
35	徳島県	11人
36	鹿児島県	11人
37	熊本県	8人
38	山形県	7人
39	高知県	7人
40	青森県	6人
41	岩手県	6人
42	佐賀県	6人
43	長崎県	5人
44	宮崎県	5人
45	秋田県	4人
46	島根県	4人
47	鳥取県	0人

出典) 法務省「在留外国人統計表」(2012年12月末)

図表 78 在留資格別在留外国人数（平成24年）

在留資格 (在留目的)	中国	台湾	韓国・朝鮮	ブラジル	ペルー
総数	652,555人	22,773人	530,046人	190,581人	49,248人
教授	2,085人	89人	943人	28人	15人
芸術	85人	-	42人	10人	-
宗教	85人	48人	945人	97人	8人
報道	30人	6人	48人	2人	人
投資・経営	4,423人	331人	2,941人	19人	5人
法律・会計業務	5人	-	6人	-	-
医療	310人	6人	39人	-	1人
研究	664人	34人	196人	11人	3人
教育	84人	17人	93人	15人	8人
技術	20,924人	335人	5,367人	47人	12人
人文知識・国際業務	33,537人	1,367人	9,755人	78人	10人
企業内転勤	5,257人	350人	1,750人	90人	5人
興行	177人	15人	305人	105人	1人
技能	19,023人	55人	1,394人	41人	23人
技能実習 1号イ	1,950人	5人	66人	1人	-
技能実習 1号ロ	43,763人	-	-	1人	6人
技能実習 2号イ	1,729人	1人	-	-	-
技能実習 2号ロ	63,953人	-	-	-	19人
文化活動	772人	51人	250人	27人	5人
留学	113,980人	4,829人	18,643人	312人	87人
研修	444人	14人	27人	33人	9人
家族滞在	62,359人	871人	15,117人	326人	30人
特定活動	3,143人	1,615人	5,027人	50人	42人
永住者	191,946人	8,684人	62,522人	114,632人	33,330人
日本人の配偶者等	43,771人	2,546人	17,017人	19,519人	2,358人
永住者の配偶者等	8,792人	104人	2,429人	2,067人	1,328人
定住者	27,148人	894人	7,774人	53,044人	11,938人
特別永住者	2,116人	506人	377,350人	26人	5人

出典) 法務省「在留外国人統計表」(2012年12月末)

資料 2 重要用語解説

本書で用いる専門用語については、近年の学界等の動きを考慮して、主流となりつつある用語を使用している。既に定着しているのもあれば、一般社会にはまだ普及していない用語もあるため、確定しているとは限らない。以下に、留意すべき重要用語を列挙するので参考にされたい。

図表 79 重要用語一覧

宗 教	本書の呼称	従来呼称	備 考
仏 教	上座仏教	小乗仏教 上座部仏教	<p>東南アジアのタイ・ミャンマー・ラオス・カンボジア、南アジアのスリランカなどに伝播（でんぱ）した仏教。南伝仏教、南方仏教、テーラワダ仏教とも言う。</p> <p>上座（テーラ）は僧伽（サンガ）の中で尊敬を受けている長老、比丘（びく）の意味。</p> <p>小乗仏教は、現在では用いられない。大乘（大きな乗り物）は大衆の救済を求め、小乗（小さな乗り物）は、自己の救済のみを図るとした、大乘仏教の側からの貶称（へんしょう）であったからである。</p> <p>また以前は上座部仏教と呼称していたが、近年は上座仏教と呼ばれる。</p>
	大乘仏教	大乘仏教	<p>東アジアの中国・朝鮮半島・日本、東南アジアのベトナムなどに伝播する仏教。</p> <p>自己の解脱だけでなく、衆生の救済と成仏を説き、ブッダが入滅した数百年後にインドで勃興（ぼっこう）した。</p>
	チベット仏教	ラマ教 喇嘛教	<p>仏教の一派で、インド大乘仏教と密教が合わさりチベットで発展。現在は中国のチベット自治区と青海省、モンゴル、ネパール、ブータンなどに広範囲に伝播する。</p> <p>ラマ教は俗称で、現在では用いられない。ラマとは、チベット語 bla ma で、師、上人の意味。</p>
キリスト教	キリスト教	基督教	<p>預言者イエスを救世主（キリスト）と認め、その人格と教えを中心とする宗教。仏教・イスラームと並ぶ世界三大宗教の一つ。</p> <p>基督教は、中国に伝播して漢字で表記されたことによる。現在は片仮名表記が一般的だが、漢字で登記する宗教法人もある。</p>
	ローマ教皇 ローマ教皇庁	ローマ法王 ローマ法王庁	<p>ローマ教皇とは、ローマ・カトリック教会の最高位の聖職者。地上におけるキリストの代理。</p> <p>ローマ教皇庁とは、全世界の教会の行政とバチカン市国統治の中央機関。教皇と枢機卿（すうききょう）によって運営される。</p> <p>かつては教皇と法王が混用されていたが、昭和56年のヨハネ・パウロ2世の来日を機会に、日本カトリック司教団が「ローマ教皇」に統一した。「教」が、教皇の職務を表すことも理由にある。</p>

宗 教	本書の呼称	従来呼称	備 考
イスラーム	アッラー	アラー アラーの神	唯一・絶対の神の意味。アラビア語は Allāh。イスラームは一神教であるため、諸神の一つに捉えられる「アラーの神」は誤記。
	イスラーム	イスラム教 イスラーム教 マホメット教 回々教 回教	7世紀アラビア半島でムハンマドが唯一神から啓示を受けて創始したとされる宗教。仏教・キリスト教と並ぶ世界三大宗教の一つ。 アラビア語 al-Islām は、絶対帰依することの意味。 イスラームと表記するのは、より原音に近い表記として、また宗教だけではなく社会・経済・政治なども含むことが理由にある。 かつて中世ヨーロッパでは、預言者ムハンマドが創唱として、マホメット教と呼称された。また明代以降の中国では、回々教（フイフイきょう）、回教（かいきょう）と呼ばれた。これらはかつての日本でも用いられたが、現在は使わない。
	クルアーン	コーラン	イスラームの聖典。コーランは、アラビア語 al-Qurʾān が英語 Koran に転訛（てんか）したものである。
	マスジド	モスク	イスラームの礼拝所、礼拝堂。 モスクは、アラビア語 masjid が英語 mosque に転訛したものである。 日本では、現在でも慣用でモスクは使われており、宗教法人の名称として登記される場合もある。
	ジャーミイ	ジャーミイ	イスラームの礼拝所、礼拝堂。トルコ語の camii は、アラビア語の masjid と同意。ジャーミイで法人登記もある。
	マッカ	メッカ	アラビア半島にあるイスラーム第一の聖地。 メッカは、アラビア語 Makka が英語 Mecca に転訛したもの。西欧語や日本語で人が多く集まる場所の例えでメッカが使われる。 必要に応じて「マッカ（メッカ）」と表記することもある。
	マディーナ	メジナ メディナ	アラビア半島にあるイスラーム第二の聖地。メジナは、アラビア語 al-Madina から英語 Medina に転訛したものである。 必要に応じて「マディーナ（メジナ）」と表記することもある。
	ムスリム	イスラム教徒 回々教徒 回教徒	イスラームの信者。アラビア語 muslim の原義は帰依する者。その女性形は muslima（ムスリマ）。日本語では、分かりやすさを考慮して、イスラーム教徒と書く場合もあるが、誤記ではない。必要に応じて「ムスリム（イスラーム教徒）」と表記することもある。
	ムハンマド	マホメット モハメット	イスラームの開祖で、唯一神のアッラーから選ばれた最後の預言者とされる。預言者は誤記。 マホメットは、アラビア語 Muhammad から英語 Mohammed に転訛したものである。

参考文献

凡例

- ・ 本書の内容に関わる参考文献について、図書館等で閲覧しやすい書籍を中心に選定した。
- ・ 学術雑誌に掲載された論文の場合は、インターネットで閲覧できるものを掲載した。
- ・ その他、参考となるウェブサイトを掲載した。

1. 全般

(宗教関係)

- 井上順孝 2013『要点解説 90分でわかる! ビジネスマンのための「世界の宗教」超入門』東洋経済新報社。
- 世界宗教百科事典編集委員会編, 編集委員長井上順孝 2012『世界宗教百科事典』丸善出版。
- 文化庁編 2005『海外の宗教事情に関する調査報告書』文化庁。
※ <http://www.bunka.go.jp/shukyouhoujin/pdf/h17kaigai.pdf>
本書が対象とする5か国・地域のうち、2か国(韓国, ブラジル)に関する宗教団体の法規, 政教分離, 宗教と社会について報告。
- 松濤弘道 2010『世界葬祭事典 改訂増補』雄山閣。
- 山折哲雄監修, 川村邦光・市川裕・大塚和夫・奥山直司・山中弘編 2012『宗教の事典』朝倉書店。
- 山中弘・藤原聖子編 2013『世界は宗教とこうしてつきあっている—社会人の宗教リテラシー入門—』弘文堂。

(在留外国人と宗教)

- 沼尻正之 2010「越境する世界宗教—グローバル化時代の神々のゆくえ—」『追手門学院大学社会学部紀要』4: 57-72。
※ <http://ci.nii.ac.jp/naid/110007673465>
- 文化庁文化政策課編 2013『在留外国人の宗教事情に関する資料集—東南アジア・南アジア編—』文化庁文化政策課。
- 裴昭(ペ・ソ) 2007『となりの神さま—ニッポンにやって来た異国の神々の宗教現場—』扶桑社。
- 三木英 2012「近年における外国籍住民とその宗教」『宗務時報』114: 1-16。
※ <http://www.bunka.go.jp/shukyouhoujin/shumujiho/pdf/114jiho.pdf#page=5>
- 三木英・櫻井義秀編 2012『日本に生きる移民たちの宗教生活—ニューカマーのもたらす宗教多元化—』ミネルヴァ書房。
- 吉原和男・ペトロ, クネヒト編『アジア移民のエスニシティと宗教』風響社。
- 吉原和男編者代表 2013『人の移動事典—日本からアジアへ・アジアから日本へ—』丸善出版。
- 観光庁「多様な食文化・食習慣を有する外国人客への対応マニュアル」
※ https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/sangyou/taiou_manual.html

(人口統計関係)

- 石川義孝編 2011『地図でみる日本の外国人』ナカニシヤ出版。
- 財団法人入管協会編 『在留外国人統計』財団法人入管協会。毎年発行。

総務省統計研修所編 2013「第2章 人口」『世界の統計 2013』総務省統計局。

※ <http://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2013al.pdf#page=15>

早瀬保子・小島宏編 2013『世界の宗教と人口』原書房。

法務省 「出入国管理統計」

※ <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001035550>

法務省 「在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表」

※ http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html

United Nations Statistics Divisions, *UNSD Demographic Statistics*.

※ <http://unstats.un.org>

2. 宗教別

2-1. 仏教

(辞書)

金岡秀友・柳川啓一監修, 菅沼晃・田丸徳善編 1989『仏教文化事典』佼成出版社。

中村元・田村芳朗・末木文美士・福永光司・今野達編 2002『岩波仏教辞典 第2版』岩波書店。

(単行本等)

沖本克己編 2010『新アジア仏教史 08 中国 III 宋元明清—中国文化としての仏教—』佼成出版社。

木村文輝編 2010『挑戦する仏教—アジア各国の歴史と今—』法藏館。

※ 「韓国—修行と社会福祉に専心する仏教—」(佐藤厚), 「台湾—尼僧の活躍する島—」(菘輪顕量), 「中国—近代化する共産主義国家の仏教—」(足羽與志子)などが所載。

ブラッドリー・K. ホーキンズ 2004『仏教』滝川郁久訳, 春秋社。

宮本啓一 1995『仏教誕生』筑摩書房(ちくま新書)。

2-2. キリスト教

(辞書)

大貫隆・宮本久雄・名取四郎・百瀬文晃編 2002『岩波キリスト教辞典』岩波書店。

(単行本等)

今橋朗・徳善義和 2007『よくわかるキリスト教の教派 新装版』キリスト新聞社。

久米博 1993『ワードマップ キリスト教—その思想と歴史—』新曜社。

2-3. イスラーム

(辞書)

大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編 2002『岩波イスラーム辞典』岩波書店。

片倉もところ編集代表 2002『イスラーム世界事典』明石書店。

塩尻和子・池田美佐子 2004『イスラームの生活を知る辞典』東京堂出版。

(単行本等)

小杉泰・江川ひかり編 2006『ワードマップ イスラーム—社会生活・思想・歴史—』新曜社。

マクスウド, ルカイヤ・ワリス 2003『イスラームを知る 32章』片倉もとこ監訳・解説, 武田信子訳, 明石書店。

(日本のムスリム)

サウジアラビア王国大使館文化部編 2010『日本に生きるイスラーム—現在・過去・未来—』サウジアラビア王国大使館文化部。

※ <http://www.saudiculture.jp/ebooks/nihon-ni-ikuru-islam/>

桜井啓子 2003『日本のムスリム社会』筑摩書房(ちくま新書)。

樋口直人・稲葉奈々子・丹野清人・福田友子・岡井宏文 2007『国境を越える—滞日ムスリム移民の社会学—』青弓社。

ISLAMのホームページ

※ <http://www.dokidoki.ne.jp/home2/islam/>

日本人ムスリムが運営するサイト。イスラーム用語集, 礼拝時刻表, マスジド一覧, 統計から見た日本のイスラームなど。

早稲田大学多民族多世代社会研究所「対日ムスリム調査プロジェクト」

※ <http://imemgs.com/>

日本各地のモスクの実地調査, モスク地域住民の意識に関する調査報告書等が掲載。

ハラール(ハラル)基礎知識(一般社団法人ハラール・ジャパン協会)

※ <http://www.halal.or.jp/halal/>

2-4. 道教

(辞書)

野口鉄郎・坂出祥伸・福井文雅・山田利明編 1994『道教事典』平河出版社。

(単行本等)

野口鉄郎・田中文雄編 2004『道教の神々と祭り』大修館書店。

松本浩一 2006『中国人の宗教・道教とは何か』PHP研究所(PHP新書)。

横手裕 2008『中国道教の展開』山川出版社。

3. 各国・地域事情

3-1. 中国

(1) 全般

アドラー, A. ジョセフ 2005『中国の宗教』伊吹敦・尾形幸子訳, 春秋社。

王曙光ほか著 1998『最新教科書 現代中国』柏書房。

菊地章太 2008『儒教・仏教・道教—東アジアの思想空間—』講談社。

川口幸大・瀬川昌久編 2013『現代中国の宗教—信仰と社会をめぐる民族誌—』昭和堂。

※「道教と現代中国—広東省における地方道教空間の再生と拡大—」(志賀市子), 「仏教と現代中国—浙江省象山县における仏教信仰—」(銭丹霞), 「キリスト教と現代中国—上海におけるプロテスタント教会にみる信仰と成治—」(村上志保), 「イスラームと現代中国—宗教管理機構と清真寺のポリティクス—」(澤井充生)などが所載。

清水勝彦 2008『宗教が分かれば中国が分かる』創土社。

関口泰由 2005「中国共産党政権下における宗教—宗教政策を中心として—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』5 : 68-78。

※ <http://atlantic2.gssc.nihon-u.ac.jp/kiyou/pdf05/5-68-78-sekiguchi.pdf>

武内房司編 2011『越境する近代東アジアの民衆宗教—中国・台湾・香港・ベトナム, そして日本—』明石書店。

土屋英雄 2009『現代中国の信教の自由—研究と資料—』尚学社。

東洋文化研究会編 2005『中国の暮らしと文化を知るための40章』明石書店。

野村浩一・辻康吾・高橋満編 1991『もっと知りたい中国 II 社会・文化編』弘文堂。

外務省 (各国・地域情勢, 中国)

※ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/>

中国国家観光局 (東京)

※ <http://www.cnta.jp/>

(2) 仏教

鎌田茂雄 2001『新中国仏教史』大東出版社。

末木文美士・曹章祺 1996『現代中国の仏教』平河出版社。

陳継東 2010「中国仏教の現在」沖本克己編『新アジア仏教史 08 中国 III 宋元明清—中国文化としての仏教—』佼成出版社, 318-363。

(3) キリスト教

村上志保 2010「中国上海市における外国人プロテスタントの宗教活動」『社会システム研究』20 : 121-141。

※ <http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/ssrc/result/memoirs/kiyou20/4.pdf>

藤野陽平 2013「東アジア圏内で展開する中華系キリスト教—移動と宗教という観点から—」吉原和男編『現代における人の国際移動—アジアの中の日本—』慶應義塾大学出版会, 151-168。

(4) イスラーム

澤井充生 2002「中国の宗教政策と回族の清真寺管理運営制度—寧夏回族自治区銀川市の事例から—」『イスラム世界』59 : 22-49。

澤井充生 2002「死者をムスリムとして土葬すること—寧夏回族自治区銀川市の事例から—」『社会人類学年報』28 : 161-179。

中国ムスリム研究会編 2012『中国のムスリムを知るための60章』明石書店。

土屋紀義 2004「中国のイスラム教徒—歴史と現況—」『レファレンス』54(3) : 38-63。

※ http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/refer/200403_638/063803.pdf

3-2. 台湾

(1) 全般

亜洲奈みづほ 2012『現代台湾を知るための60章 第2版』明石書店。

若林正丈編 1998『もっと知りたい台湾 第2版』弘文堂。

外務省 (各国・地域情勢, 台湾)

※ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/>

交通部観光局 (日本語)

※ <http://jp.taiwan.net.tw/>

(2) 仏教

五十嵐真子 2006『現代台湾宗教の諸相—台湾漢族に関する文化人類学的研究—』人文書院。

五十嵐真子 2006「佛光山からみる、台湾仏教と日本の関係」『アジア・アフリカ言語文化研究』71: 113-128。

※ <http://repository.tufts.ac.jp/handle/10108/20232>

金子昭 2005『驚異の仏教ボランティア—台湾の社会参画仏教「慈済会」—』白馬社。

金子昭 2013「世界最大の仏教 NGO, 震災支援大規模に」『中外日報』1月24日。

※ <http://www.chugainippoh.co.jp/ronbun/2013/0124rondan.html>

林韻柔 2011「台湾仏教の現状について—五大道場を中心に—」『龍谷大学アジア仏教文化研究センター国内シンポジウム アジア仏教の現在 II』龍谷大学アジア仏教文化研究センター, 21-46。

※ http://barc.ryukoku.ac.jp/research/upload_file/2011.10.22%E3%80%80asia%20bukkyo2.pdf#page=25

(3) キリスト教

藤野陽平 2013『台湾における民衆キリスト教の人類学—社会的文脈と癒しの実践—』風響社。

藤野陽平 2013「東アジア圏内で展開する中華系キリスト教—移動と宗教という観点から—」吉原和男編『現代における人の国際移動—アジアの中の日本—』慶應義塾大学出版会, 151-168。

(4) 道教

山下一夫 2009 「台湾における一貫道の展開と変容」田島英一・山本純一編『協働体主義—中間組織が開くオルタナティブ—』慶應義塾大学出版会, 75-94。

山下一夫 2013「台湾社会の持続的発展における民間信仰の意義—媽祖信徒組織を例として」巖網林・田島英一編『アジアの持続可能な発展に向けて—環境・経済・社会の視点から』慶應義塾大学出版会, 199-212。

3-3. 韓国

(1) 全般

伊藤亜人編 1997『もっと知りたい韓国』1・2, 弘文堂。

伊藤亜人監訳, 川上新二編訳 2006『韓国文化シンボル事典』平凡社。

伊藤亜人・大村益夫・高崎宗司・武田幸男・吉田光男・梶村秀樹監修 2014『韓国・朝鮮を知る事典 新版』平凡社。

館野哲編 2012『韓国の暮らしと文化を知るための70章』明石書店。

外務省 (各国・地域情勢, 韓国)

※ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/korea/>

韓国観光公社 (日本語)

※ <http://japanese.visitkorea.or.kr/jpn/>

(2) 仏教

飯田剛史 2002『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学—』世界思想社。

石井公成編 2010『新アジア仏教史 10—朝鮮半島・ベトナム 漢字文化圏への広がり—』佼成出版社。

鎌田茂雄 1980『朝鮮仏教の寺と歴史』大法輪閣。
鎌田茂雄 1987『朝鮮仏教史』東京大学出版会。
川上新二 2009「韓国における仏教と死者儀礼の近年の動き」『国立民族学博物館調査報告』69: 43-63。

※ <http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/handle/10502/1986>

洪南基 2013『朝鮮の仏教と名僧』同時代社。
宮下良子 2012a「在日コリアン寺院」宗教社会学の会編『聖地再訪 生駒の神々—変わりゆく大都市近郊の民俗宗教—』創元社, 173-184。
宮下良子 2012b「在日コリアン寺院の新たなアクション—その先へ—」宗教社会学の会編『聖地再訪 生駒の神々—変わりゆく大都市近郊の民俗宗教—』創元社, 187-214。
宮下良子 2012c「在日コリアン寺院—ローカリティ/トランスナショナルナリティの視座から—」大谷栄一・藤本頼生編『叢書 宗教とソーシャルキャピタル 2—地域社会をつくる宗教—』明石書店, 94-119。

(3) キリスト教

李元範・櫻井義秀編 2011『越境する日韓宗教文化—韓国の日系新宗教 日本の韓流キリスト教—』北海道大学出版会。
李賢京 2012「韓国人ニューカマーのキリスト教」三木英・櫻井義秀編『日本に生きる移民たちの宗教生活—ニューカマーのもたらす宗教多元化—』ミネルヴァ書房, 193-224。
植田千晶 2011「韓国系キリスト教会に集う人々—その生活と信仰の世界—」『市大社会学』12: 65-86。
※ http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/user_contents/kiyo/111E0000011-5.pdf
韓国・朝鮮文化研究会編 2012「特集 キリスト教と韓国朝鮮社会」『韓国朝鮮の文化と社会』11。
鈴木崇巨 2012『韓国はなぜキリスト教国になったか』春秋社。
中西尋子 2013「日本人が入信する韓国系プロテスタント教会の考察」『宗教問題』5: 86-99。
柳東植 1975『韓国の宗教とキリスト教』金忠一訳, 洋々社。
柳東植 1987『韓国のキリスト教』東京大学出版会。

(4) 民族宗教等

林泰弘・李賢京 2011「韓国新宗教の日本布教」李元範・櫻井義秀編『越境する日韓宗教文化—韓国の日系新宗教 日本の韓流キリスト教—』北海道大学出版会, 143-157。
川上新二 2011『死者と生者の民俗誌—韓国・珍島 巫女の世界—』岩田書院。
呉知泳 1970『東学史—朝鮮民衆運動の記録—』平凡社(東洋文庫)。
趙景達 1998『異端の民衆反乱—東学と甲午農民戦争—』岩波書店。
梁銀容 2011「韓国円仏教の日本布教と展望」李元範・櫻井義秀編『越境する日韓宗教文化—韓国の日系新宗教 日本の韓流キリスト教—』北海道大学出版会, 159-174。

3-4. 中南米

アンドラーデ, G.・中牧弘允編 1994『ラテンアメリカ 宗教と社会』新評論。
大貫良夫・落合一泰・国本伊代・恒川恵市・松下洋・福嶋正徳監修 2013『ラテンアメリカを知る事典 新版』平凡社。
藤田富雄 1982『ラテン・アメリカの宗教』大明堂。

ベリマン, フィリップ 1989『解放の神学とラテンアメリカ』後藤政子訳, 同文館出版。
乗浩子 1998『宗教と政治変動—ラテンアメリカのカトリック教会を中心に—』有信堂高文社。

3-5. ブラジル

アンジェロ・イシ 2010『ブラジルを知るための56章 第2版』明石書店。
白波瀬達也・高橋典史 2012「日本におけるカトリック教会とニューカマー—カトリック浜松教会における外国人支援を事例に—」三木英・櫻井義秀編『日本に生きる移民たちの宗教生活』ミネルヴァ書房, 55-86。
高橋典史 2013「外国人支援から見る現代日本の「移民と宗教」—在日ブラジル人とキリスト教会を中心として—」吉原和男編『現代における人の国際移動 アジアの中の日本』慶應義塾大学出版会, 437-456。
星野壮 2012「日系ブラジル人教会と信徒の今後—言語と信仰の継承をめぐって—」三木英・櫻井義秀編『日本に生きる移民たちの宗教生活』ミネルヴァ書房, 87-114。
前山隆 1997『異邦に「日本」を祀る—ブラジル日系人の宗教とエスニシティ—』御茶の水書房。
山田政信 2004「ブラジルにおけるネオペンテコスタリズムの伸展」『宗教研究』78(3): 785-806
※ <http://ci.nii.ac.jp/naid/110002826623>
山田政信 2007「ブラジル・ユニバーサル教会の取り込み戦略」石黒馨・上谷博編『グローバルとローカルの共振—ラテンアメリカのマルチチュード—』人文書院, 142-163。
山田政信 2010「在日ブラジル人の宗教生活」駒井洋監修, 中川文雄・田島久歳・山脇千賀子編『叢書グローバル・ディアスポラ 6—ラテンアメリカン・ディアスポラ—』明石書店, 249-262。
渡辺雅子 2001『ブラジル日系新宗教の展開—異文化布教の課題と実践—』東信堂。
外務省 (各国・地域情勢, ブラジル)
※ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brazil/>
駐日ブラジル大使館 観光案内 (日本語)
※ <http://www.brasemb.or.jp/tourism/tor.php>

3-6. ペルー

寺澤宏美 2013「在日ペルー人コミュニティとカトリック教会」吉原和男編『現代における人の国際移動アジアの中の日本』慶應義塾大学出版会, 423-436。細谷広美 1997『アンデスの宗教的世界—ペルーにおける山の神信仰の現在性—』明石書店。
細谷広美編 2012『ペルーを知るための66章 第2版』明石書店。
三木英・沼尻正之 2012「再現される故郷の祭り—滞日ペルー人の「奇跡の主」の祭をめぐって—」三木英・櫻井義秀編『日本に生きる移民たちの宗教生活』ミネルヴァ書房, 115-138。
外務省 (各国・地域情勢, ペルー)
※ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/peru/>
ペルー観光情報サイト支援委員会作成, 在日ペルー大使館協賛・監修「ペルー観光情報サイト」(日本語)
※ <http://www.peru-japan.org/>

注) 上記の URL は, 平成 26 年 2 月 28 日現在で確認したものである。

在留外国人の宗教事情に関する資料集

—東アジア・南アメリカ編—

(文化庁「平成25年度宗教法人等の運営に係る調査」委託業務)

平成26年3月20日 発行

発行 文化庁文化部宗務課
〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2
電話：03-5253-4111 (代表)
FAX：03-6734-3819

委託先 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社
〒105-8501 東京都港区虎ノ門5-11-2
オランダヒルズ森タワー
